

---

Pravitas World——《異常世界》——

月草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Pravitas World——《異常世界》——

### 【Nコード】

N8448Y

### 【作者名】

月草

### 【あらすじ】

現在この世界は不安定な状態にある。世界を変えうる存在『<sup>アルター</sup>改<sup>ア</sup>変者』と世界を修復しうる存在『<sup>リバイス</sup>修正者』。この世界の裏側では二つの存在が改変と修正を繰り返していた。彼らは『<sup>ブラウイタス</sup>異常』という名の能力を使い、それぞれの望む世界のために戦う。改変と修正、果たしてこの世界の行く末は――

silver編（序章、終章を含め全六章構成）は完結まで毎日更新！12/6ルネの挿絵追加。12/5三章終了、四章シリアス展開へ突入。12/2序章にバトルシーン追加。

## 前書き

本作品をこれから読んでくださる方々、読んでくださった方々、ありがとうございます。

はじめまして、月草です。『つきくさ』と訓読みで言います。『げっそう』と、イカミたいな音読みではありませんのであしからず。

本作は、初めて書いた作品です。なので、文章の不備、誤字、等々があるかもしれませんが、書き続けることで直していく所存であります。それについてのアドバイスや感想などは喜んで受けますので、ぜひお願いします。

この作品で取り扱う『異常』<sup>ブラギタス</sup>というものについてですが、他作品でもあるような魔法、超能力、といったものと同じようなものです。ただ、『異常』とはどういうことなのか。この作品の世界では少し違ったものであると感じてくれるとうれしいです。

ルビのついていない『異常』という単語については普通に『いじよう』と読みます。

まだ構想段階ですが、おそらく長編になると思います。完結に至れるよう努力しますので、初心者ですがお付き合いをお願いします。

## **s i l v e r 編 あらすじ・登場人物（前書き）**

本作のヒロイン、ルネの挿絵を付けてみました。他のキャラは検討中。

## silver編 あらすじ・登場人物

あらすじ

夢も目標もない。頑張りたいことも特にない。空虚な日々を送ってきた少年——白上しろがみ 彩人あやとは今もその日々を送っていた。そしてこれからもそうやって生きていくつもりだった。そんな生き方をしていたから彼は何も得なかった。彼の人生は『白色』だった。

しかし、『銀色』の少女との出会いを経ることで何かが変わり始めた。そして彩人はこの世界の『異常』ブラウイタスの存在を知ることになる。その彼が望む世界とは——

> i 3 6 6 0 3 — 4 5 8 7 <

登場人物

白上しろがみ 彩人あやと  
にいしろうそう

新代荘『〇〇四』号室の住人。帆布南高校はんぶ一年生。

ルネ

何者かに追われている少女。  
ブラウイタス  
異常……『結合』ネクサス・転換系コンバート・B等級ランク

常磐ときわ 幸祐しゆすけ

新代荘『〇〇三』号室の住人。帆布南高校一年生。

新代にいしろ 若葉わかば

新代荘『〇〇二』号室の住人。帆布南高校一年生。

新代にいしろ 藍あい

新代荘『〇〇一』号室の住人。家主。

波瀬はぜ 乃樹のき

彩人のクラスメイト。愛称は『ノツキー』。

雨夜あまや

彩人のクラスメイト。愛称は『雨ちゃんあめ』。彩人のことを『彩とん』と呼ぶ。

炎の男

ルネを追っている謎の男。  
ブラウィタス マインド ランク  
異常……精神系・D等級

木賊こくそく

????

## world

この世界は正常ではない。

ブラウイタス

『異常』がところどころに存在している。

でもほとんどの人々はそれに気付くことはできない。気付いているのは一部の者達だけ。

俺もその一人だった。

だった、というのはもちろん過去の話。

これが俺の運命だったのかもしれない。

ブラウイタス

一度でも『異常』と接触してしまえば、それは知ってしまったという事。知ってしまった以上『異常』に溢れた世界からは抜け出すことができない。

中にはただ夢でも見ていたんじゃないか、といった風に見過ごすことができる者も居るかもしれない。けどそう簡単に見逃すことはできない。

ブラウイタス

世界が正常な部分で生きている人々が『異常』と交わってしまうのは、大部分がもう知らぬ間に関わってしまったているのにまだそれに気付いていない人々。

俺はその中に含まれた。

元からそちら側の世界に関わる運命だった。最初から。

一度だけ。

たった一度で自分のいる世界から違う世界へと変貌してしまう。

俺の場合は高校一年生の冬、雪が舞い散る銀世界で起こった。

それは俺を、俺の世界を変えてくれた彼女との出会いでもあった。この出来事さえなければ俺はまだ普通に世界の裏事情なんかには首を突っ込むことにはならなかったのかもしれない。

でも、俺はこちらの道を選んでしまった。

後戻りはできない。

後悔は無い。

この時の判断は間違っていたはずだ。そう信じなければならぬ。

俺の世界はここから変わってゆく。

いや、それは俺が知らないだけで、もしかしたらもつと前から始まっていたのかもしれない。『前』の俺だったらもしかしたら……。

だが『今』の俺にとってはこれが全ての始まり。

この物語は異常な世界へと誘われる転機の物語であると同時に、これからの物語を彩っていく上での最初の色となる。

銀色。

それは一面の雪の世界のように美しい彼女を連想させる色。

対して白色とは無の色。空虚で。夢くて。何の鮮やかさもない。

一見銀色とは似通っているようにも見えるが、一点において違いがある。

それは輝きがあるかないか。

一度は全てのものを失い、リセットされた白色の少年はその輝きに満ちた少女に魅せられる。そして彼女はその美しい銀色で彼の白いキャンバスを彩る。

これは白色の少年と銀色の少女の物語。

## 序章 銀色の少女

雪の降る夜、一人の少女は雪を撒き散らし、美しく舞う。

彼女の指先がなぞったところからは、氷が顕現する。その氷は羽衣のように彼女に纏わせることで美しさをいつそう際立たせる。

少女が纏った氷の羽衣は、周囲からの攻撃を防ぎ、彼女の身を守る。

「繋げ」

その言葉はとても短く、そして単純であるにもかかわらず、根本を的確に捉えた意味のある言葉を成している。

空中をなぞっていた少女の指が、今度は雪が厚く層となって積もっている地面をこれまたなぞるように優しく触れさせる。雪の柔らかさのように。

美しい。

だが、バラは美しくも棘を持っているように、氷も同じものを持っている。

氷は連山を次々と作っていく。

少女が指先を雪の上に触れさせたところから、周囲の柔らかかった雪を巻き込んでそれは作られる。氷の連山は彼女の前方へ扇形に広がりながら伸びる。

「皆、避ける！」

連山が伸びるその先には、彼女の美しさに遠く及ばない有象無象が広がっていた。その中の一人が、仲間の者に警告を発する。

だが、その連山の襲撃に数人が巻き込まれ、そのものたちの体を跳ね飛ばす。またあるものは凍結に巻き込まれ足を取られた者もいる。

「攻撃の手を休めるな！　すぐに体勢を立て直せ！　標的へ一斉に

ターゲット

総攻撃をしかける！」

まだ動ける者達が全員で少女を取り囲む。そして彼らの攻撃が始まる。

ある者は手から光を放つとそれが光線となつて一直線に少女を狙う。またある者は手から炎を生み出し、それは生み出した者の言う事を聞くかのように、少女へ襲い掛かっていく。

集中攻撃を放たれた少女はというと、その場で体勢を低くして指先を積もった雪に触れるように一回転する。

一回転は円形を描き、連山をその円どおりに連山を広げていき、彼女を中心として氷の花を咲かせる。氷の花びらは羽衣と同様に身を護る役割を果たす。

四方八方からの攻撃は全て見事に花びらによって阻まれ、少女には届かない。

「くそっ！ やはり『ブラヴィタス異常』では標的には届かない！ 捕獲するなどもつてのほかだ！」

「ならば、次は俺たちが行く！ 『アメント』で弱体化させて――

――」  
有象無象が次の攻撃を開始するより先に、少女の反撃が始まっていた。

少女はまた同じように一回転して、先ほどのものに付加させるように氷の花を咲かせる。二つの花びらはやがて一つとなって規模を増して有象無象を蹴散らしていく。

残っていた敵も、地面と彼らの体とを一緒にして凍結させることで身動きを取れなくして、無力化させた。

そうしてようやくこの場が静まりに帰る。

「はあはあ……」

白い息が、煙が煙突から出るかのごとく、口元から出では空気中に馴染んで消えて行く。

少女は息を切らしている。

「くっ……」

突然に頭の中をズキンとした衝撃が走ったので、手が頭を押さえようとせざるを得ない。だが、痛みは一瞬で、抑えたときには引いてしまった後だ。

しかし、まだクラクラ感が消えない。

限界が近い、少女はそう予期する。

「早く……逃げないと……」

彼女は何者かに追われている。

これで三度目の襲撃だった。黒服に身を包んだ者達——男も女もいる。その者達が自分を捕まえようと必死になっている。理由はわからない。

三回の襲撃のどれもこうして、『異常』な力を使って退けてきた。普通では考えられないことを起こすことのできる力。まさしく『異常』なものだ。

狙われている。とにかく逃げなければならない。

だから彼女は雪の降る夜の中で逃げ惑う。

しかし、これの終わりがいつ来るかなど全くわからない。終わりなどあるのだろうか？

それでも、逃げる。逃げ続ける。

「……またなの？」

少女の前にまた黒服の者達が現れる。さっきの者達の仲間だと断定できる。彼らの目を見ればわかることだった。同じく獲物を狙う目だ。

今度の人数は少ない。見たところ七人。しかし、もしかしたらまだどこかに隠れているということも考えられる。

その中の一人は通信機を耳に当てた。

「リーダー。標的<sup>ターゲット</sup>を確認。今すぐ応援の要請を」

すぐに襲いかかってこようとはしない。通信機で話し続けている。

「はい、そうです。追い込みました。廃棄済みの工場です。もう逃げ場はないと考えられます。わかりました。リーダーの到着まで時間を保ちましょう」

通信を切る。それは襲撃開始の準備ができたということだ。

少女は警戒を強める。いつかかってきても対応できるように構えをとる。

「もう抵抗しても無駄だ。ターゲット 標的。お前の逃げ場はもうこれで途絶えた。なるべく大人しくしてもらえると助かるな」

通信をしていた者が少女に向かって話しかける。大人しく降参しろと言っているのだ。

けれども、そんなものすんなりと受け入れられるはずがない。

「断る……」

「そろそろ限界なのだろう？」

少女がたじろぐ。

見透かされていた。

「コンバート ブラヴィタス アルター 転換系の異常を持つ改変者だろ？ 俺の装備系とは違って、コンバート ペリフェラル 転換系には何かしらの転換の元とする素材があるはずだ。だからB等級であってもそう長くは使い続けられまい」

「……」

たとえ限界が近くても少女は力を使う。攻撃してこないならば先手で抑えればいいことだけだ。

少女は手を地について、連山を生み出し先制する。

「どうやらまだ足掻くようだな……。おい！ お前ら！ リーダーたちが来るまで持ちこたえさせるぞ！」

了解、と他の者達が返事をする。

四度目の襲撃が始まる。

「防衛組はアメントを展開！ その間に俺たちで標的の無力化を行う！」

防衛組。

どの人も黒服を着ているため区別がつかないが、その防衛組と呼ばれた彼らは持っている等身大ほどの盾を横一列に並べる。

「！」

盾に向かう氷の連山は、そのまま防ぎきれないぐらいの勢いで迫っていた。だが、盾に近づいていくにつれて勢いは失くし、やがて停止。

盾に直接触れたわけでもないのに。

それは見えない何かによって、連山を作り出している氷の凍結そのものを、妨害しているようだった。

「行くぞ！」

防衛以外の者達が氷の連山を避けて、右と左を迂回しながら接近してくる。

少女は慌てて、攻撃パターンを全方位型に変える。一回転。そして先端が鋭くなった氷の造形物を花のように。

右方からはバチバチ、と音がする。電撃。放電しながら敵の一人がかかってきていた。電撃は迫ってくる氷と衝突。氷の再生と電撃の粉碎が拮抗する。

対して左方からは槍をもった男が迫り来る。先ほどの通信役を担い、また司令塔をしている者だ。

少女が『異常』な力を使っているのと同様、もちろんただの槍ではなかった。鋼の色をした先端が赤みを帯びる。そして氷に突き刺さると、突如、水蒸気が発生した。

「……っ！」

少女はその氷に囲まれた中心から飛び避ける。間一髪だった。その場には槍が氷を突き破って伸びてきていた。

「避けたか……」

槍を携えた男は避けられたからといって攻撃の手を止めない。再び赤みを帯びて輝く槍の切っ先が少女を狙う。

少女の方は後方へと追いやられていく。

彼らの思う壺だった。

「今だ捕獲しろ！」

彼女が逃げた先には、敵の仲間が待機していた。  
罨。

「あつ！」

少女は、刺股さすまたを構える二人によって両側から捕らえられる。その刺股は、一般的なものとはまた違って、二つそろって効果を発揮する。股の部分は簡単には碎かれないように木の幹のように太く、それらの先端はジョイントになっていて二つ合わさるとロックがかかる方式。

両腕と胴を共に封じられた彼女は動きが取れない。

だが彼女には異常な能力がある。それを使えば簡単に抜け出せるはずだった。

「どう……して……？　なんで『結合』ネクスが発動しないの？」

使えなかった。なぜか彼女はその力までもが封じられていた。

槍を持つ男がゆっくりと近づいてくる。

「なんだ……俺たちだけでも捕獲できてしまったか。まあいい。どうだ？　力が使えないだろう。なにせ、ただの捕獲道具ではない。それはアmendを纏っている。アmendとは『異常』フライウィタスを弱体化させる存在。そしてアmendの力が強ければ発動そのものをできなくさせることができる」

少女の目の前に立った槍を持つ男は、無理やり彼女の顎を上げさせる。

「んっ……」

「俺が本当に槍で刺そうとするわけがないだろう。この仕事は殺すことじゃない。捕獲することだ。標的ターゲットを殺してしまうわけにはいかない。さあ、このまま大人しくしててもらおう——」

男が急に少女から離れる。

危険を察したからに他ならない。

「結合！」  
ネクサス

少女がそう叫ぶと、異変が起こったのは足元だった。彼女の足元から凍結が始まっていく。それからの展開は言うまでもない。

刺股で取り押さえていた二人組みはあっけなく凍結に巻き込まれる。彼女の周りでは空から舞い降りる雪が全て雹へと変化した。それらはさらなる凍結への材料となる。

「アメンドを跳ね除けた?! なんとという力だ……。全員この場から離れる! 巻き込まれるぞ!」

槍の男は叫ぶが、防衛組の行動が鈍った。防衛組はその名の通り防御をしてこそ意味がある、それなのに防御より回避を優先させられたのだ。

その一瞬の迷いが彼らの陣形を完全に崩す。それを襲うのは氷。それは今までとは桁違いの力。少女の周囲、全てのものを吹き飛ばし、氷漬けにさせる。

最後まで残っていたのは、槍を持つ男だけだった。それ以外の六名は戦闘不能。

「熱発生でなんとか凌いだのはいいものの……。くそ……。まだこんな力が使えるのか……」

男は地面に型膝を突いた体勢で言った。今戦えるのは自分一人になっ

てしまっているが、笑みを浮かべる。  
ここにいない仲間の到着がそろそろだからだ。それに彼女はもう戦う力を失った様子だったからでもある。

少女の膝が崩れ、その場に座り込む。

(だめ……逃げないと……)  
だが。

「ボルドー!」

遠くで槍の男の名を叫ぶ声がある。

「あいつらようやく来たか。ふん、これで終わりだ。あとは標的<sup>ターゲット</sup>が捕まるだけか」

敵の仲間の到着。

逃げようにも彼らがいるこの控除の敷地は高い塀と、有刺鉄線で囲まれているため逃げられない。

（あれを使えばもう本当に枯渇してしまうかもしれない……。次で最後だとしたら……。会いたい。最後はもう一度あの人と――）

少女は決断する。殺されないかもしれない。しかし、敵の具体的な目的が判明していない以上逃げるしかない。

ある少年とまた会えると思ってここまで来たのだ。それなのに知らぬ者達の襲撃を受けるという結果に至っている。

このまま、捕まってしまうたら願いは叶わない。だから、彼女は力を使う。

（この力を使った後にもう『今』の自分ではいられないかもしれない。でも、会いたいから、お願いあと少し、少しだけまだ『今』の自分でいられますように）

そしてより大きな代償を払わなければならない力を解き放つ。

「我、欠片を繋ぐ者なり！ この指の先に示すは離れし存在！ 今ここに絆を繋ぎて一つと成せ！ ネクサス 結合！」

銀世界をさらに濃い色へと変える光が、少女から放たれこの場を包み込んでいく。

「まだ何かを起こすつもりか！」

「ボルドー！ なんなのこれは！」

光の中でボルドーと彼らのリーダーが言葉を交わす。光が眩しすぎて、お互いの姿は見るできない。

そして、光が収まるとそこには――

「なん……だと……」

少女の姿は無かった。

彼らは驚きを隠しきれず口を開けていたが、リーダーは冷静のままだった。

「うるたえるな！ 標的はあの状態ならば、この地域からは逃げられないわ！ 今すぐ搜索を再開する！ 他の狩獵者<sup>ハンター</sup>に先を取られるな！」

## 一章（１） 新代荘

新代荘。  
にいしろまう

形は直方体。屋根はグリーン、外壁はベージュ色の塗装がされたコンクリート壁。というのはこの新代荘が建つてばかりの頃の事である。現在はそれから約二十年が経ってしまい、屋根も壁も色褪せている。住戸は全部で六つ。各住戸には八畳の部屋とトイレ、流し台、風呂が付いている。基本床はフローリングなのだが、中には畳の部屋もある。一階と二階に三部屋ずつ分かれており、それぞれの階の外に廊下がある。二階に上がるには、建物の横に設置された二階の廊下に繋がる階段を使えばよい。

周辺の土地利用は住宅がほとんどではあるが、他に荒地や田、畑、雑木林など。

交通の便があまりよろしくなくて、新築というわけでもないのですが、おすすめの物件とは言えないだろう。

だがここに住もうと思っても、それは不可能である。

ここは貸間としては使われていないのだ。

現在は家主を除いて三人の高校生が住んでいる。

ただし、居候。

彼らは六住戸ある中でそれぞれ一部屋ずつ使用している。

住居人の状況はこうだ。

この新代荘を道路に面している方から見て、一階の右端『〇〇一号室』は家主——新代にいしろ藍あいの部屋である。他住居人は、一階の中央『〇〇二号室』に新代にいしろ若葉わかば、一階の左端『〇〇三』号室に常磐とこね幸祐こうすけ、二階の右端『〇〇四号室』に白上しらかみ彩人あやこ、となっている。ちなみに階段は右側——『〇〇一号室』と『〇〇四号室』の付近にある。

午後八時。

新代荘の全員が『〇〇一号室』（新代藍の部屋）玄関に集合して

いた。

藍以外の三人とも玄関に立ち止まったままで部屋に上がらず靴をまだ履いている。

玄関はそれほど広くない。三人も居るとなると、とても窮屈だ。しかし、三人はそこから動かなかった。それにはちゃんとした理由がある。

新代荘では各住戸にキッチンはあるが、食事は藍の部屋で取ることが習慣になっている。調理は藍の担当。これはもう何年も続いていることだ。

朝食は毎日七時と決まっており、その時に藍がその日の夕食の間帯を皆に知らせておくという仕組み。またメニューを知らせることもしばしば。

稀に若葉と幸祐（彩人は部活動に参加していないため除く）は高校の部活で帰りが遅くなることがあるので、そういう場合はあらかじめ朝の時点で伝えておく。

今日の朝、晩御飯は鍋をやろうと伝えられていた。

そして予定通り彩人、若葉、幸祐の三人は藍の部屋を訪れた。

今日は鍋。

そう。鍋のはずだった……。

「ごめんね、鍋作れないわ」

この日はあらかじめ晩御飯が鍋であると伝えられていた。鍋は新代荘でちよつとりツチなメニューであり、三人は朝からずっと楽しみに夕食の時間が訪れるのを期待して待っていた。

だがこの一言が彼らの期待をぶち壊しにした。

期待をぶち壊しにした張本人——新代藍。背丈は女性の中でも高い方だろう。すらっとした体型でスタイルも悪くない。光が当たると青黒く見えるさらさらとした黒髪を後ろで紐を使って結んでいる。すっぴん（今日は午前中に鍋の材料の買出しのために化粧をしたが、午後からは化粧を落としている）であるのにも関わらず男性が目を引きくこともある。ぴちぴちの二十代はとうに終えたというの

に、年齢に比べて若々しい。

また新代荘の家主であり、新代荘において子供三人の母親的な役割を担っている。

藍は両手を合わせてお腹を空かしている高校生たちに謝る。

他三名は哑然としていた。

「あのー、もう一回言ってほしいんだけど……？」

呆けたような口調をするのは白上彩人。髪の毛を染めているわけではない。が、生まれつきの茶色っぽい髪の色をしている。どこかしゃきつとしておらず、ふわふわというか、だらけているというかなのような、そんな雰囲気を出している。一言で表せば、だらしない。聞き間違えたかと藍に再確認する。

「だーからー、作れないの」

藍はもう一度、現在の状況を端的に告げる。

「ええつと……じゃあ鍋……というか晩御飯はどうなるのよ？」

藍を問い詰めるように言ったのは新代若葉。やや丸顔気味でいてほがらかさがあり、笑顔の可愛いショートヘアの女の子。高校では水泳部に所属している。

「まあ無理ね」

バツサリと若葉の言葉を切り捨てる。

「無理つて……じゃあ今日の晩御飯は何になるの？」

若葉は代わりとなる他のメニューを訊いてみる。

「だからー、無理なの」

藍の言葉が段々とあきれ口調になってきた。

「まさか……。何も作れないってこと?!」

「その通りよ」

藍は期待を裏切られたあげく、空腹の三人を前にしてさらりと告げる。

「そんなぁ……お母さん」

若葉は希望の途切れと空腹でうなだれてしまった。

ここで未だに冷静に状況を見ていたもう一人の住人が中指で眼鏡

を鼻の上に持ち上げて話し出す。

「他の物が作れないというか……カップ麺とか買い置きは？」

冷静な口調で話すのは常磐幸祐。彩人とは正反对で見た目からしてすっかりしていそうで、頭もよさげに見える。見た目だけでなく、彼はその見た目通りの人物だ。高校では陸上部に所属し、勉強の上に運動もできると、彩人とは正反对である。

幸祐はいたって動じていないようで、別の策を探すために尋ねる。  
「おお、その手がある」

彩人は内心で、ここはしっかりしてこういう時に頼りになる幸祐に任せるべきだと判断して、深く会話に割り込まないようにして言葉を繋げるだけだ。

「カップ麺は買い置きして……あるわね……」

そのような藍が希望の光に満ちた言葉を言った途端に、うなだれていた若葉がぱつと顔を上げる。

幸祐と彩人は胸を撫で下ろす。

「でも作れないわよ」

「……は？」

三人は同時にポカンとした顔になった。

（なんでカップ麺が作れないんだ？）

冷静さを保っていた幸祐でさえ驚いているようだった。

「そ、そう！ 材料はあるのよー」

右こぶしを左の手のひらに、ポン、とたたき藍が開き直った調子で言う。

「えっ！ 材料あるの？」

予想外だ、といったように彩人が応答する。

彩人だけでなく他の二人ともてつきり材料を買い忘れていたから鍋は作れないのだらうと思っていたのだが、どうやらそれが原因ではないらしい。

「……え？ ……というか藍さん？」

ここで幸祐が良い点を突く。

「なんで作れないんだ？」

幸祐が根本的な原因について尋ねる。

「それはですねー。ははは」

藍が笑って誤魔化そうとする。

「誤魔化さない」

幸祐はそれを許さない。

藍がむむっ、と眉間にしわを寄せる。

「それはそのー……」

言い出しにくそうにして顔を背けていたが、幸祐に詰め寄られてはどうしようもない。

「とうとう話す時が来てしまったのね……」

藍は真剣な趣を醸し出す。

「今まで隠し続けていた主人公の秘密をとうとう暴露するみたいなの言い方はやめて」

そして藍は彼らに白状。

「お湯を沸かせないのだから当たり前だわね。おわかり？」

三人とも再びポカンとしていた。

幸祐が一度深呼吸をしてから続けた。

「えーと……、なぜ？」

「まあガスが止まっているのよ」

「まさかガス管が？」

「いえ、この冬の影響で凍ったとかではないわ。そうね……言い方が悪かったかしら。ガスがとまっている、ではなくて、ガスが止められた、ね」

「……止められた？」

「ガス代払ってなかったから止められちゃったの。ほらこの紙」

そう言っただけのポケットから取り出した紙を三人の前に提示する。

そこにはガスの差し止めのことがしっかりと書かれていた。

つまり今日一日中ガスを使うことができない、ということの意味

する。

「藍さんのせいかな！」

「ごめんねっ」

ねっ、と藍は可愛らしく言っただけなのだろうが、他三名にとってそれはただの挑発みたいなようなもので彼らの怒りを買っただけだった。

さしもの冷静沈着な幸祐も藍の態度に少し怒りを感じてきているようで、肩がプルプルと震えている。幸祐の頭で、プツンと何かが切れる音がして、ただならぬ気配が体を包み込む。

（あ、切れるかも）

幸祐が怒りを他人に見せることはめったにあることではない。そんな幸祐は藍にはよく怒りを見せる。今までに何度とか藍の挑発的な態度に踊らされてきている。幸祐が藍と言いつつ場合幸祐には勝ち目はないだろう。幸祐は藍をそれだけ苦手としている。

しかし幸祐も軽く挑発に惑わされないように、こみ上げる怒りを無理やり押さえ込んだ。

（おお、押さえ込んだか）

彩人はそんな風に幸祐に感心していた。

幸祐がふうー、と息を吐く。

あきれてしまったようで難しい顔になる。

とうとう黙りこくってしまった。

幸祐はこのまま藍と話を続けるといつかは絶対に取り乱してしまうと思うて一時退却する。

選手後退、常磐幸祐に代わりまして白上彩人。

「で、どうなの？これから。もしかして今日の夕食は断食？！」

彩人は幸祐の様子を見かねて代わりに言う。

このまま食わずじまいで今日を終えられない。

「責任はちゃんと取ってくれよ！。なんとかして」

しかし返事は……。

「まあ彩人も大胆ね。責任なんて。そういうことを言う年ごろなの

かしら」

藍は幸祐と話していた時と全く態度を変えず、反省の色が見えない。

彩人はこの手の挑発には引っかけからずただ、この人は相変わらず面倒くさい人だ、と思ったのだが口には出さないようにしている。

「まあ……そう……ね。ふーむ」

藍は目を閉じて考えた。

「あつ……。あつた」

「……おお!」「」

彼らはどうせありはしないと既に試合放棄のように諦めていたのが、答えは彼らの考えとは反していたので歓声をあげる。

藍の返事を聞いて、唸っていた幸祐の肩がピクツと動き、若葉と彩人も目を見開いて藍を凝視した。

「しばし待たれよ」

藍はそう言うて部屋の押入れの前へと向かう。

他三名は靴を脱ぎその後を追う。

辿り着いた先は押入れの前。

各部屋に一つずつある収納スペースだ。

そして襖を開けて押入れの中をガサガサと漁りだし、中の物を取り出していく。

押入れの中から色々な物が次々と湧いて出てくる。

わんさか、わんさか。

まるで温泉を掘り当てた時噴水みたいに出てくるお湯のようだ。

一体押入れにどれだけの物を詰め込んでいるんだ、という意見で

三人は一致しているだろう。

若葉がその一つを取り上げる。

「何これ……美容薬品」

それを見た幸祐も一つを取り上げる。

「こっちはダイエット関連だ」

彼らが手に取った以外にも湧き出てきた物はダイエット器具や美

容食品が多くを占めていた。

新事実だった。藍が三人に秘密にしていたことを暴露。

「藍さん。こんな物必要？」

彩人は美容薬品を持ちながら、押入れの下段に上半身を突っ込み四つん這い状態の藍に尋ねた。

すると藍がニヨキニヨキと後ろに下がってきて、彩人の方を見る。

「どういうことかしら？」

「いや、藍さんって綺麗な方じゃないかと思うし……。」

藍は高校生の彼らの倍はすでにある年齢にして、見た目は二十代と判断してしまいそうな若さである。

「だからこういう物は使う必要がないかなーって……」

「うれしいこと言ってくれるじゃない。でもね、それを保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

お腹辺りのお肉を摘んで悲しげな顔をする。

「家でぐうたらしているからじゃ……」

「あ？ なんか言った？ 若葉」

「言ってない！ 言ってない！ ごめんなさい！ 何も言ってません！」

もう何か失礼な発言をしたということを白状していることがまるわかりであった。

「……まあいいわ。で、さっき彩人、うれしいこと言ってくれなかった？ 綺麗だって。でもね、それを 保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

「そうですか……」

「いいこと言ったお礼に美顔スマイルを差し上げよう」

そう言って藍は彩人に向かってはにかんでみせる。

(……)

彩人は目を逸らした。決して面と向かったために恥ずかしくなっ

たわけではない。彼は呆れ顔だ。

「そこ。そつぽ向かない」

（何もうれしいことはありやしない。お礼だったらもう、こうちよつといいもの欲しいよな。今欲しい物つて言ったら特に……。）」

「やつぱりお小遣いつてもらえませんかねー」

彩人は手をこねこねしながら駄目もとで頼んでみる。

彼らはお小遣を貰っていない、いや貰えないという表現の方が正しいだろう。新代荘の家計は少しも裕福ではない。現にガスが止められてしまっている。しかしこれは悪魔でも藍のミスが原因である。そのことを考慮しなくとも新代荘では藍が一人で彩人、若葉、幸祐の三人分の食費、はたまた学費までも支払っていることから察しが付く。これらの莫大な費用は全て貯蓄をすり減らしながら賄ってきた。つまり数年前までは莫大な貯蓄があったことになる。現在の藍の仕事はパートタイムのアルバイトだ。それほど給料が高いわけもなく、生活費として消えてゆく。

「彩人？ この世には不可能なことだってあるのよ。そしてこれが当てはまってしまうの。だからいい加減に諦めなさい。叶わぬ幻想は抱くものではないわ」

思っていた通りの返答だった。

「そうそうお小遣いちょうだい」

お小遣いというワードに引かれて若葉が話に乗っかる。

「さっき言ったことを聞いてなかったの？ そんな余裕はないわ」

「じゃあこれらはどういうことよ！」

ビシッ、と若葉が床一面に置かれた藍の私物を指差す。

「それは………」

藍は一瞬戸惑い。

「生活費よ！」

「どこがよ！ どう見たって嗜好品じゃない！」

「うっ………」

藍が押され気味で一步後ずさりする。このようなことは滅多にな

い。

「金が欲しかったら働きなさい」

「高校はバイト禁止なの!」

「つまり学校はバイトをしないで学業または部活動に熱心に勤めよと。どっかの誰かさんは勤めていないけど。すなわちあなた達には必要ないってことね」

「けちっ!」

藍は口笛を吹いている。

それに異議があつた彩人だが。

「でも藍さん、お……うつ!」

「それ以上言わない」

(いやまだ何も言つてないだろ!)

藍は彩人が話し出した途端に手が既に動いていた。

彩人は口ごもる。言葉が詰まっているのは藍の右手が口をわしづかみに押さえているからだ。

「ふんっ。何を言つたつて無駄よ」

(目つきが怖い!)

「わかった?」

藍はさっきの目つきと一変。笑顔だ。ただし、その笑みも恐ろしさがあつた。

彩人は首を縦に振る。

「よろしい」

藍は手を放して彩人を解放する。

(口止めだ……)

彩人はこれ以上の発言は身の危険がありそうなので、黙りこくる。藍は少しも意思を曲げなかった。

高校生には欲しいものだってたくさんあるだろう。学校の友達とどこかへ遊びに行きたいだろう。

しかし、実質、彼らはあまり文句を言える立場ではないのだ。彼らはあくまでも居候だから……。

「で、何か見つかった？」

何を言っても藍には利かないと分かっていた幸祐が話を本題に戻す。

冷静さを取り戻したようだ。

「ああそうだったわね。一応見つかったことには見つかったわ」

藍は再び押入れに潜り、探し物を中から取り出してきた。

「これよ」

藍が両手で抱えだしてきたもの――カセットコンロだった。

そのカセットコンロはけっこう古いもので周りの塗装が剥げており、実際に使ったことがあったかどうかも定かであった。

「こういう物があつたとは……。これでキッチンのガスコンロの代用ができるな」

幸祐も一安心といった感じた。

「さあさっそく作ろう」

「ようやく飯かー」

「もうお腹ペコペコー」

そのまま彼らは部屋の中央に置かれた丸机に向かい腰を下ろす。  
が。

「そついうわけにもいかないのよねー」

いい流れだったはずが、藍の言葉がせき止める。

「まだ何か？」

彼らはいいい加減呆れていて、聞き返す言葉も適当になってきている。

その原因は藍自身にもあると言える。というか藍の言動にあると言つてもいい。

彼らの空腹は頂点に達しようとしていたため、頭には早く夕食にありつきたいという思考しかなかった。

「またもや同じ壁に阻まれた」

藍は困ったなー、と繭を纏めながら言った。

「まさか……」

最初に理解したのは幸祐だった。彩人と若葉は「何？　どういうこと？」ときよろきよろ幸祐と藍に目を移していた。

「無いのか……」

幸祐の言葉で取り残されていた二人もようやく理解する。

「その通り……」

室内の空気が重くなっていく。

「『ガス』が」

「それはどういう……」

「だからガスボンベが無いってことだよ。ガスボンベが無ければ力セットコンロが使えるわけが無いだろう？」

「そんな……」

「マジかよ……」

若葉はテーブルにうつ伏せになり、彩人は椅子に大きくもたれかかる。

「もういやー、お腹すいたー」

子供が母親に駄々をこねる時のように若葉が手足をジタバタさせる、が、エネルギー不足の為にすぐ力尽きてしまう。

「あなた達！　諦めたくはないわよね？」

「どうせできないじゃない！」

「まあ、どうにかする」

「どうやって？」

「……何とか」

さしもの藍も責任を感じているらしかった。先ほどのふざけた態度を改めて、やや真剣みになっている。

「そうねー何とかなると言えばなんとかかな……かな。それには一

人の尊い犠牲が必要になってしまっけど」

「どういこと？」

「それは――」

■ □ ■ □ ■

彩人は一度自分の部屋に戻り、ニット帽、マフラー、ジャケットのアイテムに、三枚着――一番下はシャツ、中間はスウェット、一番外側には黒のダウンジャケット――という完全装備身になり、右手に傘を持って藍の部屋に再び来ていた。

そして玄関で靴紐を縛りなおしている時に。

「頑張つてね。彩人……」

ハンカチで涙を拭う仕草をし、肩が震えている藍より（涙は流してはいない。そのかわりに笑いを堪えている）。

「いつてらっしやい」

かわいいそうに、と若葉より。

「達者でな」

頑張つてこいよ、と幸祐より。

「……」

対する彩人は無言で立ち上がる。

「ああ、これお金ね」

さっきまで涙を拭う振りをしていた藍は手に持っていたものを彩人に差し出す。

そのまま、彩人は藍が手に持っていた物を手渡された。

彩人はドアノブに手を掛ける。

「くそう……なんで俺が……。じゃあ……行つてきます……」

その時の彩人の顔は実に悲しそうだった。

さあ扉の向こうは銀世界だ。

## 一章（２） 『今』の彼にとっての出会い

辺りは静寂に包まれている。

新代荘周辺はにいしろそと一戸建ての家が何軒か立地し、周囲には田んぼや畑もある。よって新代荘近辺ではそれらが何本もの細い道を網目状に作っている。

彩人あやとはその網目を縫うように右へ曲がり、左へ曲がりを繰り返しながら進んでいく。

「はああ」

ため息混じりに白い息が出る。

（何で俺がこんなことを……。くそ……。藍あいさんめ……）

藍は解決案があると言い切った。

それは次のようなものである。

ガスコンロが押入れから発掘された後、ガスがないと期待を打ち砕くこととなった。

要するにガスボンベを買ってこい、ということだ。

ああついでにこのメモに追加の材料書いてあるからこれも買ってきてね、と藍から伝言もあり、他にも追加でお使いを頼まれていた。（あの時勝っていればこんな事にはならなかったんだが……）

誰がこのお使いをするかを決めるのは、やはり最も公平である『はず』のじゃんけんであった。

結果はパーの人が一人、他三名がチョキ。すなわちパーの一人負けである。しかもこのじゃんけんは一度もあいこにならずに、一回で決着が着いた。

（一人負けってなんだよ）

彩人は不満が大ありだった。

（昨日だってゴミ出しのじゃんけんで一人負けしたし、その前だって……。もしかして、俺が何を出すのかを読まれているとでもいうのか……。一人負けの確率ってどれだけだっけ……。ああもう考え

ても無駄だ！ 数学は苦手なんだよ。まあとりあえずかなり低いのはわかる。それなのに連敗なんて読まれているとするしか言い訳がつかないじゃないか……）」

彩人は基本、面倒くさがり屋だ。お使いなど「めんどくせー」の一言で打ち返すはずなのだが、藍には簡単には逆らわない。いや、逆らえない。

（今回の場合はふざけている。なんなんだこれは。普通のお使いだったらこんなにも今、俺は苦しんでいないはずだ）

こんな悪条件が無ければの話だが。

「寒い……」

小声で呟いた。

体はガクガクと震えている。

ザク……ザク……。

聞こえるのはその音しかない。それほど静かだ。

「どんだけ降ってんだよ……」

雪は傘にどんどん降り積もって重量を増していく。そして傘が重くなってくるたびに傾けて雪を落とす。

「今年は異常じゃねえか？」

彩人は今この状況に至ったことに対する蟠りを、それを晴らす対象が見当たらないがために、つい何かに原因を押し付けようとしてしまう。

だが確かに彩人の言うことにも一理あると言ってもいいだろう。

悪条件の一つ。

二月十二日。

寒気きわまる如月。

まさに冬。

つい三日前から分厚い雪雲が色見全体いろみの空を覆っていて、天に青空を拝めることは出来ず、ただそこには灰色の空があるだけだった。色見とは、新代荘のある帆布地区はんぷに他の七つの地区も含め、全八区から構成される地域のことを指す。色見では例年雪は多少降るが、

今年の冬、特にこの時期は稀に見る大雪になると一月頃からテレビの天気予報でよく言っていた。

その予報は的中し、色見は銀世界と化している。

今日も雪は止む事なく朝からずっと降っており、どんどん積雪して町を白く満遍なく塗りつぶしていく。

しかも夕方から風が強くなっており、昼間で穏やかに降っていた雪は気分を悪くしたかのように表情を変えてしまつて吹雪になってしまっている。

彩人が目指す目的地はちょうど風上にあたり、強い冷気を纏った風は正面から襲う。

それを傘で防ぐように歩き続けているが、傘は上半身全体を守れるか守れないかの瀬戸際で、足には容赦なく吹雪が襲う。  
凜とした冬の空気が彩人を苦しめる。

彩人は傘をやや前に傾けて吹雪を防ぎながら歩く。

ザク……ザク……。

降り積もったまだやわらかい雪が音を立てる。一步一步進むたびに足が埋まるため歩きづらい。  
息を吐くたびに白い息が出る。

「寒い……」

彩人はこの銀世界に放り出されたのだった。

これが藍の言っていた『尊い犠牲』というものだった。

そしてもう一つの悪条件。

時間帯である。

ただいまの時刻は午後八時すぎ。

ただでさえ冬で日照時間が少ない上に、この時間帯ではいっそう気温が下がり、気温は氷点下に達していそうだ。

また、新代荘の最も近くにある（徒歩十分）スーパーマーケット『イトヤスシ』は、とっくに閉店時間を迎えてしまっている。だから、彼の行き先はコンビニ（徒歩二十五分）へ変えざるを得なかった。

往復五十分。

それがこの極寒の中にいなければいけない時間である。

そこに新代荘の立地条件の悪さがにじみ出ていると言えよう。

（ショートカットすれば十五分で着けるか）

新代荘の周辺は細い路地が網目のようになっている。その中でも電灯がある所無い所とあつて、この時間だと電灯がない道は光がないに等しい。ただ中には民家から漏れるわずかな光が照らしている所や、機械だがどこか寂しいようにも見える自動販売機が闇の中にポツンと立っている所もあるが。

それを考えても普通は電灯のある道を行くのだが、その道を選ぶとどうしても遠回りになってしまう。往復一時間以上はその場合を考えた時の所要時間だ。電灯のない道を行けば四十分までに短縮できる。

だが彩人はさらなるルートを知っている。

実際、新代荘からコンビニまで直線距離で考えるとそれほど遠くはないのだ。コンビニと新代荘の間には荒地や田、畑、とくに雑木林などが障害物となっている。そのためそういったものを避けるために迂回して行つたときの所要時間が、先ほどの往復五十分ということになる。

しかし、必ずしも迂回する必要はない。道がないというわけではないからだ。ただし、その道は暗かったり、土手道だったり、しっかりとした整備が行き届いていない道だったりする。

それらをつまいこと利用すると大幅な時間短縮ができる。先に挙げたデメリットももちろんある。

それらの道を入々は好んで通ろうとは思わないだろう。まして知っている人もわずかしらないかも知れない。だから整備が疎かになる。

知る者は少ししかいないという道を、彩人は知っていた。

なぜ知っているのかと言うと、『彩人は暇人だから』という解答が最もしっくりくる。

彩人はよくフラリとあてもなく出かけることがしょっちゅうある（それを散歩として彩人は趣味と主張する）のだ。

高校生だったらゲームセンターとかに行けばいいじゃないかと思うかもしれないが、彼はお小遣いを貰っていないのでただふらふらするしかない。行けるとしたら本屋で、立ち読みをするしかない。

それが習慣になつて暇だから色々な場所へと赴くうちに新代荘周辺の土地は大方記憶してしまっている。

そのように空虚に消費されていく時間の源は彩人が高校の部活動に参加していないなどから出てくる。

彩人は単に言えば面倒くさがりや。

何かを積極的にやることもほとんどない。

ダラダラ、ゴロゴロと日々を過ごす。

それは充実した生活とは言えないと思うだろう。

だが彩人はそれでいいと思っている。

平和で楽に暮らしていれば何も困ることはない。

だから彩人はそんな風に生きる人なのだ。

「こつちか」

彩人は車一台の横幅より少し大きい道路から、ぼろぼろの廃屋や小屋の間の暗い細い道へ入っていく。その細道は車が通れるほどの道幅はない。この道をまっすぐ行くと雑木林にぶち当たる。

「懐中電灯つと」

ジャケットのポケットから懐中電灯を取り出す。

これがないと今から行こうとしている道は歩けない。なにせこれから明かり一つない真っ暗な道を通るのだから。

この辺りに民家は立っていない。

右手には傘、左手には懐中電灯。

どんどん進んでいくとやがて雑木林にぶつかる。

雑木林は人が通れるように道が一本あり、今歩いてきた方向とコンビニのある通りの方を繋いでいる。一応コンクリート舗装がしてあつてガタガタ道ではないので足を踏み崩すこともない。

この道への入り口はどこへ繋がっているかを予測できないため、人は通ろうとしない。彩人以外にこの道を知っていて利用する人はいないかもしれない。

「不気味だな」

ここはさっきの住宅地の静けさとは違って、風に揺られた木々が互いに擦れ合う音、それにしたがい葉に降り積もった雪が落ちる音がある。

その音が恐怖を煽る。

住宅地を歩いていたら時よりも少し歩く速度が上がっていた。雪が歩くのを妨げているにもかかわらず。

五分足らずで雑木林を抜け出した。

雑木林の出口も入り口と同じように民家はない、だがもう少し進むと民家は建ち並んでいる。

民家が建っているがこの道にまだ電灯はない。

だから彩人はまだ懐中電灯で行く先を照らし続ける。

懐中電灯の明かりともう一つ、この道には自動販売機の明かりがある。

この時間帯車道は電灯の付いた電柱が等間隔に連なっている。しかし路地裏は電灯がなく自動販売機のライトだけが照らしていた。

「何かこう……人がいないところにある自動販売機って……」

まるで孤独を感じているかのよう――

などという機械に自分と同じ何かを感じてしまった彩人はその自販機に横を通り過ぎる。

彩人にも暗く細い道は孤独感を感じさせる。

細道の遠くの先は明るくなっている。それはこの道をまっすぐ行くと車道に出るからだ。

（そういえばガスボンベってコンビニで見かけたことあったか？

売ってなかったら……とんだ無駄足になるな。まあ……あるだろう。そうじゃないと俺は恵まれない！）

そんなことを考えているとようやく、ちゃんと白線の引いてある

二車線道路に出た。

この時間でも車は数台走っている。さすがに車道であるので、街灯から放たれるオレンジ色の光が道路全体を照らしている。

（よっしゃあ！ さあ目的地は目の前だ！）

彩人はやる気を高める、が……。

「はあつくしよっんっ！」

鼻を嚙った。



コンビニの店員の「ありがとうございましたー」という挨拶を聞いて店内を出る。

店から出た瞬間、着込んでいるのに服の隙間を縫うように冷気が入り込んできた。

「うつ……」

体が急に固まる。

「はああ」

ため息は空気中で白い息となりしだいに消える。

「萎える」

店内の空間がどれほど冷気からの回避エリアとなっていたかと思わせられる。

彩人は行きに味わった凍てつく町をまた歩かなければならない。

そう思うと帰る気力が削がれる。

コンビニでつい長居したくなって店内を無駄にグルグルと回っていた。店内の暖房は格別の癒しだった。だから先ほどまでの苦闘を忘れかけていたのかもしれない。しかも暖かい所から急に寒い所に出たので冷気がいつそう冷たく感じていた。

あまりの寒さに体を動かす気が湧かなかったが、店の前でいつまでもぐずぐずしているより歩いたほうが体を温められると思い歩き始める。

（この仕事の報酬ぐらいあってもいいよな）

彩人は上着のポケットからコンビ二で買った缶入りのコーンスープを取り出す。藍はご褒美の分までお金を渡したわけではないが、頼まれたものを買ってもお金が余るとわかった彼は勝手に商品を追加した。もちろんこれは新代荘の皆には秘密である。

すぐに呑んで缶を空にしてしまうのはもったいないので、手を温めるために吞まずにとっておく。

（新代荘に着くまでに吞んじゃえばれないし）

幸いなことで、行きよりかは雪の降りが弱まり、風も止んでいた。傘を差さなくてもある程度大丈夫そうである。

だから彩人は差しているよりかは畳んでしまった方が楽なので傘を閉じる。

また行きと同じ細道へと入っていく。

もちろん帰りも同じ裏道を使って時間を短縮する。

「それにしてもよかったな！。注文の品は全品購入完了。売ってないというオチがなくてよかったあ」

彩人は右手に買った物が入っている袋を持ちながら歩み進む。

「帰ったら飯の前に風呂入ろうかな」

彩人はかなり着込んだつもりだったが、さすがに長時間この寒さの中にいたので、体は完全に冷え切っていた。

ちなみにこの時の彩人は気付いていないことだが、ガスが止められているので風呂には入れない、というのはこれから数時間後の出来事である。

暗い道にぽつんと立っている自動販売機が見えてきた。

相変わらずのしんとした中に立っている。

（さぞかし寒いことだよな。お前にしかわからないよな……。あいっらにはわからんだろうな俺の辛さは！）

彩人は自動販売機に語りかけていた。

「なにやってんだ……。俺……」

急にむなしさが沸き立ってきた。

家を出る前はもう八時を回っていたので人の影はない——と彼は思っていたのだが。

ザク……。ザク……。

「ん？」

自分の足音。彩人はそれとは別に、前方から雪を踏む音が聞こえたような気がした。

彩人は一度立ち止まって耳を済ませてみる。

ザク……。

かなり小さい音がする。

やはり彩人の前方に誰かが歩いているようだ。

ザク……。

道は街灯が無いので自動販売機が立っている所以外は真っ暗であり、誰かが歩いている様子は視覚ではわからない。

（へえー。俺と同じようにこの極寒の中を出歩いている人がいるんだな。あの三人はどうせ俺の苦労なんてわからないだろうが、あの人なら分かち合えそうな気がするな）

彩人はその人と同じ境遇にいたので共感できると考えていた。

今度は機械ではなくちゃんと人だ。

（しかもこんな時間に。多分もうすぐ九時になるんじゃないか？

足音からすると一人みたいだな。暗い夜道は危な——）

そんな時、ある事が頭を過ぎった。

（あつそういえば……）

彩人は学校の事を思い出していた。

この前学校で『不審者が出没しているので注意してください。できるだけ一人で下校しないで二人以上で帰りましょう』という連絡を聞いていた。

（まさかね……。ないない）

そんなことはないと考えを変えようとするが、取り除くことのできない不安がそれを妨げる。

（懐中電灯で照らしてみるか……。いや下手に怪しまれると嫌だな……

…)

しばらく立ち止まって耳を澄ましていたが、足音は鳴り続く。どうやらこちらに向かつて歩いていっているようだ。

それがわかると不安がさらに募った。

(でも狙われるのって、あれだろ、女子高生とかだよな。そうとうせ痴漢目的のとかだろ。大丈夫だな、ああ大丈夫なはずだ。ちょっと考えすぎだな)

彩人は歩き始めた。

(別に気にすることもない。普通にやり過ごせばいいんだ。いかな凝り固まった考えは)

ザク……ザク……。

ザク……。

二つの足音は近づいていく。

相手のほうはだいぶ歩くテンポが遅いようだ  
雪を踏む音が次の一歩までの間がかなり長い。

ザク……。

ザク……ザク……。

自動販売機が近づいてきた。反対方向から歩いてくる人もすぐ近くまで来ているようだ。

彩人はとうとう自動販売機の前を通る。

相手を通るのと同じだった。

二人は自動販売機の前ですれ違う。

彩人は横目で自分の右側を通った人を見る。

(そう何の問題も――)

「な――」

彩人は目を見開いて、声を失ってしまった。

彼は自分の目を疑う。

神秘的なものが目に映った、そう脳の中で処理される。  
銀色。

そうそれは雪に劣らないくらいの輝きを放つ。

彩人は目を離すことが出来なかった。

見とれた。この世の美しいものを見たときのように。

だからそれが傾いて倒れ始めているというのに、最初は銀色に輝いたものがなんであるかが理解できなかった。

だが彩人の体は本能的にもう動いていた。助けないと、と体が判断したようだった。

彼はもうすでにすれ違っていたため体を一八〇度回転させる。

その時にはその人は重力にだけ引き寄せられるように地面へと。

（くっ……間に合わない！）

そう判断して、受け止めるためには雪の積もった地を蹴って地面と水平に飛ぶしかなかった。

右腕を目一杯伸ばしてそれを掴んだ。

そのまま空中でその人の正面に入り込み抱きかかえる。

空中キャッチ。

彩人はその下敷きとなって一緒に地へ倒れる。

バサッ、と雪に埋もれ、積もった雪はその衝撃で舞い上がる。

「ふう………」

地は雪で覆われてクッションみたいに柔らかく、白銀色のそれと彩人を雪が同時に包み込む。  
痛みはない。

彩人は体を起こすのと一緒にキャッチしたのも両腕で抱えて起こす。

「――！」

その後だった。彩人が本当に驚いたのは。

銀に輝いたもの、それは――少女。

その少女は、まるで雪に溶け込むことができそうだった。

先ほどの通りすがりに横目でみたもの。

銀。

彩人は改めて見てもまたそう思った。

美しい白<sup>はくせき</sup>皙。彼女の長い銀髪は自動販売機のライトを反射して輝

いている。見たところ彩人より少し年齢は若く、背丈は小さい。色白な四肢。その体はほっそりと、またとても軽かった。

「――！」

だが見とれていたのは一時的だった。

他の重要な事がそれを遮ったからだ。

「おい！ 大丈夫か！」

彩人は彼女に叫んだ。

それは何故か。

銀の少女は衰弱しきっていたからだ。

少女は呼吸しているようだが、手足はピクリとも動かない。

彩人が手袋を外して、少女の頬に触れる。

「冷たい……」

彩人の手はこの寒さで冷え切っていたが、それでも彼女の肌の方が冷たい。

生きてはいるが、彼女からは暖かさ――人の温もりがほとんど感じられない。

そのような事など少女の姿を見れば一目でわかる。

彼女の服装はどう考えてもおかしかった。彼女の着ている服――

服というよりは、汚れてボロボロとなった布切れのようなものが一枚、少女を纏っているだけだった。生地は薄く、寒さを防ぐことなどではしない。

ましてこの寒さだ。体は直に冷えるに決まっている。

「こいつ、どういう頭してやがるんだ！」

彩人にはこんな格好で外に出るなど信じられなかった。

彼は新代荘を出る前に各種防寒アイテムに三枚着という完全装備でこの白銀の世界に赴いているのだから。

「そうだコーンスープ」

コーンスープで少しでも温められればと彼女の頬にあて、それから手に握らせる。さらに着ていた中で一番暖かいダウンジャケットを少女に着せ、その自身の身につけていたマフラーも手袋もつけ、

とにかく体を温めさせてあげられればなんでもよかった。

(この子……なんでこんなところに……)

彩人は少女の頭や肩に降り積もった雪を払ってあげる。

彼が歩いていたのは人影のない裏道だ。

辺りは民家が無いわけではないが、少女がこのような時間、このような場所で、しかも一人で出歩いているなど考えられない。

「これじゃあ、まさに不審者の標的じゃないか」

いくつかの不可解な点。

一つ目はこのようなまるで自分から寒さに殺されてしまいそうな格好。

二つ目は少女がこんな時間に出歩いていること。

三つ目はこの少女自体――

「何者なんだ……」

銀色の少女。

「外国人なのか……？　こんな人、今まで見たことがない……。この町の人じゃないのか……」

少女はいまだ目を覚まそうとしない。

「とりあえずどうにかしないと。このままだと絶対に危ない」

その少女を放っておく事などできない。

彩人はそう思って、少女を背中に乗せ、少女を抱えるために後ろにまわした手でビニール袋を掴む。傘は少女を抱える両腕に乗せた。

「ひかたはいからはあ」

彩人は懐中電灯を口に銜える。

「はいひゅうへんほうははたへはふはった」

懐中電灯が小型で助かった、と言ったのである。

彩人はやるべきことをする。

「はあ。へんひょふりよふらー」

絶対に助けるからな、そう心に決めて彩人は全速力で走り出した。

一章（3） 暖房の効いた部屋で

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

ゴーン！

「遅い！」

九時を知らせる。

机に顎をついた若葉<sup>わかば</sup>が氣力を無くしながらも声を張り上げる。

藍<sup>あい</sup>、幸祐<sup>きゆうけ</sup>、若葉の三人は丸机を囲って座っていた。

「まあ仕方ないんじゃない？ この時間だとあそこのスーパーは閉まっているだろうし」

あのスーパーとは新代荘から最も近くにあり、藍が常連さんとなっているスーパーマーケット『イトヤスシ』の事である。

「あのスーパーの名前って変だよな」

と、幸祐が藍だけに語りかける。

「あれって、ほら、古語でしょ？ 訳すと『とても安い』だよな。

まあ古語は変って言えば変だけど」

「そうねー」

藍も幸祐だけに向けて返事を返す。

「あえて、ああしたってことも……」

「かもねー」

藍は爪切りに集中しているためそっけない返事しかない。

「ねえ？」

と、若葉。まだ机に顎をついている。

「ん？ どうした？」

幸祐が疑問で返す。

「何かさっきからさりげなくスルーされてる気がするんだけど……」

「……」  
「ああ。ちなみに『いとやすし』は訳すと『たいそう簡単』『たいそう安らか』とかいう意味だぞ。値段が『安い』とかの意味はない。その辺に面白みがあると言ったのだが……。」

幸祐はそれ以上言うのは止めた。だからあえて藍だけに話していた。

「へえー……。ま、まああたしも知っていたのよ。ちょっとボケただけ」

「若葉。あんたちゃんと勉強してる？ 来週は学年末テストでしょ？ ああ幸祐、ゴミ箱取ってー」

藍が爪を切り終えた。

「藍さん……ゴミ箱そっち側にあるから藍さんの方が近い」

「だって、お腹がすいて力が出ない」

「全部藍さんのせいだけだね」

「ああ、ちなみにあそこのスーパーは『いとやすし』さんが経営してる」

「そうなん……って、さっきから話をごちゃごちゃにし——

——」

「で、どうなの？ 若葉？」

藍は幸祐の言葉から逃れるように再び若葉に話を振る。

「え？（チツ。うまく逃れたと思ったのに！）」

「前回の後期中間テストだけ？ テストの点数がひどかったわ、全く。せめて一桁はやめなさい」

「なぜそれを？！」

若葉の顎がとうとう机から離れた。

「あなたの部屋にある机の上から右から二つ目の本棚の美術の教科書の間の——」

「もういい……わかった……」

「あらそう？」

彩人、幸祐、若葉はそれぞれ自分の部屋の鍵を持っているが、新

代荘では藍がマスターキーを持っている。

「やっぱりプライバシーの問題とかがあると思うからさ。マスターキーの使用はやめようよ。ね？ そうしない？」

「それはできないわよ。洗濯物取りに行かないといけないし」

新代荘の唯一の洗濯機は藍の部屋にある。高校生三人が学校へ行っている間に藍がそれぞれの部屋から洗濯物を回収してきて、まとめて洗うのである。

「むう……………」

「洗濯しなくてもいいなら別にいいけど」

「わかった……………。そうそう鍵といえばさ。キーホルダーなん——

——」

「で、勉強してるの？」

「くっ（またもかつ！）」

「話を逸らしたところでどうにもならないわよ……………」

「部活頑張ってるよ」

若葉は水泳部に所属している。今は冬なので、部活動はほとんどランニングや筋トレなどの基礎体力作りが秋からずっと続いている。「そんなことわかってるわよ。今はこの場にいな<sup>てい</sup>体たらく坊やとは違うから。勉強も大事にしなさいってこと。来年はあんた達も三年生になるんだから。大学行くなってことなら無理してでもお金をだすわ。それくらいのことはしてあげる」

藍は一旦話を止め少し考える。

「いや、するわ…………… たぶん」

「た、『たぶん』が付くのね……………。わかった。勉強、少しは頑張ります……………」

「一生懸命がんばりなさい」

若葉は答えを返さない。

藍がギロリと目を若葉に向ける。

「わかりました……………」

「わかればよろしい」

「……幸祐には何も言わないの？」

さつきから会話に入っていない幸祐はというと畳の上に寝転がっていた。

「呼んだ？」

幸祐がむくつと上半身を起こす。

「幸祐に言う必要があると思う？」

「……」

若葉は口を紡いでしまった。

「えーと何の話？」

幸祐は状況が掴めていない。

「あなたは心配無用ということよ」

「まあいいか。彩人は？」

「まだよ」

「そうか……」

「もう空腹の峠を越えちゃうー」

若葉がパタンと倒れる。

「そういえば勉強って言葉で思い出したけど……」

「あれ幸祐聞いてたの？」

若葉がさつきまでの幸祐に代わり寝転がって言う。

「いやそうじゃないけど。寝てはいないけど、ただ寝転がってぼんやりとはしてた。それで勉強って言葉が何回も聞こえたから」

「ふーん」

と、若葉。

「それより幸祐。何か言いかけようとしていたんじゃないの？」

「そうだった。学校で先生が言っていたんだけど、最近、不審者が出るって」

「ああ言ってた言ってた」

「若葉、気をつけなさいよ。女の子は特に危険だから」

「その事なんだけどそういう不審者じゃないらしい」

「どういう事？」

「ええと……なんか、俺もどこで聞いたかは忘れたけど……放火魔  
って言っていたような？」

「なんで疑問……こつちが訊いてるんだよー」

「いや確信無いからさ……あ、ああっ！」

幸祐が突然に大声を上げる。藍と若葉は手で耳を押さえる。

「急に一体なんなの？」

「炎で思い出した！　なんでこんな単純なことを忘れてたんだ……。  
鍋を食べる以外の選択肢があつたはずなのに。藍さん？　炊飯器。  
使えるよ、ね？」

「……過去のことよ」

「その開き直りは止めたら？　無駄だと思うよ、お母さん」

ここで三人は心の中で同じことを思っていた。しかし誰もそのこ  
とを口には出さなかった。あまりにもこの場にいない少年を不憫に  
思ったために。

## 一章（４） この世界の異常との遭遇

「はあ……はあ………」

白い息が出ては消える。

新代荘での他三名の会話を聞くことができなかった彩人は、この極寒の中でのお使いに伴う苦勞が必要なかったことなど知る由もない。そんな彼は雑木林に入っていた。

（さすがに女の子を背負って走るのは疲れる……俺も幸祐や若葉みたいに部活動に一生懸命勤しんでいればそんなにつかれないのかなあ）

初めの勢いは何処へ。今は走りから早歩きに変わっていた。

彩人は中学時代から帰宅部の道を貫き通しているので、運動をあまりせず、体力も筋力も幸祐には遠く及ばないし、女子である若葉にまでも負けることだろう。

（バイトできたらいいんだが……）

彩人たちが通っている帆布高校——新代荘から徒歩で通える距離（所要時間三十分）にあり、公立高校なので、経費がいろいろと浮くということに通うことになった——は原則、学生のアルバイト行為を禁止している。だが彩人は一年生の時に一度秘密裏にアルバイトをしていたことがある。その時には学校側には知られることなく続けていたのだが、藍の目からは逃れることはできなかった。彩人は藍からこつ酷くお説教を受けてしまった。それからは彩人だけでなく、若葉と幸祐もそのようなことは口に出さないようにしている。

（いくら貧乏だからってな……でも新代荘の、いや俺たちの現状を踏まえたと言えないのは理解している。理解しているつもりだ……。なのに……なのにだ！あの化粧品やは何だ！ずるい………というかひどい！俺たちには大した娯楽は与えられないのに！帰ったらまたとことん愚痴を言っちゃる）

それにこのお使いの報酬もない。ただ苦しむだけの罰ゲームみたいなものだ。

走るペースがやや落ちてきているが、雑木林の中間辺りまでやって来た。

（まだ半分ぐらいか……。もっとささつと行けるかと思ったのに……）

後ろの少女はまだ起きる様子はない。

（本当に大丈夫なんだろうか？）

と、その時。

「ん……」

耳のすぐ近くで声がした。

そんな近距離で声を出すことができるのは彩人に背負われている少女だけだ。

「起きたのか！」

彩人は目に留まった横に倒れた丸太に少女を座らせてあげる。そして大丈夫か、と声をかけコーンスープの缶を開けてそっと彼女の前に差し出す。

「飲みなよ。暖まるから」

少女はおぼろげな目をしながら缶に両手をのばしてゆっくり掴み、口にそっと運ぶ。すすつと音を立て、少しだけ飲む。

「もついいのか？」

一度缶に口を付けて話したきり動きが止まってしまった。眠いのだろうか。視線は下を向いたままではうつとしてている。

彩人が彼女の目の前で手を振ると、ようやく顔を上げた。

「だれ？」

少女は口を開いた。

「俺？ 俺の名前は彩人だ。フルネームだと『白上彩人』って言うんだけど」

「あ……、や、と」

「ああ、そうだが」

「あ、や……と」

少女はぼうつとしたまま『あやと』という言葉は何度も復唱し続け、だんだんとはっきりとした発音になってくる。

（一体、俺の名前を何回呼ぶのだろうか……）

彼女がその名をはっきりと言えるまで、彩人は彼女を見つめ続ける。

「あやと」

彼女はようやくちゃんと言い終えることができた。そして自分の呟き続けている言葉に突然はっとしたように顔をあげた。

「本当に……あやと……なの？」

彩人が聞いていた呟きはいつしか確認に変わっていた。

（どういうことだ？ これじゃまるでこの子は俺を知っているような）

「ああ、確かに俺は彩人だが……もしかして前にも会ったこと――

」

彼の言葉は途中で遮られた。それは不意に彼の視界の端に今まで無かったものが映ったからであった。彩人の右方数メートル先、ゆらつとした不気味な光が――

ふいに彩人の視線はそちらへ。

その方向を見た途端、目が大きく見開かれる。

光が眼前に迫っていた。そして迫りきった末に衝撃を生む。

「ぐあっ！」

気付いた時には体は吹き飛ばされ、雪の上に突っ伏していた。空気は氷点下にまで冷やされているというのに彩人は背中に熱を感じた。

（なんだ……。なにが……。どうなったんだ……）

思考を張り巡らそうとしても突然のことに頭が追いつかない。

（くそ……寒さのせいで頭がおかしくでもなったのか？ そうだ。さっきの、あの子はどこへ行った？）

雪が積もり氷上のように冷たい地面を這いつくばったまま顔を上

げる。

暗闇の中の転がっている懐中電灯が少女を照らしていた。彼女は彩人の前方にうずくまる様にして雪の覆った地面の上に寝そべっている。

（なんだったんださっきのは……とにかくあの子を起こしに行かないと）

起き上がって慌てて駆け寄ろうとする。

だが、それを妨げる一声。

「ちよっと待ってもらおうか」

（え？）

彩人は足を止めた。

（誰だ……？）

背後からずぶとい男の声。

彩人はその声に反応して瞬時に後ろを振り向いた。そうして彼はようやく気が付く。

「なんだよ、これ……」

彼の振り返った側は明るくなっていた。

ここは民家も近くにない雑木林の真ん中だ。もちろん電灯も立っていない。だから彩人は懐中電灯を使っていた。だがそれとは別に明かりがある。その光は懐中電灯よりも広範囲を照らしていた。橙色の光がゆらゆらと。

炎がその場を照らしていた。

その明るくなった方向から雪を踏みつける音がする。誰かが彩人たちに向かつて近づいてきていることは明らかだった。

だがまだ男の姿は見えない。

懐中電灯は少し離れたところに転がっているため、自分の手元にはなく相手を照らすこともできない。

「だ、誰だ……」

彩人は恐る恐る闇の中に尋ねる。しかし答えは返ってこない。  
「誰だって聞いているんだ！」

彼の声は震えを押さえようともし押さえられなかった。

二回目の質問でようやく答えが返ってくる。

「ふん。そうか。見えていないなら好都合。一般人に危害を加えるつもりはない。言う事を聞けばな」

足音が止まった。炎が彩人の前に確かにいる何者かの姿が浮かびあがる。しかし照らされているのは腰あたりまでで、顔はまだ闇の中で確認できない。

炎。

（そうだ。不審者ってそういえば放火魔とか何とか。まさかこいつが学校で言っていた……。本当に現れるなんて……）

彩人は放火魔もことを思い出したが、男の目的は放火ではなかった。彼の目的は他にある。

「それを置いてここから立ち去れ」

（それ？）

男は『それ』と言った。だが彩人には男の言った『それ』が何を指しているのかわからなかった。

彩人が理解できないという様子を見かねた男がもう一言添える。

「おまえの向こう側に転がっている『それ』だ、『それ』」

後ろを振り返ってもそこにあるのは、彩人の所持品かお使いで買ってきた商品が散乱しているだけ。元々雑木林に何があるわけでもなく、それら以外に男の指す『それ』など見当たらない。

（まさか……）

だがそれら以外にある。いや、いる。

そこには少女が一人。

（まさか……この子のことだっていうのか？）

だがそれ以外に考えられない。

（なんだ？ 少女誘拐？ 放火魔？）

「それ……、それ？」

彩人はさつき男の言った言葉をもう一度思い出していた。

（あの娘のことを『それ』と呼んだ……？ それに『転がっている』だって？）

声の主はまるでこの少女を人ではなく物のように扱っているようだった。この男の目的は彩人にはさっぱりわからなくとも、絶対に渡してはいけないということだけはわかる。

（ひどい……。とにかく何だか危険だ。どうにかして早くこの子を連れて逃げよう……。一気に連れて逃げれば何とかなるか）

彩人はゆっくりと気付かれないように足を反対方向に回したのだが……。

「おい！」

男の声が背後から呼び止めることによって、彩人の動きを静止させる。

「聞こえなかったか？ 小僧。もう一度言っ」

（あつちからは俺の姿が見えているのか……）

彩人は凍ったように動けない。

「その少女を置いて行け」

先ほどよりも強く、相手を従わせるように、彩人に命令した。

（置いていく。この子を……）

彩人は少女に目を移す。

そして手がガタガタと震えていることに気がつく。

（なに？ 俺は一体どういう状況に巻き込まれているんだ？）

頭の中で警告音が鳴り響く。どうしたらよいかわからず次の行動へと移れない。

「遅い、さっさとどけ。でないと消すぞ」

彩人の行動が遅いことに苛立ちを覚えた男はさらに脅しを掛ける。  
（消す……だって？ 殺す……ってことか？ あいつは凶器でも持っているのか？）

もし凶器、たとえばナイフを振りかざされたとして彩人は身を守るものはない。

（傘……）

彩人の足元には傘が一本落ちていた。行きは差していたが、帰りは少女を抱えるため使っていなかった物だ。

（こんなので抵抗できるのか？）

「そうだな。仕方ない、とりあえず見せておこうか」

男の言葉とともに直後、暗闇の中に突如新たな明かりが浮かぶ。それは橙色にゆらゆらと。

（あれは俺が吹き飛ばされた時に見た……）

男の顔が浮かび上がった。けれどその男はサングラスをしていて顔を隠している。まるで正体を明かさないようにするために。

しかし問題はそこではない。

彩人の目はいつぱいに見開かれていた。

（あいつ……どうやって火をつけやがった……。いやそうじゃない。どうなってるやがる……あれは———！）

彩人の視線はその男の左手に向いていた。

その左手は異様だった。異常、だった。

「化け……物………」

彩人は気付いていなかったが、それを見た率直な感想が口からこぼれていた。

「ああ………」

男の方も自身の左手に目を向ける。

「ははは。そうだな」

男は自分の手に火が灯っているというのに何の変哲もないような目で見ている。

「お前達から見れば化け物かもな。どうだ？ おもしろいだろ？」

彩人は言葉を返すことができない。

（何なんだ……あれは？ 絶対におかしいだろ！）

「ビビッちまったか？ それはすまなかったな。さっきのはコイツをおまえの足元に放ったんだ。雪が融けるのは……まあ当たり前か。次はおまえの本体を狙う。だからただでは済まないぞ。もしかした

ら灰なら残るかもしれないな。一般人に知られたからには抹殺する。口封じってやつだな」

ははは、と含み笑いをしながら一方的に語りかける。その時でも男の左手は異様さを保ったままだ。

男の左手——彩人が化け物と称したその左手から火が上がっていた。闇の中で不気味に煌く。いびつな光景。にわかに信じがたい火が上がっている、もしくは燃えているといった表現のほうがぴったり合うかもしれない。だが手が焼けているわけではない。男は火の暑さもどちらにしてもこの事態が異常なことには変わりはない。（逃げなくちゃ……そうだ早く逃げないと……。俺は何をこんなところで立ちすくんでいるんだ！）

とにかく逃げることに、それが最優先事項。

（早く逃げないと殺される！）

彩人は慌てて帰る方向——皆の待つ新代荘——へ走り出そうとするのが、すぐに止まってしまふ。踏み出した右足だけが前に出ている。

（！）

彩人の前には少女が横たわっている。

（くそ……）

彩人はこの状況をとても恐れていた。夢ではないかとも思っている。早く逃げなければ確実にただでは済まない。声の主は少女を置いていけば危害は加えないと言った。少女をまたいででも逃げる事に専念すれば命は助かる。

（死にたくない……）

帰ったら待つてくれている人がいる。彼らはお腹を空かせて待っている。彼らは今自分がこんな状況に置かれているなんて微塵も考えちゃいないだろう。自分は平和な日常が、ただ何事もなく過ごせばそれだけでよかった。だからこんな状況は不幸以外の何物でもない。明日は月曜日だ。明日から新しい一週間が始まる。普通に学校にだって行く。だから自分が死ぬなんて考えられない。ただ日々

を送っていた自分が。

彩人の頭の中でそのようなことがぐるぐると回る。

死にたくない、それは紛れもなく本心だ。

色々な事がぐるぐると。

（それでも）

これから出す決断は彩人にとってよいものになるかどうかかわからない。

それでも。

（置いていけるわけがないじゃないか……）

この状況で女の子を一人置いて逃げるなどということは、彩人にはできなかった。

だが、しかし。

（だけど……だからって俺に何ができるって言うんだ）

相手は化け物だ。手から火を出すなどただの人間ではない。

（奴には俺が見えている。いや、あの懐中電灯さえ消せれば……奴からは見えなくなるかもしれない。あれさえ消せたら逃げられるかもしれない）

もちろん少女を連れて。

「ま……待ってください……いや、ください……。わかった。俺は今すぐここを立ち去る。だから命だけは助けてください」

必死に救いを求めながら、彩人は男の出方に気を配りながらゆっくりと歩き出す。

「そうだな、まあ大目に見てやろう」

男からの返事に彩人は一先ず安心する。

（よし、このまま懐中電灯を拾い上げてあの子を……）

懐中電灯を拾い上げようと手を伸ばした時、熱風が横を遮った。

「熱っ……」

とつさに庇った腕をどけると空けた空間があった。

もちろんさつきまではこんな風になっていなかったはずだ。

そこには木々が何本も立っていて――

今やそこからは煙が立ち上り、積もっていた雪は忽然と姿を消し、残ったのは黒く焦げ炭と化した木々、残り火がところどころにあり、その光景を見えるように照らす。

「あ……あ……ああ……あ……ああ……」

「嘘を付くとは悪い奴だ。俺を見くびりすぎだ。全く、お前の行動などお見通しだよ。所詮、ガキの考えることだ。まあおもしろいから見逃してみただけだな」

再び男の手に炎が灯る。

「これでお前の置かれている状況ははっきりとしたか？お前にはもう助かる余地はない」

彩人はもう絶体絶命だった。唯一の逃げる手段——命の助かる手段は自分の手でつぶしてしまった。

「火葬<sup>かそう</sup>つて、この国もやっていただろう？　ちょうどいいな」

彩人はどんどんパニック状態になっていく。

「骨は残る程度の火力にしといてやるさ。あ、でも痕跡は残したらまずいか」

男の言葉は彩人の耳に入っていないかった。それどころではなかった。今の彩人にはもう何を言っても聞こえない。

「跡形もなく消す。それと後ろのそれはたぶん大丈夫だ。お前だけを消す。それは大事な回収物だからな。それまで消し飛ばしたら、俺が今こうして何のために働いているのかわからなくなる」

彩人はもう終わりだと思った。

（俺って何してたっけ？　俺は藍さんにお使いを頼まれ、コンビニ行って、それで帰ってきてるとこだった……よな？　どこからおかしくなったんだろう……。この子と会ってからか？　俺はただこの子を助けようとしたただけだ。そしたらいきなり化け物みたいなのが現れて……それで……）

「悪いな、小僧」

口先だけの男の言葉に同情の念。そして男は最後の言葉を彩人に告げる。

「灰になれ」

男は彩人に向かって火を宿した手を振りかざした。

膝は制御できなくなった機械のようにガタガタと震え、避けようとする事すらできなかった。膝をついてただ炎が迫り来る方を向いているだけだった。

橙色の光が彩人の視界を埋め尽くす。白い雪と黒い闇を染めるように。そして夜の銀世界は橙色へと塗り替えられていく。

## 一章（5） 彼の答え

（俺……死ぬのか？）

そう思った彩人は目をつぶった。恐怖から目を逸らしたくて。もう助かりようがない。

だが、いつになっても炎の熱は感じられなかった。

（あれ？ 少しも熱くねえ……。むしろ普通に寒いままじゃねえか……。さっきの雪の中を歩いてる時と変わらない。ははっ、もう死後の世界だったりして……。それが死体になって俺自身が冷たくなっただか……）

「防いだだどつ?!」

声が聞こえた。

彩人のものではない。

（何だ？）

驚いた声を上げたのは、炎を手で操る芸当を見せ付けた化け物のような男だった。

彩人はそっと目を開ける。開けることができた。それはつまり。

「生きてる……。俺……生きてるのか？」

（なんで？）

その答えは目の前の光景を見ればわかった。

炎は彩人を襲ってきていた。確かに。

だが。

「どうなっているんだ……」

炎は何か見えな壁のようなものでせき止められているように見える。

そして。

その炎が阻まれている——見えない壁の前に一人。

「……」

そこに立っているのは男ではない、ましてや彩人のはずもない。  
この場にいたもう一人の人物。

「さっきの……さっきの子なのか……」

そう、そこに立っていたのは銀の少女。

長い銀色の髪を揺らしている。

少女は見えない壁に手を当てている、否、かざしているとも言える体勢だった。

「あんなに弱っていたのに……」

彩人の言ったとおり少女は衰弱していた。目を覚ましてもずっとおぼろげな目をしていて意識がはつきりしていなかったというのに。「ふんっ、まだ動けたとはな……。それは予想の範囲外だ。さすがはB等級<sup>ランク</sup>だな。よくもその状態でも俺のD等級<sup>ランク</sup>の攻撃を防ぐことができる。万全の状態だったら俺は返り討ちにあつて、瞬殺されていただろうな」

（なんだ？ 等級<sup>ランク</sup>？）

男の言葉には、その世界に生きる者にしか理解することができない言葉が含まれているようであった。

「ねえ……？」

少女の声だった。小さく、とても弱々しい消え入りそうな声で少女は言った。

彩人は耳を立ててどうにかその声を聞き取る。

「な、なんだ？」

少女の口から出た一言は端的だった。けれどもそれは彩人の胸を強く締め付けた。

その言葉は。

「逃げて……」

（そんな……）

彩人は信じられなかった。確かに彩人にはこの状況をどうすることもできない。しかし、少女の先ほどの容体、消えそうな声、それ

らが少女だつて深刻な状況だということを彩人にわからせる。  
助ける側と助けられる側がいつの間にか入れ替わっていた。  
それは一瞬で。

「君は……君はどうするつもりなんだ！」

一瞬で助けられる側に移つてしまった彩人はとても無力だった。  
ただその異常な光景を見ていることしかできない。

「わからない……私は……いつまでもこうしていられる……わけじや……ない。だから早く。早くしないと……この壁が……もう……」

壁、という言葉に疑問を感じた彩人は目を凝らして見えない壁を見た。いや、完全に見えないわけではなかった。かすかにその場で炎よる光がぼやけて見える。

（溶けている？ あれは氷なのか？）

透明な壁は水滴のようなものがたくさん付いていて、それがたらたらと垂れていく。まさしく氷の造形物。だがそれはしだいに氷壁が徐々に薄くなつていく表れだった。

「鬱陶しいぞあー！」

男が叫ぶと彼の怒りに焚きつけられてかのように火力を増す。  
それにしたがって壁が融ける速さは早まる。

「彩人！ 早く逃げて！」

少女が彩人に告げる。かなり焦っている調子だ。

（……砕ける！）

彩人は直感で悟り少女に飛び掛かる。

壁が碎かれるのはその数秒後だった。炎が壁を突き抜ける。

（避けられるか？！）

壁を突き破った炎は次々と雪を食らい尽くしていく。そして彩人と少女がさつきまで居たところは雪もなにもなくなる。

彩人は少女の体と一緒に道の脇にある。

「だ、大丈夫か……」

彩人は少女に覆いかぶさるような体勢で尋ねる。

「うう……」

「よかった……生きてる……」

さっきの炎によって懐中電灯はお陀仏になってしまった。そのためさっきより暗くはなったが残り火が代わりに照らしている。

二人は何とか炎から逃れることができた。

だがそれで終わりではない。

「せっかくの逃げる機会だったのにな、小僧。それを自分で無駄に  
してしまうとは。もうお前が灰になるまでの時間は少ない。だから  
少し与太話でも混ぜて生きる時間を延ばしてやろう。小僧、お前は  
さっき俺のことを『化け物』と呼んだな？」

「……それがどうした」

「それも同じだ」

男は少女を指差す。

「この子も同じ……」

「そうだ。同じだ。この世界の異常。『異常』を。見ただらう？」

ブラウイタス

それがさっき氷の壁を作って俺の炎を防いだのを。だからそれもお  
前の言う『化け物』だ。まあ正確には『化け物』ではなく『アルター改変者』  
なのだがな。それを踏まえた上でお前はそれをどう思う？」

「……どう……思うだと？」

「危険だとは思わないか？」

根本的なことは男と少女は変わらない。どちらも同じ。普通では  
ない。異常だ。

「でも……」

彩人は唾を一飲み。

「この子は……違う」

「なぜ？」

「それは……」

彩人は返す言葉に困ってしまう。

「違わなくはない。同じ存在だよ、それは」

「……」

「所詮俺たちの生きる世界はお前達、一般人とは違う。じゃあそれ

はその中に入るか？ 入らないだろう。常識、法則、そんなものから外れたそれも俺たちの世界にしか入ることしかできない。お前はそれをどうするつもりだ？ お前達の世界で生きていくことなどできはしない」

「俺は……」

「情けをくれてやる。もう一度だけお前に選択肢をやろう、最後のだ。お前の命を守るか、それを守るか、お前はどちらを選ぶ？」

「俺は……」

彩人に与えられた最後のチャンス。男は少女を素直に渡せば命をとるまでのことはしない。少女を引き渡したら、醜く情けない姿を晒しながら逃げることになる。男の目的はわからずとも、そうすれば一人の少女を自分の身代わりにしたことだ。

だがこの機会を逃せばこの場で死ぬ。

（俺はやっぱ死にたくない）

真っ白な人生を送ってきたにも関わらず、これからもそのような空虚な日々を続けたいと思っているのだ。生きたいと思っているのだ。理由もなく。何も得ることはできないわかっていながら。

死にたくない。

生きたい。

だが。

これは彩人自身も本当にわからないことだった。誰かが彼に囁いているようだった。そして彩人自身もその囁きの選択は正しいと思えてしまう。

この選択で、もし違うほうを選んでいればこれからもずっと変わらない日々を送っていたのかもしれないのに。だがこの時の彼には初めから選択肢などなかったのかもしれない。『前』の彼でなくとも、八年前の『あの時』から答えはもう決まっていたのだとしたら。『俺はやっぱりこの子を守る』

それが彩人の出した答えだ。この答えが彼に『変化』をもたらず。（俺はこの子を守らなければならない。そんな気がする。そんな気

がするんだ！)

彩人はこの少女にはなぜか懐かしさを感じていた。だがそのようなことはあるはずが無いと改める。

「そうか……」

言葉とともに炎が出現。

「残念だ。お前達の世界とこつも触れ合ってしまったのだな。だいぶ回り道をしてしまったようだ。さっきのお前が言った言葉を忘れるな。それがどういう答えかちゃん理解したつもりで答えたはずだからな。もう容赦はしない」

男は無防備な二人に近づいていく。

「早く逃げるぞ」

彩人が少女の手を引つ張って立ち上がらせるために、手をつかんだその時。

(なんだこれ?!)

頭か体か、何かがダイレクトに流れ込むような異様な感覚が彩人を包んだ。

「次は先程みたいにうまくいかないぞ？ もうそれは力を使えないだろうからな。これで本当に最後……」

男は異変に気付く。表情が真剣な顔つきになる。

警戒しろ。

彼の直感がそう告げた。

「なんなのかわからんが……さつさと片付けた方がよさそうだ」

男の手に炎が灯る。今度の炎は今までの物とは形状が異なる。ただ手から燃え広がっている炎は徐々に細長くなっていく。最終的には矢のような形になる。今、炎を普通に放つたら少女までも巻き込んでしまうと思い、彩人だけを仕留めるにはこの形状が最も有効的だと判断した。

「はっ！」

男は炎の矢を彩人目掛けて解き放つ。炎の矢は一直線に彩人へ向かう。

少女の手を掴んでから微動だにしていなかった。体が固まっている。

矢が彩人に突き刺さりそうになる瞬間。

[illegible]

はとほし  
が 併る。

「次は何だ！」

やがて光は消滅していく。

そして男が目を開けた時には再び辺りは闇になっていた。さつきまでは残り火が暗闇を照らしていたはずだった。光が放たれた後炎もろとも消滅し、黒き闇に戻っている。

男が再び炎を出現させることでまた明かりを取り戻す。

彩人は息を切らしていた。

65

片手で頭を抑え、焦点も合わないまま地面を見ていた。

彩人と少女はまだ同じ場所にいる。無傷だ。

消えたのは彩人ではなく、炎の矢の方だった。

「これは……」

辺りは一変していた。

さっきまで焼かれて何もなかったはずの場所の地面が一面凍っていた。そこだけではない。彩人と少女を中心に辺り一体が凍りついていた。木々までも。

「小僧、何をした！」

男は彩人に尋ねるが、当の本人である彩人にも状況は掴めていない。

フラヴィタスターゲット

「いやこの異常は標的のもので間違いない。まだそれに余力が残っていたというのか？ いや、だがもう限界だったはずだ」

男は彩人の方を睨む。

「まさか……この小僧がやったというのか？」

そんなことはあるはずがない、と首を振る。

「いや確かにこの氷はあれの力だ……。やはりまだこれほどの力を残していたということか……。侮れんな。B等級<sup>ランク</sup>はだてじゃない、ということか」

この時、男は気付いていなかった。

凍っているのは地面や木々だけではないことを。

「これは……体が動かないだ！」

炎を灯している右手から離れた部位は凍っていて身動きがとれなかった。

（どうしたんだ？ もしかして動けないのか？）

その男の様子を見た彩人は、これは二度とないチャンスだと思った。

二人と男の距離はまだ五メートルはある。

（今のうちに逃げるしかない！）

彩人は少女を再び抱える。

（あれは……）

二人がいる所に生えている木の脇に、コンビニで買った商品が入った袋が落ちていた。

（そうか！ あれを使えば）

彩人はそれも拾い上げて走り出した。

「くそっ！ おい、待ちやがれ！ 小僧！ こうなったら標的ターゲットに多少の火傷ができて仕方がないな。まとめてだ！ まとめて焼いてやる」

男は悪あがきで最初に使った火炎攻撃を今度は二人に向ける。

「そんな……！」

彩人は首だけ回し後方から迫る炎を見る。足は常に動かし続ける。

（このままだと食らっちゃう！）

少女を背負っていて、ただでさえ両手が塞がっているから、避ける余裕もない。

しかし炎は見えない壁に防がれる。

彩人は少女の方に目を移す。

「ありがとよ。助かった」

と、囁く。

少女はずっとぐったりしたままで反応はない。男の言つとおり、もう残りの力も少ないようだった。

「甘いなあ！ この距離でも俺の炎は届くぞ！」

留めだ、と言わんばかりの大声で男は叫んで今までで一番大きい炎を出現させる。

（このくらいか……）

彩人は立ち止まり少女を下ろす。

「ああ、そうだな」

そう。この距離なら。

彩人の目的は男と一定の距離をとることだった。

「この距離なら俺たちには被害はないよなっ！」

レジ袋に手をつ突っ込んで中身の一つを掴み取る。これは少女のよ

うに氷壁を作って防御のできない、ただの高校生でも可能な悪あがき。掴み取ったそれを思いつき男の方に向かって投げつけた。それは闇の中へ姿を消す。

男は一回り大きい炎を放射する。

「消えるおおおおおおお！」

「消えるのはお前のほうだ！」

二人の叫びが交錯した直後——爆発が起きた。

静けさの満ちた夜に爆音が響き渡り、爆風が雪を舞い散らす。

「うつ……」

彩人はすぐに少女の体を腕の中に収める。

必死で爆風から少女を庇う。

爆風に耐え切れなくなつた体が後方へと吹き飛ばされるが、今度は少女を手放すまいとしつかり抱えたままだ。そのまま雪の上につ伏せに倒れ、爆風が治まるまで少女を庇い続ける。

やがて爆風は止む。

雪の夜は静けさを取り戻した。

彩人は想像以上の結果になり完全にびびっていた。

（予想以上だ……）

彼は自分では気付いてはいなかったが冷や汗がたらたらと出ていた。心臓をバクバクさせながら爆発のあつた方を見る。

「……やったか？」

作戦が成功しても油断せず、彩人は警戒を解かない。爆発の起こつた方向をしばらく見続けていた。

「……」

男が追ってくる様子はない。

「ふう」

彩人は全身の力を抜いた。

「はは、はは……」

彩人は起こったことをただ笑うことしか出来なかった。

「これにこんなにも威力があるなんてな……」

レジ袋から男に向かって投げたものと同じ商品を手に取る。

彼の手にあるのはそう——ガスボンベ。

それが男に向かって彩人が投げたものだった。

辺りが暗かったおかげで、男はそれを確認することができなかったのが幸いして、そうとも知らず男はそれに向かって炎を放った。

結果、火がガスボンベに引火。

そして、ガス爆発。

藍に買ってこいと頼まれたものが彩人の命を守るための強力な武器となったことは事実だ。

「……俺はとんでもないことをしてしまったたんじゃないか？」  
とにかく必死だったので自分の行為がどれほど危険だったのかをあとあとになってわかった。

これは『絶対にまねしてはいけません』の項目に完璧に当てはまってしまうが、まあ結果オーライ。

彩人はそうまとめた。命がある。少女を守りきった。それでいいじゃないか、と。

ようやく気を落ち着かせるようになってきた。

「一体なんだったんだ……」

彩人に起こった出来事。それはたかだか数分の出来事だった。だがそれはあまりにも衝撃的だった。銀髪の少女との遭遇。その直後、自分は何者かに突然襲われ、少女を渡せと責められた。さらにはその男は手から火を生み出すなどという人間離れしたことをやってのける。その火は何度とも彩人を狙って襲い掛かってきた。

（俺、生きている、よな……）

彩人は今でもこの出来事を信じられなかった。

だが、これでもう安心。

脅威は去った、はずだった。

「よくも……よくもやってくれたなああああああ！」

怒り狂った叫び声さえ無ければ。

## 一章(6) 最後の言葉

彩人の安心は一瞬で恐怖に変わる。

「殺す……殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す  
す殺す殺す！」

男はゆっくりとした足取りで彩人たちに近寄ってくる。

「灰にしてやる！ 何の形をとどめることなくただ灰となれ！」

男が右手を天に高く突き上げて、その腕が炎の渦を巻く。次々と生み出される炎の渦は手の先へ昇り集約されていく。集約された後、炎は球体を形成。まるでコロナを纏<sup>まと</sup>う太陽のようだ。

（なんだよあれ……）

火炎球は大きさを増し続け、それを掲げる男の体よりも大きくなる。

これに当たつてしまえば本当にただ灰となるか、灰さえ無くなつてしまふのではないかとも思えてならない。

彩人にはどうすることもできない。

防ぐことも。逃げることも。

ここで少女に助けを求めたとしても、無理だろう。氷壁で防ごうとしても一瞬にして打ち砕かれてしまうのがおちだ。

窮地。

本当の絶体絶命。

終わり。

「図に乗るなよ、世界の『バグ』が」

三回の銃声。その音がした直後。

「がはっ」

男は口から血を吐き出した。

三発の弾丸に撃ちぬかれた彼は火炎球のコントロールを失う。制

御されなくなつた。火炎球は球体を保つことができず、無数の火の粉となつて散らばる。

彩人は少女に預けていたダウンジャケットをとつさに掴んで頭から被り、少女の上にかぶさるように彼女を庇<sup>かば</sup>う。

「くそ……。てめえら『OASP』の連中……か」

「これより改変者<sup>アルター</sup>の削除を行います」

乱入者の一人が言う。

彼らは全部で三人。二人は黒服に身を包みいかにも怪しげな人物で、残りの一人は装飾品だらけのチャラついた格好をしており他の二人と比べて若い。二十歳ぐらいに見える。

（助かった？）

彼らが男の動きを止めてくれたおかげで火炎球は防がれたが、彼らはそれを防ぐために拳銃を用いた。そのようなことをするならば一般人であるわけがない。

敵か、味方か。

まだ安心はできなかった。

「待て『T2』、部外者と思われる二名を確認」

「『T1』了解。どうされますか？ 木賊<sup>とくさ</sup>さん」

木賊。

そう呼ばれたこの集団のリーダーらしき人物は薄気味悪い笑みを浮かべてブレスレットやネックレスをちらちらと鳴らしながら、どうしようか、と顎に手をあて考える。

そして彼の口から解き放たれたのは。

「殺<sup>や</sup>っちゃえ」

「了解しました」

（なに！）

黒服の一人が拳銃を持ち近づいてくる。

「殺されてたまるか！」

そう叫んだのは炎を操っていた男だ。

炎を灯した手で黒服の男の顔面をわしづかみにする。

「があああっ」

炎で顔面を焼かれうめき声を上げる。

彩人たちに向かつていた黒服の人もそちらを向く。

「へえ、頑張るねー」

木賊は少し離れたところからこの現場を見物しているようだった。仲間がやられているのに、楽しんでるようにさえ見える。

「貴様らまで邪魔しやがってえええ！」

今度は男の周囲で渦を巻く。

もう一人の黒服は腕を組んで防御体制。男の攻撃は今はず彩人たちに向けられていなかった。

「彩人……」

「き、君！」

少女はまた目を覚ましていた。まっすぐ彩人の顔を見つめている。「今からルネが彩人を守るから」

「ルネ？　それが君の名前？　……っていつか守るってどういうこと?!」

ルネと名乗ったその少女はその場に立ち上がる。

彩人には今から彼女がしようとしていることがなんとなくわかった。彼女が使う特別な力でこの場を鎮めようとしている。残りの力がわずかだというのに。それには対価があるにも関わらず。

ルネは言う。

「いい彩人？　たぶん『今』の彩人にはわからないと思うからさ、ルネが変なこと言っているように聞こえると思うけど聞いてくれたらうれしい……」

「え？」

「また巻き込んだじゃって、ごめん。たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから。もし、また危ないことがあっても大丈夫だよ。だって彩人には『世界を変える力』がある。だから諦めちゃ駄目だよ」

「それはどういう……って、ルネ待って！」

彩人の言葉を待たずにルネは前へ踏み出した。ふらつきながらも前へ。彩人から離れていくように前へと。

「彩人。最後にまた会えてよかった」

ルネは最後に彩人の方を振り返り――初めて笑顔を見せた。だがそれはどこか悲しげで。

次の瞬間。

とても綺麗な銀色の光がその場をを包み込んでゆく。

銀色の光が彩人の視界を覆う。

「チッ、あいつも改変者<sup>アルター</sup>だったか！ 『T1』『T2』引き上げだ

！」

これから起こることの危険性をいち早く察知できたのは新たな乱入者のうちの一人、木賊だった。部下二人に退却を命じる。

（眩しい……）

彩人はあまりの眩しさに目を開けることができない。この光の中で何が巻き起こっているのかまったくわからない。

やがて光は収束を初め、また元の暗闇へ。先ほど火炎球による火の粉が無数に飛び散って周囲の木々に燃え移っていたはずなのに、今は蠟燭<sup>ろうそく</sup>のように軽く枝などに火が灯っているだけだった。

光が消えた時には全てが終わっていた。

炎を操る男も、新たに乱入してきた謎の三人組も姿はなくなっている。

この場に残されたのは彩人を除いて一人だけ。

「ルネ！」

その場所に残されたのは銀色の髪の少女。彼女の体力尽きたように倒れた体の上に天から粉雪が舞い降りる。彼女と似たその雪は彼女の体を溶け込ませて、このままでは彼女を覆い隠してまいそうだった。

彩人は急いで少女の元に駆け寄った。そして抱きかかえる。

「大丈夫か！　おい！」

声をかけても少女は目を覚まさない。あの光は間違いなく彼女が氷を出現させたように、何か特別な力を使つて引き起こしたのは明らかだ。おそらく余力を全て使い果たしたのだろう、と彩人は思う。

（とにかく早く連れ帰ろう！）

彩人はルネを背負い新代荘へ急いだ。

## 一章（7） 週末の終末

新代荘に着く頃には午後九時半を過ぎていた。

「藍さん！」

彩人は少女をおんぶして両手が塞がっているため、ドアを開けることができず、部屋の中にいる人に開けてもらおうと、藍を呼ぶ。

「藍さん、開けて！」

扉の向こうでバタバタと足音が鳴る。足音が止んだ後、ガチャツ、と扉の反対側で鍵を開ける音が。

「うっさいわよ！ ご近所の事も——」

「藍さん！」

何よ、と藍の声がして扉が内側から開く。

「早くこの子を！」

藍は彩人の背に目を落とすルネを見る。

「——！ なぜここに……」

「この子、すごい弱ってて。俺が帰ってくる途中で倒れていて……、って藍さん聞いてますか？」

藍は少女を見るなり、驚きの表情を崩さず、そのままずっと少女の方を見続けていた。彩人の話は耳に通っておらず、それより別の事が重要な事態だといったかのようなのである。

「どうかしたのー？ 早くご飯ー。もう峠を過ぎちゃったよ」

部屋の奥から、食事はまだかー、早くしろー、と若葉の待ちわびたという言葉が飛んでくる。

「あ、あそうね……。急いで部屋へ……」

彩人は藍の後を着いて行く。室内は外とは比べ物にならないほど暖かい。

だがこれで安心だ。ここまで来れば、ルネも温まることもできるし、炎の男や黒服の男たちのような者は襲ってこないだろう。

（これでもう安心――）

「不審者が現れたわ！」

「はあ?!」

彩人が口を開ける。

「なんだって?!」

若葉と幸祐が驚きの声を上げる。彩人も心の中で同じ事を叫んでいた。

（まさか、藍さんはさっきの出来事の事を知っているのか?!）

「彩人がとうとう少女誘拐を犯したわ！」

「はあ?!」

またも彩人の口が開く。

藍は相変わらずであつた。

彩人はその様子を見てさっきの違和感など気に留めなくなった。

そのようなことよりもっと重要なことはいえ――

（なんで俺が不審者扱いされるの?!）

何だと、と彩人と藍が丸机の置かれた部屋に入るより先に若葉と幸祐が飛び出してきた。

「え、なにこの子！ え、えっとこの子……外国人？」

「そうとしか言えないだろう……」

若葉と幸祐の二人は少女の綺麗な銀髪に戸惑っていた。

「それより早くこの子をなんとかしてあげて……」

彩人は新代荘に帰ったらすぐさま藍たちが行動してくれるだろうと思っていたのだが。

（扉を開けた時から何故か迅速にほいほいといかないんだ。今はそんなことをしている場合じゃない）

と、不満が溜まっていた。

「若葉は部屋に布団を敷いて、できるだけたくさんの毛布とか用意して」

「あ、うんわかった」

「彩人、その子を」

「あ、はい……」

彩人が藍に少女を託すと、藍は部屋に入っていく。

「藍さん、俺は何かやることありますか」

役割の与えられていない幸祐が協力を志願する。

「そうね、とりあえず彩人を取り押さえとして」

「だから何で?!」

困った様子で幸祐が彩人に近づく。

「……だそうだ」

「だそうだって……おい! マジでやんのかよ!」

「いやー、そう言われちゃったから……」

「言われちゃったからって……」

ちなみに今の彩人の状況説明をすると、腕をとられ、顎は床につき、がっしりと幸祐に取り押さえられている。

彩人は暴れたが逃れることはできないと悟り、おとなしくなる。

それを見計らって、彩人よりさらに状況が理解できていない幸祐が気になっていることを聞く。

「ところで、あの子、どうしたんだよ?」

「あの子は……」

言葉を詰まらせる。

(あんな事があったなんて話せるわけがないからな……)

「あの子は道で倒れてたんだよ……。それで俺が助けてここまで運んできた」

間違ったことは言っていない。

彩人が少女と最初に出会ったのは狭い路地だったし、助けたのは事実だ。

「そうか、色々大変だったな」

「ああ……」

頭を、あの男、あの黒服たち、そして最後にあの少女の事が過ぎ

る。

「大変だったよ」

その言葉はより重かった。

「なあ、幸祐？」

なんだ？ と、幸祐が聞きかえす。

「そろそろ放していただけないでしょうか？」

「ふむ」

彩人の腕を背中に回してしっかり固定していた幸祐の手が放れる。  
(こいつ、見た目と沿わずに案外、力強いんだよな。まあ部活で鍛えているんだから当たり前か)

彩人は立ち上がって部屋に向かいルネの様子を見に行く。

「容態は？」

ルネは布団の中でぐっすり眠っているようだった。

「そうね。やっぱり体がとても冷え切っていたわ。とりあえずこのまま暖かくして安静にして置きましょう」

「この子の髪、綺麗だね」

若葉がポツリと呟いた。

彩人は今こうして改めてみてもそのルネは綺麗だと思った。最初に会った時、気を失っていた時の彼女の顔はつらそうな顔をしていた。しかし、今は苦しみから解放されて安らかに眠る姫のようだ。

彩人はその様子を見てほっと胸を撫で下ろす。

「さっ、この子はたぶんもう大丈夫でしょうから、私たちは食事よ、食事」

藍がぱちんと手を叩いて、空気を切り替える。

「そうじゃん！ 晩御飯まだじゃん！」

「もう空腹の山をとくに通り過ぎた……けど、やっぱり空腹に変わらない」

「つーか俺、めっちゃ寒い」

ガタガタと彩人の体が高速振動する。

「俺、先に風呂入りたい……」

その言葉が皆の忘れていたことを思い出させる。

「そういえば、風呂も駄目だったわね……」

「……今日どうするの？」

「明日までには何とかしておくから今日のところは我慢して」

「母さん、この借りはきつちり返してもらうからね……」

若葉の怨念おんねんに満ちた視線が藍を突き刺す。

「……さあ、鍋作るわよー！」

「聞いてないな……」

その後、四人で鍋を作って食べた。

彩人は鍋のおかげで何とか体を温めて持ち直すことに成功。

四人で鍋をつついていている間にルネのことについて炎の男や黒服のことは避けて説明を終えておいた。

ごちそうさまでした、と四人で手を合わせて食事を終える。ルネが起きた時の為に鍋の具は少し残してある。

「じゃあ今日はこれでお開きね」

四人とも丸机から立ち上がる。

「じゃあ、おやすみー」

「おやすみ」

若葉と幸祐が各自、自分の部屋へと戻っていった。

「彩人、あなたも自分の部屋に戻りなさい」

「ああ……うん」

彩人は少女の事が気になって、まだ彼女が寝ているそばにしゃがんでいた。

「ルネのことは、後は私に任せなさい。明日は学校でしょう？」

「わかった……」

渋々、彩人も自室へ戻ることにした。

彩人は自室に入るなり朝からたたんでいなかった敷布団に寝転がる。

「夢じゃないもん……」

今日の出来事を振り返っていた。

（お前達とは違う世界）

男の言っていた言葉を思い出す。

（あの子はこれからどうなるんだろう。俺たちみたいに新代荘で暮らすのかな）

彩人が新代荘に初めて来た時の事。

あの時の俺はどうだったっけ、と思い出そうとしてみるがいまいち思い出せなくて断念する。

（あの子は……俺たちの世界では……生きていくことはできないの  
だろうか……）

そのまま眠りへ落ちていった。

## 一章（８） 週末の延長

ここは『〇〇一号室』、新代藍の部屋。

藍は少女が寝ている横で座っていた。もう彩人たちが帰ってか  
らずつとこうしている。今頃彼らはもうおそらく皆眠っているだろ  
う。

「やっぱり……この子なのね」

藍はその少女の名前を独り呟く。誰に語りかけるわけでもなく、  
いや自分自身に語りかけているのかもしれない。

「また……私たちはあの世界に戻らなければいけないのかもしれない  
いわね……。もう二度と関わらない。もうあの子達を巻き込まない  
私が守ってみせる。そう心に決めたともしりだったのにね……」

独り言は続く。

「この子がなんでこんなところにいるのか確かめなくちゃいけない  
わ。もし奴らがこの町にまた……。また狙いに来ているのだとした  
ら……。いや、それは不自然すぎる。この子が一人でいるってことは  
ありえないわよね……」

藍はルネの頬に優しく手でなでる。

「二度と関わらないって決めたけど……」

藍は立ち上がって電話の前に行って受話器を取る。

「やっぱり気が進まないわね……」

受話器を取ったものの電話番号を押そうとしない。

（あー、もう！ あいつに掛けるのか！）  
頭を掻く。

「これはあの子達のため！」

決心して電話のボタンを押していく。その電話番号にはもう何年  
も掛けていない。昔の知人であり、それ以上に仲間であった者の元  
へと電話を掛ける。

ブルルルル、と五回ぐらい鳴って、もしかしたら出ないのではな

いかと、期待してしまっただ、期待はすぐに打ち切られる。

『もしもし?』

男の声。懐かしい声だ。

『久しぶりね……』

藍は気乗りしない調子で語りかけた。

名乗ってもいないのに電話の相手はすぐに理解したらしく、

『ああ久しぶりだね』

と、返事は藍と相反して明るく、うれしさを隠しきれていないのが軽やかな調子だった。

『どうしたんだい突然? もう二度と掛けてこないと思っていたのに。まあ一応こちらの電話番号は変えておかなかったのは正解だったね。変えてたら君はこうして僕に掛けることはできなかったんだからね』

『ええ、二度と掛けるつもりは無かったわ。あなたの声も二度と聞きたくなかった』

『ひどいなー。どうだい最近。子守で忙しいかな?』

『あの子達はもう高校生よ』

藍はそつけなく答える。

『ほう、たくましくなったもんだな』

『それより……』

『君は今でも昔みたいに綺麗な』

電話の相手は久しぶりに藍の声を聞いたので心が浮いているようだった。

『いいかしら?』

『はいはい。せっかくの何年かぶりだっていうのに』

『八年』

『あの子の時間が最後か、なんて言っただけ、白上彩人、君?』

『本当、あなたは鬱陶しくて憎たらしいわ』

『そうさ。間違っただけよ。で。』

電話の相手は一拍おく。

『何があつた？』

先ほどまでの浮かれたトーンも話し方もどこかへ消え去ってしまったかのように、真面目になる。電話越しにぴりぴりとした空気が伝わる。

藍は本当にこいつに話していいものかと躊躇う。昔からどこか食えないところのある男だった。迷っているうちに電話の相手のほうから話を振ってきた。

『ヒンター来訪者のことかな？』

藍はその言葉を聞いて背筋に寒気さむけが走る。

（勘の鋭いやつめ）

相手は大方、こちらの話そうとしてることを読んでいるようなので、包み隠しても無駄だと判断した。

「ええ、そうよ。『あの時』の続きが始まるかもしれないわ」

## 二章（１） 異常は何処へ

「朝か……学校……面倒くさ……」

一週間の始まりの朝に出た第一声。

彩人<sup>あやと</sup>は学校をサボりたい気は山々なのだが、そのようなことをしたら後々（藍）が恐ろしいのでそれは許されない。

起きようとして肩までかかっていた掛け布団をばさつとどけた途端に、冷気は容赦なく忍び寄ってきた。

「寒い……」

再び掛け布団を手を取って被り丸くなる。

部屋には暖房器具として電気ストーブが一台ある。これが唯一の暖房器具だ。後は厚着するとか毛布を肩にかけるとかで毎年冬を乗り越える。新代荘の他の面子も例外ではなく、皆このように今年の冬も過ごしている。

電気ストーブのスイッチを入れたまま寝るのは何かしら危険があるといけない（電気代の軽減もある）ので睡眠時は使用禁止というのが新代荘の規則の一つにある。

そのため朝になれば室内は完全に冷気でいっぱいに満たされて、冷蔵庫のようだ。

今日も寒いのだろう、とカーテンの閉まっている窓の方を布団の中に窺いながら見ていた。

このまま布団のぬくもりに包まれているところから、冷気を遮断するベールを取り払ったら、温度差の影響を多大に受けてしまう。

だから彩人は掛け布団を体に巻きながら立ち上がりカーテンを開けに向かう。

カーテンを開けてもぽかぽかとした朝の日差しはやはり拝むことはできなかった。

「今日も晴れないなー」

本日の空に青色なし。

本日も、だ。

灰色に少し薄みがかった感じである。雪は幸いにも降っていない。先週から色見市上空にある雪雲は少しずつ変化していたようだ。何日かすれば、お日様も顔を出すであろう。

外の様子を確認した彩人は時計を見る。時間にあまり余裕は無さそうだった。

藍の部屋へ朝食をとりに行かなければならないので、布団を外して着替えを終えた後、藍の部屋に向かう。

「おはようございまーす。ううつ……寒いっ」

新代荘の各部屋はそれぞれ別の住戸となっている。そのため部屋の移動は必ず一度は外に出なくては行えない。

外の寒気は室内の冷氣に劣ることなく、よりいっそう強烈なものだった。

「遅かったわね。遅刻しても知らないわよ」

彩人が起きてくるのが遅かったので味噌汁が冷めてしまったのを藍は台所で温め直していた。彼はまだちゃんと開かない目をこすり、ふらつきながら丸机のある部屋の奥へと歩いていく。

「あ……」

机の横に布団が敷かれている。

そこには眠っている銀髪白皙の少女。

今、彼女は若葉の服を着ている。

（そう……だったな……）

彼女を見たことで昨日の出来事が脳裏に蘇る。

夢ではなかったのだと。

それは実際にあったこと。

日常ではない——非日常。

それは一夜のことであり、朝はいつも通り。彩人が望んでいる日常である。

藍がお盆の上に朝食を乗せて運んできた。味噌の香りが伝わってくる。

「ルネは、あれからどうですか？」

第一に藍に尋ねておきたいことだった。彩人はそう尋ねつつ、ルネの顔が見える位置に座る。

藍はお盆の上の朝食を丸机の上に並べ終える。

「あなた達が自分の部屋に帰った後に一度目を覚ましたわ」

「本当ですか?!」

今の彩人にとっては何よりの吉報だった。

(あの状態からよくがんばったな)

彩人はルネの方を見て微笑む。

「ほらその子を見てにやけている場合じゃないでしょう?」

「にやけてないっ!」

「さっさと学校行きなさい」

「今日学校、あるの? 昨日あれだけ雪降ってて」

「なに馬鹿な事を言っているの? 幸祐も若葉も部活の朝練習で六時くらいにはもう出て行ったのよ。あんたも見習いなさい」

部屋の隅にある箒笥たんすの上に置かれた時計は七時を三十分を過ぎていた。

彩人は学校の事などはどうでもいいから彼女のことを色々と聞きたかった。

「この子が起きた時どう?」

「起きたのはあなたたちが部屋に帰った後、そうね……十二時は過ぎていたわね。様子は……ぼーっとしてた」

「ぼーっと、って……」

それは彩人を少し不安にさせるような発言だった。

「とりあえず何か食べさせた方がいいと思ったから、鍋の残りもちやんと食べさせたわ。まあその後すぐ寝ちゃったけど」

「なにか言ってた?」

「とくに何も。聞く暇もなかったし」

「そう……」

(まだ本調子じゃないのかな?)

藍の口元が少し上がる。

「なに？ やっぱりその気があるわけ？」

くすくす、と藍が微笑を浮かべる。

「そういうわけじゃないって！」

「ふふ、まあいいわ。そんなことよりさっさと食べちゃって。洗い物するから」

彩人は朝食を口の中へ急いで掻き込んで、ささっと済ませ学校へ行く支度する。

「じゃあ、ルネをお願い」

「はいはい、任せておきなさい。いつてらっしゃい」

藍はしつしと追い払う仕草で、ルネを気にしてばかりいてぐずぐずしている彩人を新代荘から追い出す。

そして追い出された彩人は気乗りせずに登校している。

昨日嫌と言うほど夕方まで降り続けていた雪は道路に積もっている。道の真ん中は車が通ったりして積もった雪が削り取られ、タイヤ痕が残っている。道の脇にある水路の近くはそのままの状態だった。

（ルネ、大丈夫でよかった……）

想像の世界だけで起こるような出来事が終わった後、ルネの体は昨日、氷のように冷たかった。本当に命が危険だったかもしれない。彩人は新代荘を出る前に彼女の手を優しく握ってみた。その時にはちゃんと人の温かさが伝わってきた。そのおかげで不安は一先ず消え去った。

彩人たちが通っている高校——帆布南高校はごく普通の公立高校だ。一応進学校ではあるがレベルの高い大学を目指せとまでは、勉強に力を入れているという気は感じられない。彩人にとってはとても過ごしやすい環境であった。

学校までの道のりは新代荘から北東に向かって徒歩二十五分。昨日行ったコンビニといい、どこかへ行こうとするとどうしても時間がかってしまう。さらに交通機関が通っているわけでもない

ので徒歩で移動するしかない。自転車さえあればそんな苦労はないのだろうが、生憎新代荘にはそのようなものを揃える経済的余裕はない。

住宅が建ち並ぶ道を抜けると橋の手前までやってきた。

学校へ行く途中に川が陸地を隔てているので、橋を渡らなければならぬ。この橋を渡ると新代荘周辺のような築五十、六十年といった古い家屋に比べて築二十年未満の比較的新しい住宅街がある。道路も白線できっちり分けられている二車線の車道になる。

川は彩人が歩いてきた道の周りの田のように凍ってはいない。滔々と流れる水はいかにも触っただけで手がその冷たさで痛くなりそうだった。

橋からは家々が建っているところより高い土地になっており、普段は違うのだがどの建物も白い屋根だった。

橋を渡り終わると新代荘が建てられた地域より新しい住宅街に差し掛かる。その中を進んでいくと店も見かけるようになってくる。ランドセルを背負った子供たちが集団で登校しているのも見かける。

「ガキだなー」

三人の小学生が雪球を作って投げ合っていた。

対して大人たちは雪かきで大変そうだ。家の駐車場や車の上に乗った雪をせっせと下ろしている。その駐車場の傍らには、一メートルはあるだろうか、雪だるまが作ってある。

「そっかいや今年はまだ作ってなかったか」

数日降り続けた雪は降っていた期間と同じくらい溶けるまでは時間がかかりそうなのでまだまだ間に合う。

空はまだ青空を見せる様子はない。空一面に灰色の膜が覆っている。

そんな晴れない空を見ていると仕方がない、というよりは、彩人はルネと名乗った少女のことばかりを気にして歩き続けていた。

「何者なのだろう……」

帰ったら聞いてみるか、とまだ登校している途中だと言うのに、早く学校が終わりと思いつけている矢先のことだった。

「彩人おおおおおおおおおお」

唐突に大声で自分の名前を呼ぶ声。

「？」

彩人は呼ばれた方を振り向いた。

「ぐはっ！」

彩人は振り向いた瞬間、顔面に痛みと冷たさが染み渡る。

何だよ、と心の中で愚痴を言いながら顔についた雪を払う。

「ほれ、どうしたそんな暗い顔して！ もう一発いくぞ！」

目を開けると自分目掛けて雪球が飛んできていた。

「おっと」

それを横飛びして避ける。

路面は凍っていてとても滑りやすくなっていた。

「しまっ……！」

彩人は足を滑らせて完全にバランスを失い、不覚にも転倒。

「くっそう……」

人がよく通る歩道を歩いていたのでふわふわな雪は積もっておらず、クッションのように働いてくれなかった。

「ふん、どうだ」

尻をさすりながら地べたに座っている彩人を、腕を組み俯瞰している人物は、雪球を片手に持っていた。

先ほどの無邪気な小学生たちではない。彩人と同じ制服を着た高校生だ。

「ノツキー、てめえ何しやがる……」

彩人に呼ばれたノツキーと称された高校生男子はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「いやあ、なんか彩人がぼーっとして歩いてるからな、ついぶつけたくなっちゃった」

本名、波瀬<sup>はせ</sup>乃樹。

彩人と同じく南帆布高等学校に通う生徒で彩人のクラスメイトでもある。彩人とは中学校の時から付き合いで、今彩人が歩いている住宅街に住んでいる。やんちゃな小学生のような面影を感じさせられるが彩人よりは少し背が高い。

「顔面ヒットしたんだぞ！」

「それはすまなかつたな」

棒読みで誤る。これは昨日、藍に同じようなことをやられたばかりだ。

「覚悟しろっ！」

彩人はひそかに後ろで作っていた雪球を乃樹に向かって投げつける。

だが。

「フツ、甘いな」

乃樹は一步後ろに下がり、悠々と雪球を避ける。雪球は何も無いところへ飛んで行く。そしてその場に彩人を置いて学校の方へ歩き出した。

「逃げるのか！」

「仕返しをしたければ追いついてみる」

乃樹は尻を叩き彩人を挑発する。

彩人が立ち上がると同時に乃樹も走り出した。

「待てや！ このやろう！」

雪球二個分の雪を確保して、作りながら走る。その間も乃樹は逃げ続ける。

右手にある雪球を投げつけた。

前方を走っている乃樹はそれを避けて先ほどの彩人と同様、滑つて転倒。彩人はそれを見逃さず、顔面目掛けてもう一方の雪球をぶつける。もちろん顔面目掛けて。

目には目を齒には齒を、である。

そういうことで、これにて仕返し完了。

しかしその後も乃樹が再び攻撃し出したので、彩人も反撃し、と

いう小学生たちと同じことを数分間続けていた。

二人とも体を動かしたため、体は温まっていた。度を超して汗ま  
で掻いてしまっているが。

今は二人の同意で休戦状態になり、普通に大人しく、高校生らし  
く登校している。

「あ、そういえばさ……」

乃樹が先に話を切り出した。走り回っていたせいで息が切れてし  
まっている。

「なんだよ……」

「噂で聞いたんだが昨日、火事があったの知ってるか？」

「……」

彩人は瞬時にわかった。

知っている。

知っていて当然だ。何せその事件の関係者なのだから。

「へ、へえ……」

「でさあ、その火事がさあ、あの向こうの方の雑木林で起こったらし  
いんよ。それが結構でかくてさ、雑 木林にぽっかりと空いた木  
々も何も無い場所がでちまつたらしい」

乃樹はそう言っただけで昨日彩人がコンビ二へ行く途中に通った方向を  
指差す。

ドンピシャだった。

「けっこう近いんだな……」

「例の放火の件じゃないかって言われてる。そんな人がめったに立  
ち寄らない場所で炎が出るわけがないだろう？ だから放火だろう  
ってさ、恐いよな」。例の不審者と同一人物なのかね」

「さ、さあ……」

彩人は知らないふりをし続ける。自分が関わっているなどとうて  
い言えないからである。

（そんな放火なんていう軽いもんじゃないぞ？ ただの放火魔じゃ  
ないからな。手から炎出しよった。あんな奴は人間じゃな……いや、

これはいいや)

「捕まるといいよな、犯人。意外と大事みたいで警察も色々と動いてるらしい。火を放っただけじゃなくて、その火事では爆発もあったみたいなんだよ」

爆発。

彩人の肩がびくつ、と敏感に反応する。

「爆発物まで持ち歩いてるとか、放火魔から爆弾魔にランクアップだぞ」

乃樹は噂話を続ける。

彩人は心配していた。

(え……何かこれやばい？ 爆発物って俺があの時投げたガスボンベのことじゃないか？ もしそうだったとしたら、その爆弾魔って俺になっちゃうじゃねえか！ いや……でも、よく考える、俺。炎を使っていたのはあの男のほうだったし、もとはといえばあちら側に問題があるわけであって……俺に責任はない。そう自己防衛だ！俺は悪くない。警察に捕まることなんて……あるはずが……)

「おい、彩人大丈夫か？ 顔色が悪いぞ？」

彩人がずつとうつむいて一言もしゃべらないので、乃樹が心配になって、ひよつとしたら体調が悪いのか、などと思っていた。

「ご、ごめんなさい！ それだけは勘弁してくださいっ！」

彩人は乃樹に土下座ポーズをとっていた。さらに両手を差し出していた。

「お前……どうした？」

乃樹はそのような彩人の姿を見て一歩後ずさりしていた。

(え？)

ようやく彩人の頭が状況に追いついた。

「うおおおおお！ 俺なにしてたんだあああ！」

「彩人、どこだ、どこが悪いんだ？ 頭か？ そうか頭なんだな？

よし俺が一発、お前が正気に戻ることを祈って拳を叩き込む！  
戻ってこい彩人おおお！」

「正気だ！ あほが！」

乃樹が拳を振ろうとしたところへ彩人のカウンターが炸裂。  
カウンターは腹部へ。

「ぐっはっ」

乃樹が腹を押さえて蹲る。

「く……よかった……正気のように……だ……な……」

「あ、ごめん……」

彩人は正直、ここまで強く力を入れたつもりはなかったのだが運悪くいい具合（この場合は悪い具合の方が正しい）に決まってしまうたらしかった。

まだ学校に辿り着いてはいなかったが、学校のある方角から予鈴が聞こえてきた。

予鈴の五分後に鳴る本鈴に間に合わなければ遅刻となる。

現状、乃樹が負傷中。

いつもなら構わず置いていくのだが、今回は自分に原因があると思っただけは止めにした。

彩人は乃樹に肩を貸して、二人は学校へ行った。  
もちろん二人とも遅刻だった。



その日の授業は教室移動の必要のないものばかりが集まっていたため、朝来てから席を一度も離れていない。

彩人の席は窓側、教室の後ろから二番目に位置している。

そこからはグラウンドが見え、体育の授業で寒い中、上は体操着一枚、下は膝までの丈のズボンといった格好で生徒たちが走っていた。

彩人は、数学教師がチョーク片手に黒板を数式で埋め尽くしている最中、ぼんやりと窓の外を見続ける。

決してグラウンドを走っている女子を見ているわけではない。

「なあなあ、雨ちゃん」

彩人の後ろの席に座る乃樹が先生に気付かれないようにひっそりと隣の席に座る雨夜（あまや『あめ雨ちゃん』という愛称は乃樹が命名）に話しかける。

「ん？ どうしたノツキー」

雨夜は小首をかしげながら乃樹と同様に小声で聞き返す。

「どう思う？」

乃樹はこれこれと、ずっと窓を見続けている彩人を指差す。

「？」

雨夜の首がさらに右へ傾く。彼女の最大の特徴であるといえる、末端をゴムで縛られた長いサイドテールが床についてしまいそうなほどだ。

雨夜は彩人の方を見る。

「駄目だねー、彩とん、体育の授業をしている女の子に気を取られるなんて」

「いやそうじゃなくってさ」

「？」

またサイドテールが地面に付きそうになる。

「今日なんか、様子がおかしくねえ？」

「ああ、確かにそんな感じするねえ」

「朝っぱらから何か暗いつていうか……考え事してる感じだった」  
「そうだね……」

ふむふむ、と顎に手を当て考える。

「最近、彩とんの周囲で変化は？」

「変わったことか……んー、いつも通りでぐーたらしてるなー。あ  
っ！」

乃樹が大声を出してしまった。

「しー」

雨夜が人差し指を立てる。

「チョークを持つ手を止めた数学教師が「どうかしたか？」とやか

ましいという意味をこめた上で言ってきたのを、乃樹は「消しゴムを落しました」と言ってやり過ごす。

「で、変化って？」

「先週の金曜日のことなんだけど、これがな……」

「なにになに？」

「掃除を真面目にやってたんだよ、こいつ。すごくね？」

雨夜の目が半目になる。

「なーんだ……」

「あれ？　そういうことじゃないのか？」

「ノツキーは鈍感だなー、もう。そうじゃなくってさ、あれはズバリ」

「ズバリ？」

「恋、だね」

探偵っぽく決めようとした風に言う。得意げな顔で白い歯がチラリと見え、Vの字に開かれた親指と人差し指が顎に当てられている。

「さいですか……」

今度は乃樹が半目になる。

「春の到来だ！」

うんうん、と納得したように雨夜は頷く。

「それは……あるのかねー。こんな窓の外みたいに冬真っ盛りだと思っけどなー。一緒に住んでる若葉ちゃんも幸祐の方に気があるんだろっし」

乃樹は中学時代から彩人の周りで好きな人とかの噂が全く立ってはいなかったのを思い出す。

「あの二人付き合ってるのか、付き合っていないのか未だにはつきりしないよね、まったく。というかその話は置いておいてー、あれ？　あまりその気はしない？　私は恋わずらいで間違いないと思ったんだけどなー。窓の外を見ながら、『寒々しい景色だなー』とかで自分の気持ちとのギャップ差に落ち込んでいるんだよ。ギャップ萌え！」

「いや、ギャップ萌えって意味わかんないし」

「彩とんは多分心の中で『フッ、そうか……どうやら俺の方が来るのが少しばかり早かったよう、だな。恨むなら気温を上げようとせず雪ばかり降らせる天にしな（キラッ）。』とか、そんなふうに思っちゃってるんだよー」

「そんな彩人……きもいな」

「うん……ま、まあノリと言っやつだよ。実際にそんなことを言う彩とんを見たら、爆笑か白けるかのどっちかだよ」

彩人の様子がいつもと違うことに乃樹と雨夜は、様々な想像を膨らませて二人で盛り上がっていた。その会話をしているうちに刻々と時間は過ぎてゆき、授業終了のチャイムになる。学級長が起立の号令をかけて礼をした後、彩人は着席せずにそのまま、二人のほうを向き。

「勝手な想像すんな」

「あはは、聞こえてましたか……」

乃樹と雨夜はぺこりと小さく頭を下げる。

彩人は教室の外へと出て行こうとする。

「彩人！ どこ行くんだよ！」

乃樹が立ち去る彩人の後姿に尋ねる。

彩人は、トイレだよ、と言って出て行った。

「聞かれちゃってたねー」

あはは、と困った表情の雨夜が乃樹の隣に立つ。

「やつぱり、何かあるな」

「ちよつくら探りいれてみますか？」

内密の企てをする二人であった

## 二章（２） 白色と銀色は似ている？

彩人はトイレには行かず学校の外庭——木製テーブル、チェアなどが設置されていたりする——に出てきていた。

午前中の授業はこれで終わり。

今は昼休みだ。

普段なら昼食時は教室ではなく外で食べるという生徒もたくさんいるのだが、芝生は一面雪が降り積もったままで寒い中わざわざ暖房のついている教室から出てくる生徒はいない。昼食のためではないが、グラウンドで雪合戦を始める生徒がいる。

「帰っちゃおうかな……」

彩人は午後の授業をサボってしまおうかと思いつていた。

（どうせ授業なんて耳に入らないしな……）

いつもは午後の授業を受けるのが面倒くさいからサボりたいと思うことが多いのだが、今日はいつもと違う感じだった。サボりたいから、というよりは早く新代荘に帰りたい。そればかり朝から思い続けていたのだった。

「でもな……」

こんなにも早く帰ってしまったら新代荘にいる藍に面倒なことをさせられるに決まっていた。

「どうした彩人？　こんなところで」

ふと、後ろから声をかけられる。

「幸祐か」

「窓から見えたから出てきてみた」

「俺は何もしてねえよ」

「帰るなよ」

ギクツ、と肩が動く。

「ルネっていう子は藍さんに任せておけよ」

俺たち、とは若葉のことだろう。

幸祐には何から何までも彩人が思っていることがわかりきっているようだった。

「部活ないんだから俺たちより早く帰れるだろう？」

「……」

「ほら、中に戻るぞ」

すたすたと幸祐は昇降口の方へ歩いていく。

幸祐は彩人を引き止めるためだけに外へ出てきたようだ。

「はあ、仕方ないか……」

彩人はそう一言呟き学校の方へ踵を返す。

（今帰っても起きているとは限らないもんな……）

彩人が教室に帰ると、雨夜と乃樹がひそひそ話をしていた。それを横目で一瞥して通り過ぎ、自分の席に着いてまだ食べていなかった藍お手製弁当を食べた。

午後の授業は一応黒板の前に立つ先生の話をして、あくびをしながら聞いていた。

とても長く感じた午後の授業が全て終了し放課後になる。

部活動に参加していない彩人は教室から出てまっすぐ昇降口へ向かう。その足取りは速かった。いつもならば東にある新代荘とは逆の学校より西の方にふらりとぶらつくのだが、今日はどこにも立ち寄ることなく一直線に新代荘へと帰った。

鞆を持ったまま自分の部屋に向かわずに藍の部屋のドアをあける。

「そんな急がなくてもいいのに……」

藍は鞆を自分の部屋に置いて来ないで部屋に真っ先に入ってきた彩人を見て呟く。そして彩人の目を見て「いいわよ。上がりなさい」と彩人を招き入れた。

「ルネなら今ちようど起きたところよ」

それを聞き、彩人は今すぐにでも走って朝に彼女が寝ていた部屋へ行きたかったが、廊下は一人しか通れない幅で、前方には藍がいるので小股のはや歩きになっていた。

二人は廊下から部屋に出る。

彩人は見た。

ルネはそこにいた。眠ってはいない。二人が入ってくる方向をじつと見ていた。その目は透き通った、淡く、そして澄んだ青い瞳。まるでガラス細工のビー玉のようである。

彩人はその目に吸い込まれそうになった。

今までは眠っていて瞼の裏に隠れていて見えなかった。昨晚、彩人を助けてくれた時も暗くてよく見ることはできなかった。

彩人はその目に見惚れて言葉を発することができなかった。

「このアホみたいな顔をした子がさっき話した白上彩人」

藍はすでに彩人たちの紹介をしていた。

「えっと初めまして……じゃないか。昨日はもう会ってるから……。覚えてる……かな？　昨日俺は君が道端で倒れているのを見つけたんだ、け、ど……」

ルネの綺麗な双眸はまっすぐ彩人の目を見ている。ただ見ているだけ。何も話そうとしない。何を考えているのかわからない。感情があるのかもわからない。ガラスなのは彼女の瞳だけではなかった。彼女そのものがガラスの『結晶』のような。

神秘的、不思議、不気味、一体どれが正しいのかわからない。

「藍さん……」

「ずっとこの様子よ……」

藍は彩人の言いたいことを察して、昨日もこのようにただ無言だった、と続けた。

彩人は藍が朝に言っていた「何も言っていなかった」「ぼーっとしたようすだった」という言葉の意味をここにきて理解した。

（昨日と様子が変わらないか？）

最後に見せたあの笑顔はもう見せてくれないような気がした。

「この子、あなたに任せてもいいかしら……？」

藍が唐突に何の脈絡かわかっていない彩人に頼んだ。

「え……それは……どういう？」

「私はちよつと出かけてくるわ。この部屋にいてくれて構わないか

ら。ごめんね、力に慣れなくて」

藍は、彼女と一番近い位置に立っているのはあなたよ、と肩を叩いて彩人の横から立ち去ってしまった。

「……」

「……」

部屋に残された二人。藍が出て行くときのドアの閉まる音が沈黙の部屋に響く。

彼女は彩人から目を離し、ぼーっと虚空を見つめ始めた。

（俺が一番近い位置に立っているってどういうことだ？ 藍さんは俺にどうしろっていうんだ……）

沈黙を破るために、とりあえず無難な質問をから始める。

「ルネ？ 大丈夫？」

返事は無い。

しばらくルネの様子を見てみると彼女の方から口を開いた。

「——い」

「ごめん、もう一回言ってくれる？」

ルネはとても小さな声でボソリとしか言わなかったので、うまく聞き取ることができなかった。

彼女はもう一度言う。

「……わからない」

と。

「わからないって……」

わからない、その言葉の意味が彩人にはわからない。

だが、わかる。彼女の声が怯えているということは。

「なあ？ わからないっていうのは、どういうことなんだ？ よければ教えてくれないか？ ルネ」

藍はルネの体調は良くなったと言っていた。しかし彼女の様子があまりにも弱々しく、これ以上怯えさせないように優しく尋ねる。

ルネは再び黙ってしまった。

（怯えるのも無理もないか。この子はずっと眠っていたんだ。起き

たら自分の知らない人がそばにいて、さらに今いる場所も全く知らない。周りは知らないことだらけなんだからな……」

「無理はしなくてもいいよ。話したくないなら話さなくてもいいからさ」

だが彩人は心の中で思っていることと正反対のことを口に出している。

彼の本心では本当は真相を知りたがっていた。

わからないのはルネだけではない。彩人もであった。

昨夜、自身の遭遇した事件。

手から炎を出現させて見せたあの男は一体何者か。なぜあの男はこの少女を狙っていたのか。男が出した炎とルネが作った氷の壁、そして後から乱入してきた謎の三人組。これらの超常現象はどうしたら説明がつくのか。

今日学校でもずつと気になって仕方がなかった。もし首を突っ込んでしまったら男の言っていたあちら側の世界に入り込んでしまう。入り込んでしまったらどうなるか。そんなことわかるはずがない。ただ良いことがあるなんてことは一度たりとも思わなかった。何せ命を狙われたのだから。子供同士のおふざけや喧嘩とはわけが違う。だから関わってはいけないと思い、それら全てを忘れてしまおうと一度は決めた。けれどもそれはどうしても忘れることができず、昨夜の出来事は脳裏にしっかりと焼き付けられてしまっていた。

（この子はあちら側の世界にいるのか……。なにが一番近いに立っている、だ。俺はこの子のために何もできないじゃないか……）

彩人は自分の無力さに嫌気が差し、ルネも今はそつとしておいた方がいいのかもしれないと思って、もう自分の部屋に戻ろうと思い立った時。

「ルネ……」

ようやくルネは勇気を振り絞り他者に告げた。彼女は掛け布団を両方の手で強く握っていた。

「ん？」

「ルネって――」

「――なに？」

なに？

その問いが何を意図するのか……。

「ルネ。それはどうい――」

（待てよ……）

彩人は思考を巡らせる。

この反応は知っている。彩人もかつて自分の名前を呼ばれて同じ反応をしたことがある。

（そうだ……これは――）

「記憶……喪失……」

「おい……ルネ？ お前の名前はルネだ。そして俺の名前は彩人だ。わかるか？」

「わたしの……名前……」

彩人の予想は残念なことに当たっていた。

「なんで……どうして……」

昨日の今日で自分の名前さえ忘れてしまった。彼にはその理由が全くわからない。

だが紛れも無い事実。

「わからない……わからないよ……」

ルネは首を振って彩人のほうを見る。その目は救いを求めている目だ。

彼女の雪のように白く綺麗な手が彩人の服の裾を掴む。

「あなたは誰？ わたしを知っているの？」

彼女は混乱している。

「ねえ？」

彼女は問うことをやめない。

「ねえ……何か答えてよ……」

雪が溶け出すように目元に涙が溜まっていく。  
それを見て彩人はようやく気付いた。

（違うだろう。俺が混乱していてどうする！）

そして藍がここを出て行く前に言った言葉を思い出す。

（そうか……）

「それで藍さんは俺にこの子を……」

記憶を失くした少女は助けを求めている。

記憶が無いという恐怖から。

そして彼女を理解し救うことができるのは同じ境遇を味わったことのある人物。

藍さんはそう思って俺にこの娘を任せたんだ、と彩人は思った。

「俺は……君を知っている……」

「ほん……とう？」

「ああ、少しだけだが」

彼女と会ったのは昨日が初めてであるが、彩人はルネを一先ず安心させることが重要だと考えた。そしてルネが落ち着き始めたところで話を進めることにする。

「君がどのくらい覚えてるか教えてくれないか？　少しでもいい断片でも。何か覚えていることはないかな？」

彼女に残された記憶を探る。何かあればそれは彼女自身が記憶を取り戻すきっかけになるかもしれないからだ。

「……覚えていること？」

（思い出させてやりたい）

「そうだ。何でもいい。たとえば……『風景』とか『人物』とか自分のことじゃないものでも何でもいいから！」

（ルネに俺と同じ苦しみは味わって欲しくない）

「え、えっ……と」

ルネが言葉を詰まらせる。

彩人は必死になってしまっていたので気がつかなかった。彼の手は少女の華奢な肩をしっかりと掴んでいた。そして顔も目と鼻の先に……。

「ご、ごめん！」

咄嗟とっさに彼女から手を放す。

（しまった……）

彩人は、恐がらせてしまったか、と内心不安だらけ。ここからどうつなげればいいか困ってしまう。手が宙を漂う。

「……。ちよつとだけ覚えてる……」

「ほ。本当か？！」

ルネが返事を返してくれたことと、覚えていることがあるという、二つのことで彩人は安心すると同時にとうれしさが表情ににじみ出る。

「どんななの？」

「暗かった」

「暗かった？」

ルネは頷く。

「暗かった。でも、明るくて……暖かかった」

「暖かかった？」

「どういふことなのかはよくわからないの。でも黒か白しか無いところだった。なぜか、その時のことを思い出すと心が落ち着くような気がする。暖かい。」

「白と黒。暖かい、か……」

（白……白い物。暗くて……）

彩人は一つ思い当たることがあり、立ち上がる。彼が立ち上がるとルネも見上げる形で彼を目で追う。

（もしかして……）

向かう先は窓。そしてカーテンを開けてルネにそれを見せる。

「白い物っていうのは『これ』のことじゃないか？」

冬なので五時ぐらいでもちようどいいだろう。

そこには闇の中に白い粉が降り、そして積もっていた。

「そう……かもしれない」

ルネの反応を確認し終えて、彩人はカーテンを閉めて彼女の傍にまた座り込む。

（おそらく、これは昨日のことではないだろうか？ できればそれ以前のことも何か覚えているといいのだが）

「そう、か。じゃあ他に。それより前のことは覚えていないか？」

ルネは考え込む。

必死に何かを思い出そうとしているのだろうか表情は曇ってしまった。

「よく思い出せない……」

彩人は自分と出会う以前のことを聞き出そうと思ったのだが、思うようにはいかせてくれなかった。

（昨夜以前の記憶が全部消え去っているのか……）

それはかなりの障害だった。

彩人が彼女と出会ったのは昨日だ。これでは、彼女がどこからきたのか、何者なのかさえわからない。

（聞くべきなのだろうか……）

知ってしまったえば自分も今いる側の世界から離れてしまうかも知れない。でも、彼女のことがかかるなら、何かの手がかりが手に入るなら。

（俺は聞くべきだ）

踏み込んではいけないような一線を彼は跨ぐと決心した。

「なあ？」

「炎と氷、覚えているか？」

彩人が尋ねたのはあの男とおそらくルネもいる、あちら側の世界のことだった。異常。普通では考えられないような、まさに存在するはずがない空想の中だけの、小説の中とかに出てくる魔法のよう

な力。

「炎？ 氷？」

「見た憶えは無いか？」

ルネからよい反応は得られなかった。

「そうか……」

彩人にとって衝撃的だったあの光景ならばルネも覚えているのではないか、という期待に託してみたのだがこれも失敗。

（まだだ……）

だが彼はまだ諦めない。

（あの魔法のような力は必ず『ルネ』という人が何者なのかということ を明らかにする手がかりであることは間違いないはずだ）

「俺は今から昨日の夜あったことを全て話す。だからなにか思い出 すことがあったら言ってくれ」

「うん……、あ、でもその前に一ついい？」

ルネは優しく問いかけた。

「さっき言っていた『ルネ』というのは……わたしの名前だったよね？」

「あ、ああそうだよ」

それは彩人がルネという人物について知っている唯一、確信性の もてることだった。

「君が自分でそう名乗っていたから間違いない……と思うよ？」

「じゃあ、これから私のことを『ルネ』って呼んで」

「え？」

ルネは、だつて、と言い。

「私のことをその名前で呼ばないようにはしていたでしょ？」

彩人はルネに心を見透かされた気がした。

「私が『ルネ』だとしても、その名前で呼ばれたところで私にはその 実感がないから……。えっと……『あーと』だったっけ？ あな たはそれを気遣ってくれたんじゃないの？」

「あ……うん。まあそんな感じだ……。つと。ところで『あーと』っ

てなんのこと？」

「あなたの名前」

「『彩人』ですが……」

「ご、ごめん！」

「おお……！ 気にしないでいいって」

彩人はルネとの間の壁が溶けていくのを感じる。

美しくも、氷のように冷たく、ガラスの置物のようだったルネは、今はもうそのようなことを思わせなくなっていた。

「さて……」

彩人は昨夜の一抹を語る。

「初めに謝っておかなければいけないんだけど……さっき俺はルネを知っているって言ったけど実は、出会ったのは昨日の夜なんだ。変に期待させてしまっていたら、ごめん。」

「……いいよ。続けて」

「ありがとう。俺が細道を歩いている時、ルネをはじめて見た時だ。ルネは雪が降っている寒い中を一人で歩いていて、俺とすれ違った時に突然倒れそうになった。そのところを俺が受け止めたというのが、最初だな。その時、俺は声を掛けたけど君は返事を返すこともできない状態だった」

炎を操った男が焼き付けたかのように、脳裏に鮮明に残されているあの出来事を、フィルムを再生していくがごとく思い出していく。「俺はルネを新代荘、えつと……今いるこの場所に連れて来ようとしたんだ」

「……ルネを助けてくれた？」

「ま、まあそうなる……かな？」

「ありがとう」

ルネが笑顔を見せる。今までずっと悲しげな目をしていたのが全て飛んだわけではないが、それでも今までの表情より断然良い表情となっている。

「ど、どう……いたしまして」

彩人はその笑顔を見てうれしさとともに恥ずかしさを感じ、目を少し逸らし指で頬を搔いてしまう。

「さ、さあ続けよう」

（この先はあの男と遭遇したところだ。もう迷ったりはしない）

「俺がルネを負ぶって走っている途中で一度目を覚ましたんだ。だけれどその時のことなんだけど……君のことを狙っている人が現れた」

ルネの表情が曇る。だがこれも彩人も覚悟していたことだ。少々不安にさせたとしても、やはり何かを思い出させてやりたい気持ちが上回った。話すとちゃんと一度決断したことなのだから曲げるわけにはいかない。

「恐いかもしれないけど、お願いだ。聞いてくれ」

彩人は、これで少しは恐怖が弱まれば、とルネの手を握る。頼れるものがいれば安心感を与えることができる。彼女の小さな手も彩人の手を握り返す。安心感にかわる肌のぬくもりが伝わる。

「その男の目的はおそらくルネを捕まえることだったと思う。目的とか、捕まえた後どうするかはわからないけど」

ルネの手が彩人の手を強く握る。

「これは馬鹿馬鹿しいことだと思うかもしれないけど、ここで訊きたいことがある。ルネは魔法みたいな不思議な力は使えるのか？」

「ま、ほ、う？」

（駄目か……）

「ルネを追っていた男について話そう。男はその魔法みたいな不思議な力を使っただ。炎を何も無い手から生み出して、それを自在に操ることができた。信じられないかもしれないけど事実なんだ。

男はその炎を使って俺たちを襲ってきた」

「炎……」

「でもその男だけじゃない。ルネも同じような力を使っていた」

「ルネが？」

「ルネは氷を操っていた。君にもその男と同じように何か不思議な力を使えるらしい」

「氷……。ルネはそんなの知らない。できないよ。怖い……」  
手の締め付けがまた強くなる。

「でもその力のおかげで俺は助かった」  
「え？」

男が彩人に炎を振りかざした時、普通なら絶対に焼き殺されていただろう。彼がこうしてここにいるのもルネが不思議な力を使って氷壁で守ってくれたおかげだ。

「ルネがその力を使ってくれなかった俺は今頃灰になっていただろうな。だから覚えてないと思うけど、ルネは俺の命の恩人だよ」

ルネの顔がやや驚きに満ちた後、うれしげな顔になりかけたその

時

「うつ……！」

彼女の手が彩人の手から離れ彼女の頭に当てられる。

「大丈夫か?!」

「大丈夫……少し頭が……。何か思い出しそうだったのに……」

「無理に思い出そうとしちゃ駄目だ」

急なことで彩人も戸惑う。

「もう一度横になった方がいいかな？」

「大丈夫だから……続けて……」

でも、と彩人が言うのをルネは押しとどめる。

「……わかった」

次は男が言っていたことについてだ。

「ここらへんは俺もよくわからないんだけど。あの男は世界の異常とか、自分とルネのことをたしか改変者<sup>アルター</sup>って言ってた……。何か思い当たることないかな？」

ルネの頭はなかなか縦に頷かない。

彩人はかたつぱしから手当たり次第に手がかりを探ってみたが、良い結果は得られなかった。

「そうか……」

「ごめんね……手伝ってくれてるのに何も思い出さなくて……」  
「いいや。誤るのは俺の方だ。結局、俺はルネのためにはなにもできなくて……」

彩人は奥歯をかみ締める。

「ううん」

ルネは自分を責め立てる彩人に責任は無いと、彩人の言う事を否定する。

「いいの……。ありがとう。だって、彩人はルネを助けてくれた。それはルネが感謝することだよ？」

「俺は君を助けることはできていない」

（ただあの時、俺がルネに助けられただけなんだ！）

彩人の膝の上に置いたこぶしに力が入る。

「どうして？　なんでそんなに必死になってくれるの？　ルネと彩人は会ったばかりなんですよ？」

ルネには自分にここまで世話をやく理由に見当がつかなかった。

「君が俺と似ているからだよ」

彼はそう答えた。

「同じ？」

「ああ……。俺も八年前に記憶を無くした。そしてルネと同じようにそれ以前のことは思い出すことができない。名前もね。でも今の名前は記憶を無くす以前と合っているらしい。俺が目覚めた時には藍さんがいて、名前を覚えてくれた……」

この話を知っているのは新代荘の藍、幸祐、若葉、それと乃樹や雨夜ぐらいの親しい友人くらいである。

彩人の目は現在ではなく過去を見ていた。八年前の記憶を無くしたときの自分。その時の境遇と似たルネを見てどのようなだったか、思い出すことができた。

「その時、俺も恐かった」

当時の感情がこみ上げてくる。

「そう……だったんだ……」

ぐうー。

腹の虫が鳴る音。

その出所はルネのお腹だった。

「ふっ、お腹空いたか？」

「うん……」

ルネは掛け布団で顔を隠して小さくなる。

「藍さん遅いなー」

時計の短針の先は六に向けられていた。まどの外も彩人が新代荘に帰った時よりもずいぶん暗くなっている。

「ごめん、藍さんが帰ってくるまでもうちょっと待って」

「ありがとう……」

「？」

「あなたのおかげで恐なくなった気がする。ずっと記憶を無くしたままのあなたに比べたら私は……このくらいでへこたれていたら駄目だね」

ルネの顔には幾度か笑みがこぼれるようになってきた。彼女の透き通った声ももう震えていない。

「君は――」

ガチャリ、とドアの開く音がした。

「帰ってきたかな？」

ドアから部屋に続く通路の方を見る。

「どう？」

と、廊下の方から藍の声が彩人の耳に届く。

藍は買い物袋を両手に持って現れ、部屋に居た二人の様子を見ると「うまくいったようね」と小声で呟いた。

「元気になったルネちゃん？」

「あ、えっと……昨日はごめんなさい」

「いいの、いいの。私の名前は新代藍。藍って呼んでくれて構わないわ」

「藍。昨日はありがとう」

（どういうことだ？）

謎のルネと藍のやり取りを見つめる彩人。

「鍋のことよ」

「ああ、それが」

彼は残しておいた鍋をルネが食べたと言っていたのを思い出して納得した。

その時ルネが立ち上がった。

「もう起き上がって大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫」

そう言い、彩人と藍の横を通り過ぎる。

「どうしたの？」

「ルネのために二人ともありがとう」

ルネは二人と反対の方向——玄関の方向へ足を進める。

「お、おい、ルネ！どこ行くんだよ？」

「もう私は行かなくちゃ。これ以上迷惑かけられないし」

「どうしてだよ」

「え？」

「行くあてがあるのか？」

口を閉じたままのルネ。記憶を失くした彼女が行くあてなどどこにも無かった。

「それは……」

なにか言おうとしても返答が見つからない。

その様子を見た彩人はとるまでもない確認をとった。

「藍さん、いいですよね？」

「もちろん」

彩人と藍は確認する内容を話す必要なく伝え合う。

ルネは何のことかさっぱりわからず、二人の顔を交互に見る。

「？」

「ルネ、行くあてが無いんだろう？」

「……」

「無いのよね」

「……うん」

「だったら――」

新代荘は、藍が彩人、若葉、幸祐の面倒を見るためにあるようなものだ。彼らはそれぞれの事情を抱えている。ここではそのような四人が集まって家族のように暮らしてきた。

そして今、もう一人、事情を抱えた者がここにいる。  
ルネ。

記憶を無くし行き場を無くした少女。

彼女も彩人たちと変わらない。

だから。

「ここに残らないか？」

受け入れる。

彼らのような者達のためにある。それが新代荘の役割。

「でも……」

「別に迷惑なんかじゃないさ。むしろ家族が一人増えるようなものだよ」

「家族……」

「そう、俺とか、まだ帰ってきてはいないけど幸祐と若葉も。俺たちは居候さ。藍さんにもう何年もお世話になっている」

「そうよー。あんた達を育てるの大変だったんだから。今更、もう一人増えたところで苦労はしないわよ」

「だからさ、行く当てもないのにどっか行っちゃうぐらいならここ

に残って欲しい。記憶が戻るまでもいいから」

「いい……の？」

「もちろん」

「ええ」

本人が望むのなら断る必要は彼らには決して無い。

ルネは踵<sup>きびす</sup>を返し――向かった先は。

「じゃ、じゃあ……よろしく……」

ルネはそう言い残し布団を頭から被ってしまった。

彩人と藍は互いに見合わせ、同じ表情を作る。

「相当、恥ずかしがり屋さんなのかもしれないわね。そうね……部屋は彩人、あんたの隣の部屋をこの恥ずかしがり屋さんの部屋にしましょう」

彩人は「二階に俺が一人ぼっちになることがなくなった！」と一人で内心、今まで密かに感じていた孤独感からの解消に喜ぶ。

だがそれよりもこの新代荘の皆にとって喜ばしいこと。

新しい家族の一員。

二月十三日、新代荘に新しい住人が加わった。

## 二章（3）　〇〇五号室

六時過ぎ、幸祐こうすけと若葉わかばが部活を終えて帰宅した。

「よろしくねー、ルネちゃん」

「う、うん……」

若葉は「かわいいー」とか「髪さらさらー、きれい」などと叫びながらルネを抱きしめたりしていじくり回していた。

対する若葉にいいようにされてしまっているルネの方は激しいスキンシップにどう答えていいものかと困り果てていた。

「俺は幸祐だ。よろしく」

幸祐はルネがその状態のまま自己紹介をし、彼女は目の前で虫が飛び交うのを首を動かして避けるように、若葉を避けて幸祐の姿を見ようとする。

「よ、よろ……しく」

「若葉よ、いい加減にしてやれ」

若葉はいつまでもルネをいじくるのを止めそうにないので、その光景を横で見ていた彩人あやとがルネから若葉を引き剥がして止めに入る。これで残っていた新代荘にいしろそうの住人の自己紹介も終え、夕食に。

「安心しなさい！ 今日ちゃんとガスが点けられるわよ！」

藍あいは昨日の約束をすっかり守り、今日はガスが使えるようになっていた。

「もう！ 今日学校で汗臭くないか、すごい気になってたんだから！」

ガスが使えなかったために昨日は風呂を沸かす事ができなかった。近くに銭湯があるわけでもなく、だからと言って何もせずそのままというのも気が引ける。そういうわけで昨日は、まずタオルを濡らし、電気ストーブの前で十分に温めてから、それで体を拭く、という対処をした。

それで彼らの納得がいくわけがなく、まだ藍を許していない。

「はいはい、その話はもう終わり。夕飯にするわよ」

「今日の夕飯は？」

と、幸祐。

「カップ麺よ。しょうゆ、塩、とんこつ、他にも色々あるわ。焼きそばもあるわよ」

「藍さん、これを買に行ってたんだ……」

藍が夕方に出かけて行ったわけを理解する彩人。

「そうよ、見て、ケース買い」

藍が同じカップ麺がいくつも入ったダンボールの一つを持ち上げる。床には違う種類のカップ麺のダンボールが積んである。

「せっかくルネちゃんが新代荘の新しい一員になったのに、どうして最初の食事がカップ麺なの！ もっと、ぱつと豪華な夕飯にしないとルネちゃんが可愛そうじゃない！」

「そうは言ってもねえ……昨日、鍋だったでしょ？」

「だからって今日は記念日だよ！」

若葉がブーイングを藍にぶつけている。

「じゃあ若葉がどうにかしなさい。錬金術で金でも作ってみなさい。残念ながら今、新代荘には余裕が無いの！」

「ごめんね、ルネちゃん。うちのお母さんがケチで」

「よくわからないけど……そんなに気を使わなくても……」

状況に流されるままのルネ。

「歓迎会は終末にできるようにしてみるから。今週いっぱい夕食はこれで乗り越えましょう！ カップ麺うーく！」

「待って、藍さん？ まさか一週間、ずっとカップ麺？！」

幸祐が「マジで？」という顔をしている。

「……」

「カップ麺？」

「さあ、みんな選ぶわよー」

藍が全種類のカップ麺を丸机に並べていく。

「本当に一週間これで過ごすのか……」

「あたしたち食べ盛りな高校生なんですけど……」

「木曜にあたりから気持ち悪くなって食べれなくなりそうだし、それぞれ嫌な顔しながらカップ麺を選んでいく。」

「そんなにおいしくないの？」

三人の様子を見たルネが眉を顰めて尋ねる。

「まあ、おいしくないわけじゃないんだけどな。カップ麺は初めてか？」

「カップめん……」

「初めてらしいぞ」

幸祐がルネの反応から推測する。

彩人は、彼女が記憶無くしてしまったからだろうかと思いついたが、彼女の容姿を見ると本当に初めてかもしれないと思うのだった。  
(外国人っぽいもんな)

各々お好みのカップ麺を手にとってから一つの丸机を五人で囲んで座り、ガスが使えることで沸かせるようになったお湯をカップ麺に注ぎしばし待つ。

「そうか、記憶喪失か……」

彩人はルネが記憶喪失でほとんど何も覚えていないことを幸祐と若葉にも話した。それは彼が二人にも知ってもらっておいた方がよいだろうという判断からだった。

「困ったことがあったら言ってね、ルネちゃん。力になってあげるから！」

「俺たち家族みたいなもんだかたな、気兼ねなく接して構わないぞ」  
幸祐も若葉もルネを当たり前のごとく新代荘に招き入れる。

「ほらな？　ちゃんと受け入れてくれるだろ？」

「うん……」

時計を見ていた藍が「そろそろかしらね」と言っただのでルネを交えた初めての夕食へとかかる。

「ルネ？　ご飯を食べる前にはこうして手を合わせて『いただきます』と言って、食べ終わりに『ごちそうさま』って言うのよ」

「いただきます?」

「そうよ。では、食べるとしましょうか」  
彼らは、せーの、で合わせて。

いただきます。

と。

「どう? カップ麺はおいしい?」

ルネはしょうゆ味のラーメンを食べていた。他の四人の真似をしようとして麺をすすって食べようとするが、苦戦していた。ちなみに箸が使えなかったので、フォークで食べている。

「ん……」

「うーん、いまいち、かな? お口に合わなかったみたいね……。こつち食べてみる?」

藍が食べていたのはさっぱり系の塩ラーメンであった。買ってあるカップ麺のラーメンの中でも一番くどさを控えたものだ。藍はそれをルネに差し出す。

ルネは若葉に教えられたパスタを食べる時のように麺をフォークに絡ませる食べ方で口に運ぶ。

「こつちのほうか食べやすい……」

「ルネは薄味の方が好みっばいな」

「となると一週間くらいんじゃないか?」

カップ麺は基本、油分が多くてくどいため、ルネにとってカップ麺での生活は厳しいであろうと推測された。

「考えておくわ。ルネ、さっき食べていたのが食べにくかったら交換してもいいのよ」

「でも……」

「遠慮なんていらないの」

「お願いします……」

「それでいいの。だって私たちはもう家族なんだから」

藍が当たり前だと、そのように言った。  
家族。

ルネにとってとても安心感を与えてくる言葉だった。  
ただ。

家族がどういふものかという知識はある。しかし、いったい自分の  
本当の家族はどうなのだろうか？

ルネにはそれが――わからない。



夕食を終えて、彩人とルネは新代荘二階、『〇〇五号室』に来て  
いた。

「いやー、すっからかんだなー」

彩人は部屋の中を見渡す。

部屋を照らす電球が天井に、布団が部屋の中央にあるだけだった。  
今まで使われていたのは『〇〇一号室』『〇〇二号室』『〇〇三  
号室』『〇〇四号室』の四部屋だけ。よってこの部屋は何年間も放  
置状態にあった。しかし、埃だらけでというわけではなかった。

（藍さんが掃除してくれたのか……）

「ルネもこっちこいよ」

何をしていいのかわからないルネは部屋の前で立ち止まっていた。  
それを手招きする。

「えっと、なにかから説明したものか……」

彩人とルネがこの部屋に居るのは他でもない。ルネがこれから使  
用することとなる部屋の事についてだ。

藍曰く「あんたも同じ二階なんだからこの子が慣れるまで面倒を  
見て上げなさい」とのことだった。

（ルネって一体どこの人なんだろうか？ 外見からして完全に俺た  
ちとは違う人種だよな）

髪は雪のような銀髪。白い肌。そして透き通った青い瞳。そのど

れもが、彩人や彼以外の新代荘の人々とは全く似ていない。

（でも）

何故か日本語ぺらぺら。

「なんでかなー」

ルネの話す言葉はとても流暢である。日本語を話すことのできる海外の人は単語と単語の間を置きながら「ワタシ、ニホンゴ、スコシ、ハナセル」といったようにガチガチとした日本語になっってしまうが、ルネのものはそれとは違う。流暢でないカタコトな日本語に対して違和感があることが普通であるはずなのに、彼女の場合、流暢過ぎることに対して違和感があるほどだ。

（ルネはカップ麺のことを知らなかったな……。庶民の味を知らないどころかのお嬢様だったりして。あ、そもそもカップ麺がこの国にもあるわけじゃいか）

「まあ、全部教えるか」

彩人は壁に設置された部屋の電気を操作するスイッチの傍に移動する。

ルネの視線は彩人の動きに合わせて壁の方向に動く。

「これ何かわかるか？」

スイッチを指差しながら尋ねるが、ルネは小首をかしげる。

（んー。知らないみたいだな……）

「これはこの部屋の電気のスイッチだ」

「すいっち？」

まだ不振そうな目で彩人の指差す物を見ている。

（スイッチもわからないのか……。まさか、記憶喪失で忘れてしまったのか？）

彩人はしばし考え込む。

自分の体験のことであって少しは記憶喪失の知識があつた。

記憶喪失。正確には健忘と呼ばれる記憶障害の一部になるのだが、様々な種類がある。

彩人の場合は全生活史健忘というのに当てはまる。それは発症以

前の自分に関する記憶を失くしてしまった状態を指す。

またルネの記憶喪失についてはいつ記憶を失くしたかを決定付けることができないが、彩人にはこれと同様だろう、と考えられた。

自身に関する記憶といっても、知識として蓄えられた記憶は含まれない。

そのため何もかもを忘れているわけではなく、言葉の意味、知識としての記憶はそのまま残されていた。もし全てを忘れてしまったら、それはまだ世界を知らない無知な赤子のようなものである。

（ルネは『スイッチ』が存在しない環境に居たってことだろうか。一体どんなところにいたんだ、この女の子は。まあ、ぼちぼち思い出していつてくれればいいことなのだが）

「これは、『スイッチ』と言ってな、この部屋の電気を操作するものだ。ところで電気はわかるか？ この上で明るく光っているこれのエネルギー源みたいなものだが……」

彩人は途中で言葉を断つ。

初めてのものをみて不思議そうに『スイッチ』の方を見ていたルネの目が、今は彩人を睨みつけていたからだ。

「ど、どうした……」

「——にしているの？」

「え？」

「バカにしているの？」

ルネの知識には電気というものはあったようだ。

「いや、バカにしているっていうか……」

彩人は困惑する。

（さすがに電気は知っていたか。これは失礼なことをした）  
だが、それよりも。

（ルネも怒ったりするんだな）

数間前の美しいガラスの置物のようだった彼女は、もうすっかり普通の女の子として感情をあらわにしている。彩人には前の彼女が嘘のように感じられた。

「彩人はいくらわたしの知らない物ばかりだからってルネをバカにしすぎてない？　いくらルネに記憶が無いからって、それくらいのこととは知ってるよ」

唇を尖らせてすねた様にそっぽを向く。

「そ、そうか。それは悪かった」

彩人は「ルネはどこから来た人かわからないし」とか言い訳はできなかった。ルネはもう開き直ってしまったように話してはいるが、それが本心とは限らない。新代荘の他の皆に迷惑をかけまいと振舞っているかもしれない。話しの流れがそちらの方向に流れないように、彩人はなるべくルネの記憶を失くす前のことについてはむやみに探らないようにする。それは彩人なりの彼女に対しての気遣いであつた。

（しかし、ますますわからなくなってきたな……）

ルネの記憶を取り戻すための協力は大変な道になりそうだと彩人は頭を悩ませる。

「ま、いつか。この『スイッチ』を押して切り替えると部屋を明るくしている明かりが消える。まあこんな感じに――」

ルネは「消える？」と一度確認を取りたかったのだが彩人が先にスイッチをオフへと切り替えてしまった。

明るかった部屋が一瞬にして、真っ暗になって何も見えなくなる。

「ひゃあっ！」

ルネが、明るかった部屋が急に真っ暗になってしまったことに驚いてしまい、突如短い悲鳴を上げた。それとともに、ドカンと何かが壁にぶつかった音がした。

部屋が真っ暗なので何が起こったのかわからない。

「おい！　どうした！」

彩人は慌てて電気を点けると、ルネは仰向けになっていた。

「おい、大丈夫か！」

そして倒れている彼女を急いで起こしにかかる。

「う……」

「大丈夫か！ 起きろ！」

ルネが電気を消したことで壁にぶつかって、その衝撃で倒れたということを考えるより先に、『彼女がまた倒れてしまった』ことに驚き焦っていた。

彩人が必死で肩をゆする。

パチツと目を開けたルネは「きゃっ！」と今度は明るくなっていることに驚き、勢いよく彩人の体にしがみついた。

「うわっ！」

しかしそれはルネの渾身の頭突きとなったことによって彩人の体が背後に床に叩きつけられる。

「痛っ！」

「うう……」

（何か柔らかいものがっ！）

ルネは強く目をつぶった顔を思いつきり彩人の体に押し付けるとともに、彼女の別の部位も当たって――

ルネは彩人の体にしがみついているが傍から見れば抱きついているように見える。彼女の体温が彩人に直接伝わっていく。

綺麗な銀色の髪が彩人の鼻をくすぐり、鼻がむずむずしたことで彩人は我に返る。

「ル、ルネ、あた、当たって、る！」

彩人は言葉が途切れ途切れにしながらも高鳴る心拍を押さえようとす。

ルネは「ううー」と言いながらまだ彩人にしがみ付いている。

「ああ……しばらくこのままでも……」

（い、いや、だめだ！）

彩人は胸の心底から込みあがってくる欲求を必死で追い払いながら、ルネの体もろとも起きる。

「だ、大丈夫か？」

そつとルネに声をかける。

（なんだろう、すごく残念な気持ちが……）

と、一人心の中で後悔の念に取り憑かれるのだった。

「びつくり……した」

ルネの水晶のような青みがかった瞳には雫が溜まっていた。

「ごめん……まさか抱き————えつと、いや、その……突進してくるまで驚くとは思わなかった」

「だき？ あれ……ルネさっきなにを……」

「えつと、わかった……かな？ あれでこの部屋が暗くなったら明るくするんだけど……」

それに頷いて答えたルネは顔をあげない。

「ルネ？」

彩人は俯いたままのルネを不思議に思い、前髪で隠れた彼女の表情を覗こうすると、彼女は彩人に自分の顔を覗かれる前に彼のいる反対の方向に座っている状態から体を回転させてすぐに立ち上がった。

「な、なんでもにやいつ！」

（あ、噛んだ……）

「なんでもないからね！ その……さっきのは……その……。もういい！ 彩人のバカ！」

「バカ?!」

ルネが目を見開き口を開きながら彩人と目を合わすのを避ける。

（まあバカとは……否定はできないとしても納得しないな。驚いてしまったことに恥ずかしがってるのかな？）

「気にするなって、いきなりのことだったんだから」

「あ、うん……」

「知らないことが起こったら誰でも驚くって」

「？」

ルネを見あげていた彩人も立ち上がる。

（やわかったな……。でも、やっぱり、小さかったような……）

彩人がそう思った瞬間、殺気を感じた。ルネの顔を見るとむっとしていた。

「彩人？」

「……はい」

「なにか失礼なこと思わなかった？」

「……。いえ、なにも」

「そう」

彩人の緊張の糸が切れる。

「で、他には？」

「ん？ ああ、わかった。そうだな……」

それから彩人は布団の敷き方、水道の使い方、窓の開け閉めまでこまめに教えていく。そのたびに彩人はルネの不思議そうな目を見ることとなった。

「こっちの扉がトイレで、こっちがお風呂な」

部屋の方の解説は終わらせてその他の場所の解説に入っていた。

そこでルネから困った質問が出てしまう。

「これはなに？」

「この扉が体を洗うのと、あっちの扉が便所だ」

二つの扉のうち手前にはまず洗面所があつてさらに扉を一枚はさんで風呂場があるという構造になっている。

二人で風呂場まで入る。

「これは浴槽、って見ればわかるよな」

「じゃあこれは？」

ルネが指差したのは蛇口のところについている水栓である。

「ああこれな。三つ付いているから間違えないように気をつけて欲しいんだけど、この赤いラインの入っているのを回すとお湯が出て青いラインの入っているのを回すと冷水が出る。そして最後にこのレバーは蛇口で出すかシャワーで出すかを決める」

三つも操作する部分が付いているのでルネには使うのに困りそうだな、と彩人は思う。

「これを回せばいいんだね？」

ルネがお湯の方の水栓を回そうと手を掛け――。

「ちよつと待った！」

経験があるのではないだろうか。わざとでもなく蛇口を回したときに、それがその蛇口にとつての『回しすぎ』となって、勢いよく水が予想を上回って噴出してきたことが。

「？」

彩人がルネの動作を止めにかかったので彼女は後ろを降り向いたが、水栓はすでに開けられていた。

ルネの頭上に容赦なくシャワーからお湯が降り注ぐ。

「え？ ええ！」

頭からルネが濡れていく。

「早く栓を閉めないと！」

あたふたしているルネが水栓を閉めるのを待っていられず、彩人が代わりに閉めに行こうと蛇口の傍にいるルネに近づいたその時。

「しまつ――」

バナナの皮を踏んだときに起こるお決まりと同様に、見事に彩人の右足が濡れた床の上でスリップ。左足で必死にバランスを保とうとするも上半身は既に後ろへ反り、両手が天を仰ぐ。

「彩人！」

彩人が倒れそうになるところでルネが天を仰ぐ彼の右腕をキャッチ。

しかし。ここで彩人の方もルネの腕を掴み返したのがいけなかった。もし彼が彼女の腕を掴んでいなければ、彼女の方が彼の腕をいつでも放すことができたのに。

ルネのほっそりとした外見からもわかるように彼女の体重は軽く、そのため彩人の体を支えられるわけも無く。

「ひゃ！」

彩人に引つ張られるようにしてルネも一緒にバランスを崩す。

「やつほー、様子見に来たよー」

そこでこの『〇〇五号室』の扉が開いた。「どう？ 終わったー？」と若葉と幸祐がこの部屋に入ってきたのだった。  
（待て！ このままだと嫌な予感しかないぞ！）  
彩人の思いはバランスを崩してしまった体の動きを止めることはできない。

ドゴン、と風呂場で音がする。

若葉と幸祐の二人はもちろんその音がした風呂場へと向かうのは必然的だった。

「なに？ 風呂場？」

「っばいな」

そして「来るな！」と彩人が叫んだときには時既に遅し。

風呂場の入り口に立った男女二人は風呂場にいる男女二人を見た。入り口に立つ二人——若葉と幸祐は硬直していた。

風呂場にいる男女二人——彩人とルネとはといえば、彩人が風呂場に大の字で仰向けとなり、その上にルネの体が乗る。そこへ、水栓が閉められない限りお湯が出続けるシャワーから永遠とお湯を雨のように降らせていた。

当然のことながら、彼らは二人とも全身ずぶ濡れである。

「彩人」

若葉の声が通常時よりも低い。

殺気に満ち溢れている。

「やつちやつたか……」

幸祐はこれから起こるであろう惨劇から目を逸らすように手で目を覆い隠す。そして静かに部屋から出て行った。

「待て！ 誤解！ 誤解だ！ 誤解です！」

仰向けに倒れている彩人からは若葉を見上げる形になる。

「ルネちゃん大丈夫？」

「いたたたた……。あれ？ 若葉？」

ルネがようやく若葉がいることに気付く。

「うわっ！ びしょびしょ……」

そして、全身が濡れていることも。

「ん？」

さらには、下を見ることで。

「あ、彩人？！」

下敷きにいる人がいることも。

「ルネちゃんはもうそのままシャワー浴びちゃって。で、その間に」

にこつ、と笑顔をつくる若葉。

「ちよつとこつちに来ようか、彩人くん？」

彼女の言うままに彩人は風呂場から連れだされ（部屋を濡らさない程度に水滴を拭いて、しかし服は水分を吸ったままで）、ルネはそのままシャワーを浴びた。

その間、部屋で彩人と若葉は二人で——以下略。

それが終わって彩人は自室に強制帰還させられた。

そして現在、彩人は自分の部屋にいる。

「あつはははは」

幸祐もそこに居た。一連の話を聞き爆笑中。

「笑いごとじゃねえよ。なんであんなに俺がどうこう制裁を受けなければいけないんだよ……。あれは事故だって」

彩人は『〇〇五号室』から若葉に蹴り飛ばされて追い出された。

外は冬の夜であり、もちろん寒さに満ち溢れていた。それに濡れたままの格好、と追加効果が。

「まあ、大変だったねー。でも絶対に内心で喜んでいただろう？ ウハウハだっただろう」

「……い、いやそんなこは！」

彩人はすぐに否定できなかった。

「しかしなあ……。昨日出会った、というか実質今日会ったとも言える女の子に、もう……。そんな……。このまま大人の階段へと足をかけて……。」

「殴っていいか」

「暴力はだめだぞ。少女誘拐犯」

幸祐はやれやれ、と素振りをする。

「だからルネは俺が連れ去ってきたわけじゃねええええ！」

## 二章（４） 変わり始めている？

翌日。二月十三日、火曜日。

昨日は色々とごたごたしていたこともあり、彩人あやとはよく寝ることができた。

しかし、少し風邪を引いたような気がする。やはり、濡れたままの格好で外へ追い出されたのが一番に体に響いたのだろう。

今日もいつものように『〇〇一号室』へ。幸祐こうすけと若葉わかばは朝から部活で、彩人だけが取り残されていた。

そして、いつもの、日常的な、変わらぬ新代荘にいしろそう『〇〇一号室』は。「ちよっ……なにやってんの？」  
少し違っていた。

今までは幸祐と若葉が先に学校へ行ってしまうて藍あいしか残っていなかった新代荘には今はもう一人いる。

エプロン姿で。

「なにつてそんなの……」

右手に杓子、左手に味噌汁を入れるお椀を携えた藍が当たり前のように。

「ルネに料理を教えているの」

藍の隣には、エプロンを装着したルネがしゃもじを左手に握っていた。エプロンはデフォルメされたうさぎの顔が至る所についている。なんとも幼げで可愛らしいデザインだ。主に若葉が『ごく希』に使うものだった。

希、というのは普段から全く料理をしない彩人と幸祐の男二人を除いてしまうと、若葉しか使う人がいないのだが、その肝心の若葉は料理が大の苦手であり、陰ながらキッチンの隅のフックに掛けられたままになっていたからであった。

ルネは手についたご飯をぺろりと取り除き、おはよう、と彩人に話しかける。

彩人は、ルネが昨日の今日で新代荘に予想以上に馴染みすぎることには驚いた。

「おはよう。で、なんでまた料理？」

「やつちやいけないことでも？」

「いや無いけども」

彩人と藍の会話にやや不安を感じるルネ。

「なにか……おかしい？」

エプロンをつまんで眉をまゆ顰ひそめて言う。

「いや、変じゃない……よ」

絵柄はいかにも幼稚園児が着ていそうなものだが。

「よかったわね」

藍がルネに言うとな彼女は小さく頷いた。

「ほらさつさと学校へ行きなさい」

彩人はルネによそつてもらったご飯（味噌汁は普段どおり藍がよそつた）を食べて新代荘を後にする。

今日も雪は降っていない。しかし、晴れてもいない。  
上空。

灰色一色。

そのため昨日と積雪量は増えることも無ければ、減ることもない。  
聞きなれてしまった雪を踏みしめる音を聞きながら足を進める。

ところが彩人はとくに何もあるわけでも無い場所で立ち止まった。

「何してる。その二人」

彩人は後ろを振り返り先ほどからこそそと後ろをついて来ている人たちにむかって言う。

彼らはばれていないつもりだったのだろうか、電信柱に身を潜みながらついて来ていたが長いサイドテールが丸見えだった。

頭かくして尻隠さず。

この場合、尻ではなく特徴的な尾が出ているが。

「もう、ばれたじゃんかー」

「いや、俺のせいじゃないって。雨ちゃんのその尾っぱのせいだっ

て」

「なにをー！ 私のトレードマークを侮辱するとは何事か？！」

とかぶつぶつ言い合いながら出てきたのは『ノッキー』こと乃樹<sup>のき</sup>と『雨ちゃん』こと雨夜<sup>あまや</sup>だった。

「昨日から変だぞ。なにをこそそそとしてるんだ？」

「それはこっちの台詞だ！」

乃樹と雨夜の声がぴったりと重なった。

「？」

意味がわからない、と彩人。

「おい、とぼけるなよ、彩人」

「そうだぞ、彩とん」

二人はずんずんと彩人に迫ってくる。

「なにがあった？ 女か、女なのか？！」

「彩とん、白状しないとねー、さもなくば二対一の一方的かつ白旗を揚げたとしても私たちが気の済むまで終わらない雪合戦がはじまるよ？」

「ひでえ！ というか女って何のことだよ？」

「ノッキー戦闘準備」

ラジャー、と言って乃樹が雪球を作り出す。

「白々しい奴よのう。」

「女って……」

女。

女。

女。

（いや俺は彼女なんていませんよ、まったく）

「何があった！ 男なら正直に話せ、彩人」

「『何があったか』って？」

（ああ。ルネのことか。いや、でもルネのことはまだ知らないんじ

や……)

「相手は誰だ？」

「まさか大人の階段上っちゃったとか言わないよね?!」

「幸祐と同じこと言うんじゃないえ!」

幸祐と同じ思考回路でも持っているのか、とふと思ったがそれは無いと思う。

(雨ちゃんは幸祐みたいに頭がよくない。いや、むしろ馬鹿だ)

「今、バカって思わなかった？」

(読まれた?!)

彩人はこのところ藍には見透かされ、さらにはルネにも見透かされ、しまいには雨夜までと、気持ちが表情にそのまま出ているのかと疑いを抱く。

「どうやら、その言動からして間違いないようだな。そうか俺は悲しい、とても悲しい。なんで、なんで俺にも彼女が……」

乃樹が独り言を始めてしまった。

「まあ、そう落ち込むなよ、ノッキー」

雨夜が慰めに入る。

「雨夜、俺と……」

「ごめんっさい!」

腰をぴったり直角に前方へ折って頭を下げ、それとともに彼女の頭から生えている長い尾が乃樹を叩き付けた。雨夜は笑顔で乃樹の言葉を途中で切り捨てる。

彩人はその間に先に行こうとしたのだが、雨夜がそれを易々と見逃すはずが無かった。

「彩とん? 先へ行ってもどうせ学校で会っただから変わらないよ」  
「ならサボればいい、というのは彩人のお決まりパターンであるので。」

「サボったら新代荘に遊びに行っちゃおうかなー」

どの道、逃げ場なんてありはしなかった。

結局、彩人は雨夜に捕まる。



の？ 職業は？ 学生？ 学生だったらこの後学校のホームルームの時間に先生が『実は今日、転校生が来ています』なんてことになるフラグなのかこれは？！ だったらクラスの他の連中より転校生のこといろいろ先に情報掴んじゃうもんね！ 好きなものは？ 嫌いなものは？ 食べれないものとかある？ いやー、なにかお祝いをプレゼントしたほうがいいかなー？ 嫌いなものだったりしたら私の高感度最初からが落ちだからねー。 何事も最初が肝心なんだよ！ だからねっ！ なんでも聞き出しちゃうよ！ 耳にたこになるくらい聞きまくっちゃうからねっ！ 覚悟してよ！」

彩人は雨夜の高速連続攻撃にひるんでしまうが、雨夜のほうはいつまでも話し続けることはできないので必ず息継ぎをどこかですることになる。その一瞬の合間に自分の方から割り込まなければ再び第二波に襲われる。

「もう、たこができてもおかしくない！」

彩人はその一瞬を逃すまいと雨夜の言葉を断ち切る。

「え？ そう？」

雨夜には興奮状態になっていた自覚がまったくと言っていいほどない。

一度波に乗ると、何かに妨げられるまでどこまでも突き抜けてしまう性格は彼女の短所だ。

「もう、すごいよ……耳がギンギンする……」

彩人は両手で自分の耳を押さえていた。

今のもう雨夜の言葉の波が止んでいるのに、彩人にはいつまでも耳の中で聞こえてくる気がしていた。

「で、どんな人？ まさか犬とか猫の類じゃないよね？ さらにまさかで宇宙人？！ 魔法使い？！ 超能力者？！」

雨夜が彩人の体をぐらぐらと揺らす。彩人の首が前へ後ろへと倒れるのを何度も繰り返す。

「やめろ……頭がクラクラする……」

雨夜の手が放れることで揺れを加える力は無くなったが、いつま

でも揺れている気に襲われる。

彩人はバランス感覚を徐々に取り戻していく。

(こいつ、あながち間違っていないことを言うのが恐ろしい……)

「早く言わないと、今度は気絶させるよ?」

「恐いことを言うな! 限度を考えろ!」

雨夜だったら本当にやりかねないと彩人は思う。

彼女はまだかまだかと待ちわびている。

「と、その前に一ついいか?」

「もう! 早くしてよ! 昇天させるよ?」

「それもう俺死ぬじゃん! って……そうじゃなくてさ……おい、その空気」

「俺は空気さ……」

ずっと御経おきょうを唱えるかのようにぶつぶつと何を言っているのか聞き取れないことを呟いている乃樹が姿を現す。

「とりあえず、戻ってこい」

彩人はそのような状態に陥った乃樹を呼ぶが、乃樹の様子は変わらなかった。

「まあいいや……で新しい住人? 何が聞きたいんだよ?」

彩人は雨夜が「あのね、あのね」と続きを言う前に、「一つずつ言えよ」と付け足しておいた。

「とりあえず、一通りのプロフィールを」

名前、ルネ。性別、女。年齢、不詳(ちょっと年下に見える)。

他の項目も以下同様。

「なんかつつこみどころ満載だよ?!」

だから話しづらかったのに、と彩人はさらに嫌な顔をする。

「俺は一応、本当のことを話したよ……」

彩人の背後から、やっぱり女か、と沈んだトーンの声が聞こえてくる。構うのも面倒なので二人とも気にしようとしなない。

「これは……調査が必要だね。学校には来るの？」

雨夜の質問を聞いた時に彩人は思った。

（そういえば、これからルネはどうするんだ？ 学校通うのか？  
でも身元も一切わからないのにそれは無理だよ……。じゃあこれ  
からどうする？ というか今どうしてるんだ？ 俺と幸祐と若葉は  
学校行かなくちゃいけないし、藍さんは仕事あるし……）

雨夜に問われたところからルネが今どうしているのか気になって  
どうしようもなくなってきた。

「学校には来れないな……たぶん」

「んー、残念。どうしたの、彩とん？」

「俺やつぱ今日、学校休むわ」

「あ、ちよつと！ 今度その子紹介してよ！」

ああはいはい、と言葉を返した彩人は彼女の方を見ずに歩いてき  
た方向に向かって走りながら彼女に手を振った。

雨夜は追いかけて学校まで強制連行はせず、そのまま見送った。  
そして彼女は彩人を見送った後、仕方なく傍らにいるそれに語り  
かける。

「ノツキー……いつまでそうしているの？」

## 二章（5） 二人で初めての……

彩人は昨日のように藍あいにの部屋『〇〇一号室』に真まつ先に向かったのだが、ドアノブを回すが鍵が掛かっていた。

（自分の部屋にいるのか？）

今度は階段を駆け登り『〇〇五号室』の前に立ってドアをノックしてみる。

「ルネー、いるかー」

するとドアの向こうがわで、ドタドタと音がする。来たな、と彩人が思ったら次は、ドテン、と大きな音がした。

（大丈夫かよ……）

「開けるぞ？」

ドアノブを回しドアを押すのだが。

ガチャン。

「あれ？」

どうして開かないのかと気になって確認してみるとチェーンが掛かっていた。

「入っていいよ」

中からルネの声。

「いや入れないから……」

チェーンのロックはドアの内側からしか開けることができない。

だから彩人は開けてもらうためにルネを呼ぶ。

ルネがドアの元に駆け寄ってきた。

「入らないの？」

「入『れ』ないの」

昨日と同じように、どうして？ と顔で語っている。

「この鍵のことは聞かなかったのか？」

「藍が一人の時は危ないからって、掛けるように言われた」

「うん。で、それでこれはずさないと俺は入れないんだけど……」  
「そうなの？ あ、そっかこれも鍵だもんね」

彩人は、このようなことは当たり前のようなことではあると思うが、ルネにとつては常識ではなく悪気はないので責めるようなことはできない。

「そうだ。ルネも部屋を出る時はずさなかったのか？」

「はずしたよ？」

これまた当然のように答える。

「……」

（なぜ？ もしかしてこの子、天然？）

彩人は頭を悩ませる。

「だって、彩人は開けられると思ったもん……」

（俺はそんなテクニシャンなスキルは会得していない！）

「……まあ、とりあえずはずしてくれ」

カチャ、とチェーンのはずれる音とともにドアが開くようになる。  
ルネの服装が朝と変わっている。彩人には見覚えがあった。

朝は寝間着として使っていた若葉の服の上にうさぎエプロンという組み合わせだったのだ。しかし、今は、上はフード付きの白い上着を着てチャックを上の方まで上げている。下は紺色のジャージ。

これまたルネの着ている服は若葉の服であった。若葉より背が低いため服のサイズが合っていないくて袖が余ってしまっている。

「やつぱり帰って来たんだね」

ルネが彩人の帰宅を予期していたかのような口ぶりをする。

「やつぱり？」

「藍が言ってたよ。後、帰ってきたらこれを渡すように、って」

言うままに、彩人は紙切れを渡される。

恐るべし新代藍の予言。彩人が今日学校をサボって新代荘に戻ってくることで見越していた。

そしてその紙に書いてあったとおりに彩人はルネを連れて町へ出た。



午前九時。

今頃、皆は学校で勤しんで勉学に励んでいることだろうな、と思いつながら彩人は目的地に向かっていった。

彼の隣ではルネがフードを被り、顔を隠すように下を向いて歩いていた。

（まあ、ルネは目立つちまうだろうから）

彼女は銀髪をはじめ、白い雪のような容姿をしている。

それは彩人たちが住む町の住人とは、全く別の世界に住む人のように見える。

そのためルネは周りの人から浮き彫りになって目立ってしまうのだった。

（ルネが人見知りで恥ずかしがりやだったとは……）

彩人から見た彼女の印象は、誰とでもすぐに打ち解けることができる女の子、であった。

ルネが新代荘にやってきてすぐに藍、幸祐、若葉の三人とも初めて会ったというのにただ一日で打ち解けて、さらに朝の馴染みっぷりと、そのように思うのであった。

（俺たちが特別だったのかなあ）

たまたまルネにとって俺たちは接しやすかった、ということだろうかと考えた。

平日ということもあり町を歩く人はそれほど多くは無かった。それでも歩いていれば何人かの人とはすれ違う。その度にルネはフードを手で下に引っ張り深く被る。

彼女が下を向いて歩いているので、たまに対向から来る人にぶつかっていきそうになる。だから彩人はその際、ルネを誘導して自分

の方へ寄せて避けていた。

（これじゃあ一人でまともにも外を出歩けないんじゃないか？）

藍はこれらのことを予想していた。

だからわざわざ、ルネに大きな目のフード付きの服を着させていたのだった。それと彩人が受け取った紙にも気をつけるようにと書き添えがあった。

ルネがこうまでして出かけるのにはちゃんとした理由がある。

藍からの伝言によると、ルネの身の回りに必要なものを揃えろ、と。買うもののメニューは一覧にしてしっかりと書いてあった。

メニューの中は主に衣類。

いつまでも若葉の服を借り続けるというわけにもいかないからだ。  
（サイズ合っていないしな……）

だから彼らの目的地は服屋もテナントとしてとりこんでいる総合スーパーマーケット。そこならば服以外の買わなければならないものも揃えることができる。

「彩人お……」

フードの中から聞こえるわなわなした声。

「なんだ？」

「まだ着かないの？」

一刻も早く通りから抜け出したいようだった。

「たぶん店の中に入っても変わらないと思うぞ？」

そうこうしているうちに目的地に到着。

店内は（ルネにとって）幸運にも客はそれほど多くは無かった。

平日の上、この時間帯というのに要因があるのかもしれない。

「どれがいい？」

「わからない……」

彩人にもルネにどんな服が似合うとなどわからない。

「試着してみるとか」

「しちやく？」

「一度着てみるってことだ。それでどの服がいいか選んで欲しいだ

が……って、おーい」

ルネはいつの間にか店内の隅に移動していた。手招きして、付いて来させる。

「……。別のところも見てみるか」

ポケットからメモ用紙を取り出す。

「えーと、部屋着を少なくとも二着、寝間着も二着、あとは——  
——んんっ?!」

彩人は買うものリストを上から順に見て行って、とある欄に目が止まる。

ルネは自分の服を一着も持っていないというわけで、つまり。もちろん含まれていた。

外から見えない服以外のもの。  
そう。

(下着っ!)

男のロマン。

「ルネちよつといいかな? って、あれ?」

いつの間にかまたルネが隣から消えている。右左と店内を見回すと店の奥の方、彩人が見える位置にルネが立っていた。

隅によっているルネを手招きすると、とぼと歩いてきた。

「どうしてまたあんなところにいたんだ?」

「だって……」

彩人の視線を追ってみると彼らとは別の客。つまり、ルネは他の客が店内を巡らない位置まで移動したということだ。彩人は、極度の人見知り体質によるものと察する。

「まあいいや。で、本題はこっち。さすがに下着は自分で選んで欲しいのだが……」

大声では言うことができないので、彩人はルネの耳元で控えめに囁いた。

「へえいや?!」

「いやいや『へえいや?!』じゃないって」

「だって……彩人がいきなり下着なんて言い出すから」

まるで自分が変態扱いされているようではないか、と彩人は思う。彼は否定する。断じて変態ではない、と。

「ルネの服を買いに来たんだろう？」

「そうなの？」

「藍さんに聞いてないのか？」

「彩人に紙を渡してつて頼まれたから。そしたら渡された後に『出かけるぞー。支度しろー』っていうんだもん」

今はそのようなことより重要なのは彩人にとってはどの服を買えばいいのか、という課題である。

用が済んだと思ったのかルネはすたすたとまた店の隅へと移動し、彩人のほうを見ていた。

なので仕方なく、今は一人で店内を物色している。

彩人は陳列している女性用服を目の前にして悪戦苦闘していた。

（藍さんはどうして俺にこういうことを任せようとするんだろうか……）

同じ女の子である若葉に任せればいいのではないか、と考える。

「どうかされましたか？」

店の女性店員が気を利かせて彩人に話しかけてきてくれた。

「え、まあ」

彩人はこういう受け答えはあまり得意ではない。

「プレゼントですか？」

店員は、彩人が一人で女性服コーナーにいたので勘違いされてしまった。

「えっと……あの……あそこにいる子の服を探しているんですけど」  
彩人は店内の片隅にいる一人の少女を指差して事情をその人に伝えると。

「彼女さんへのプレゼントですよね」

「か、彼女?!」

あまりに唐突に言われてしまったので声をあげてしまった。

「す、すみません。失礼しました」

勘違いに気付いた店員が慌てて彩人に向けて頭を下げつつ謝罪するのを、彩人は「いいですよ、いいですよ」と言って頭を上げさせる。

「お探しのものはなんでしょうか？」

「えっと……」

彩人は藍から渡されたか紙に目を落とす。

「部屋着、寝間着、出かける時の服、あと……下着も……ですね」

「では、あちらの方の服のサイズはわかりますか？」

（しまったな……。ルネの服のサイズぐらい測っておくべきだったな……。背丈すらわからないや）

と、またも困っている様子を見て店員が気遣いをする。

「ちよつと、あちらの方をお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。ルネー」

ルネは先ほどからずっと同じ場所に立って店内を見渡していた。呼ばれた彼女は彩人のほうに視線を戻すと、手招きされていることに気付き行こうとするのだが。

「っ！」

彩人の横に立っている店員に気付くと、石像のように体が硬直して動作を完全停止。

ルネは呼ばれたからには行かなくてはならないと思いつつも、足の裏が床に張り付いたように歩むことができない。

「すみません、ちよつと極度の人見知りの子で……」

「そう……ですか」

店員を困らせてしまって申し訳ない、という気持ちでいっぱいになる。ただでさえ受け答えは苦手だと言うのに、さらに厄介な事態を作ってしまったている。

「そうですね……」

店員はまじまじとルネを見る。二人の距離は約三メートル。

続けること五秒。

「おおよそのサイズならわかりました」

「ええ?!」

彩人は店員の顔を見る。

「あくまでもおおよそになってしまふのですがね」

「そんなことわかるんですか?」

「ちよつとした特技ですね。センチ単位——部位にもよりまずけど身長や胸囲、胴囲ぐらいなら」

「すごいですね……」

本気で感心してしまっている彩人は、これならルネが他人に近づかなければいけないことも無いだろうと思った。

「でもちゃんと測ることをおススメします」

「いえいえ、全然いいですよ」

「では少々お待ちください」

店員はそれだけ言って店内を回りだした。そして二十秒ほどで彩人のもとに戻ってくる。

「これは……」

彼の目の前には店員が持ってきた大量の服（その他もろもろ）が掛かっているハンガーラック。

「とりあえずこちらにお客様のサイズに合うものを揃えてみました」

「これ全部ですか?!」

「はい。どうぞよろしかったらこの中から選んで試着されてみてはどうですか?」

「あ、ありがとうございます!」

そうして店員は店の奥へ去っていった。

（これ全部ルネのサイズ用なのか? すげえ……。メジャーもなにも使っていない。プロだ。あもしくは勇者だ）

ともかくもあのような店員がいたことは何より助けとなって、彼はお礼とそれに加えて敬意を払った。

彩人はルネに気を使い、店の奥の方に設置された試着室を選んで、一緒に移動する。ここは店内でも死角になり人目を避けることができ

るので彼女も落ち着いている。

「とりあえず、ひとつ着てみるよ」

「うん」

ルネは店員が揃えてくれた服の中から上下一つずつ手にとって試着室に入る。

しかし入ったことはいいものの、なかなか次の行動に移らなかった。

「どうした？ 着ないのか？」

「わかった……彩人あっち向いて……」

「お、おう」

言われるがままに彩人は背を向ける。

（ん？ 何で後ろ向かなきゃいけないんだ？ まあ気にすることもないか）

カサカサ、と。

背後から服が肌と擦れている音。

つい耳がその音を聞き取ろうと傾いてしまう。

後ろで女の子がお着替え中。

（いかんいかん！ 想像しちゃだめだ！）

彩人はじっとしているのがつらくなってくる。

「なあ、まだ――」

だから待つていられなくなつて彩人は何気なく後ろを振り返つた。この時に彼は『まだか？』とルネに対して聞こうと思ったただだ。

他意など無かつた。

そう、ただ自然に。

自然に振り返っただけなのだ。

やましさのかけらも無い。

絶対に。

だって、カーテンが開いているなんて考えるわけがないじゃないか、着替え中に。

以上、彩人の弁解。

「——か、ああ……」

彼の目が留まる。

思考も止まる。

体の動きも止まる。

「？」

それに気付いたルネも同じく静止してしまった。

まるで時間が一瞬止まったようだった。

そして再び時間が動き出す。

まず二人は目を合わせる。

次に顔が夕焼けのように真っ赤になっていく。

最後にお互いの口が開いていき——

「あ、あ、ひつ、あ、ああ」

言葉にならない高い声がルネの口からこぼれる。

その言葉にならないものが、しっかりとした声となったらどうなるのだろうか？

「ま、まま待て！ 落ち着け！」

ここは公共の場であつて。

確かに客が少ないとは言つても。

やっぱり他人はいるのであつて。

「ここでそれは駄目ええええええええええ！」

彩人の願いは無残に散り去り、店内に一人の少女の甲高い叫び声が響き渡ったのだった。

■ □ ■ □ ■

帰り道。

往路とは違った点が一つ。

彩人とルネの間に妙な距離がある。

「はあ……」

彩人はこれほどまでに無い深い深いそれは奈落の底に落ちるよう  
に深いため息をつく。

原因は店での事件。

彼が待ち遠しくなつて振り返つたそこには、砂糖でもまぶしたか  
のような白く美しい上半身。下半身も 同様に白い肌が見えていた  
のだが、もう一つに白い布がその肌を包むように存在していた。

つまり、上半身は裸で下半身は下着一枚という姿のルネが、ちょ  
うど試着した服を着ようとしている最中だった。

もちろんのこと彩人は、その後ルネは叫び声をあげたせいで、サ  
イズを当てる特技を持った店員に事情を必死で説明する羽目となり、  
拳句の上、超絶ビンタをルネに食らわされることとなった。

ルネは着替える前に「あっちを向いて」と言った。

その言葉の本当の意味を理解することができなかった彩人は迂闊  
だった。

彼女は自分たちとは知識や常識に少し違ったところがある。それ  
は彼女と出会つて昨日までの二日間だけでも十分にわかつたはずで  
ある。

ルネは試着室の使い方を知らなかつたのだ。そこにあるカーテン  
を閉めればいい、という彩人たちにとっての常識は彼女には通用し  
なかつた。

「な、なあ？」

先を歩くルネに声をかけてみる。

が、彼女の後姿からは返事が返つてこない。

「……」

そのことがあつた後、服はすっかり購入。その時まではルネも渋  
々ながら服選びに付き合っていた。

だが、選んだ服をレジに通してからと言えば、ずっとこのような感

じである。

「はあ……」

またため息をつく。

もう何回しただろうか、彩人には数える気も無い。

「ごめんって！ あれは事故だって！ とりあえずなにか言葉を返してくれよー。ルネええ！」

「彩人のバカ」

昨日も色々とあったが今回は「彩人が原因」という形になった。

だけれども、それでも平和だった。

新しくルネが加わった日常。

これはこれでいいのかもしれない。

新代荘はこれからこんな風に賑やかになっていく。

彩人は心の中でそう思った。

それは本当に平穏な日常。

日曜日の出来事なんか無かったことに思えるくらいに。

## 二章（5） 二人で初めての……（後書き）

silver編、折り返し地点まで来ました！ 二章はこれで終了。  
次からは、三章入ります！ ここから彩人たちの日常がまた崩れ始  
める。追記：そのうち挿絵が入る……かも？

### 三章（１） 平穩は続くのか

「だーからー」

帆布南高校、一年三組の教室にて。

「今日学校が終わったら会わせてやるからさー」

彩人は休み時間のたびに自分の机の前に立ちはだかる雨夜にあまや向けて投げかける。ちなみにこの時、乃樹のきは話に加わろうとしなかった。雨夜が呼んでも「彩人の裏切り者おおおお」と返されて机に伏せてしまった。

だが雨夜は違う。しつこい。食いつきがはげしい。

「いい加減つきまとうのをやめてもらえませんか？」  
あきれていた。

これは今日に始まったことではない。

厳密に言つと月曜日からだ。

「本当だね？」

頭をすばやく振れば自分の背丈の半分もあるうサイドテールで周囲の人々に横殴り攻撃を叩き込みそうだ。雨夜が、彩人の机をどんと叩く。

「今日こそは会わせてもらうからね！」

「はいはい……」

「ルネちゃんかー」

半分夢の世界と入り込んでしまった雨夜を見て、彩人はよりいっそう呆れてしまう。

（本当にこいつをルネに会わせて大丈夫だろうか……）

彩人は火曜日、学校をサボっている。

その決断に至ったのは雨夜と乃樹の二人と一緒に登校している最中のことで、彼は新代荘に引き返す際に、雨夜に学校側に欠席することを伝えておいて欲しいと頼み、雨夜はそれに対して今度ルネに会わせるように半ば命令のように交換条件を出した。彩人はその時、

一刻も早く帰りたいだったので、雨夜には適当に返事をしていた。

彩人はそのことなど気にも留めていなかったが、雨夜は違った。翌日、彩人が学校へ行くなりそのことをすぐに持ち出してきた。

（いや、絶対に会わせないほうがいい）

断言できる。

彩人は出会って一週間も経っていないルネの性格を考えたら、当たり前なことだ。

彼女が一体どれほど人見知りの人物であるか。

出かけた後のルネの機嫌を損なわせた件については、謝ってどうにか許してもらい、解決することができた。

続いて雨夜の性格を考える。

猪突猛進。

有り余る甲斐性。

天真爛漫。

（三つ目はまあいいとして、俺は二つ目に苦しめられ、一つ目が絶対にルネにとって問題になるな）

雨夜が興味津々でルネを質問攻めにし、彼女が怯えるという構図が頭に浮かぶ。

逃げてしまうのではないか、とも思ってもおかしくなくらいだった。

（完全に相性、最悪だろ。ただ一方的にルネがな）

ルネは目を覚ました初日、若葉のスキンシップに困惑していた。

もちろん若葉のスキンシップも度を超えていると言えようが、雨夜はさらにその上に行く。

（若葉に対して初日は戸惑ってたけど、二日目からは案外普通に接していた。無意識のうちに気を許す人と許さない人を分けているのか？ さて、雨夜はどっちに入るだろうか……。

そうは言ってもやはり彩人はルネに雨夜を合わせる気になれない。だから雨夜とルネを対面させたくないがために水曜日は断った。その結果、雨夜からお叱りを買ひ、いつまでもしつこくついてく

るという困ったことになってしまった。

昨日は何とか断り続けて、一日を乗り越えることに成功したのだが。

今日も学校へ来た途端、同じく雨夜ハリケーンに巻き込まれた。そしてとうとう彩人が先に折れてしまった。

（この粘り強さは恐ろしい）

ちなみに今日の授業は午前中で終わり。

本来はいつも通り授業が午後以降も続くのだが緊急のことであつた。

朝のホームルームで担任教師は「急に会議が入ったため本日の授業は午前で終了する」とクラスの面々に伝えた。

教室の中で「あの火事が関係してるんじゃない？」という声はどこから聞こえてきて、彩人はルネが加わった日常に浸り薄れかけていたあの夜の出来事を思い出しそうになり、一度振り切った。

彩人は二度と会いたくも無いと思っていたのだが、逆にそれは残された最後の手がかりとなるととれるのである。

ルネを追ってきた男、それと後から現れた謎の三人組。彼らならルネが何者なのか知っているのではないか？

ルネの記憶の手がかりはあれから一向に見つかる気配も無い。

四日が経った。

あのような経験はその時で一度きりで終わらせたかった。

今ですら夢じゃないかと思ってしまう。しかし、ルネがいるというところがそれは現実だと物語っている。

目を逸らしたい。

あれは悪夢であつて欲しい。

だから日常だけを見る。

（あれから一度も現れていない。もう現れないのだろうか？ できればそうであつて欲しい……）

「あ、や、と、ん！　おーい」

彩人の眼前で肌色が動いていた。あまりに近すぎたので顔を離し、ピントを合わせる。雨夜が手を振っていた。

「ああ、すまん。なにか言ったか？」

彩人は思考を断ち、雨夜にふたたび意識を向ける。

「右手だして」

「はい」

雨夜は素早く小指を彩人の小指に絡ませる。彩人は反射的に逃れようとしたのだが、ロックされたように小指がはずれない。

「ゆーびきーり」

定番の歌を唱え始める。

「うーそつーいたら――」

抵抗が無駄だとわかり、されるがままになる。

「一ヶ月あたしのパシリ」

「な？！」

「指切った！」

雨夜は勢いよく彩人と絡めた指を振って放す。

「ちよつと待て！　どっかおかしくなかった？！」

「そう？」

「パシリって言葉が聞こえた気がするんだけど……」

「気にしない気にしない。彩とんが約束を守ればいいんだよ。それだけのことじゃん？」

雨夜はいつも以上に元気が溢れていてずっと笑顔である。

（まあそうなんだけどさ……。いつか……嵌められそうな気がして  
恐いんだよ……）

「前もって言うておくけど、くれぐれも大人しく、な？」

「りょーかい、です」

「できれば、いつそのこと一度も口をあけて欲しくない」

「それじゃあ、しゃべれないじゃん！」

「その方が助かるな。ルネはあなたさまのような気兼ねなく人と接

するということができませんので、あしからず」

「わかってるよ、もう！ しつこい！」

（どっちがだ……）

ここで最後の授業の始まりを告げるチャイムが教室内に鳴り、各生徒が自分の席に向かっていく。

「はあ」

彩人は窓の方を見てため息をつく。

（ルネはどんな反応するのかな……）

だがこの時彼は、帰ったときにはルネが新代荘にいないなど考えもしていなかった。

### 三章（２） 忍び寄る影

「うー」

誰にも聞かれないように小声で唸る。<sup>うな</sup>

ルネは一度来た三階建ての総合スーパーマーケットの目の前までたどり着いていた。厳密に言えば、その店の入り口に面した通りの反対側に立っている電信柱に身を隠している。周りから見れば完全にフードで顔を隠した不審者である。

ここを目指して出かけたので目的地には着いたものの、何かをしにきたわけでもなくこれからの行動をどうしようかと迷っていた。

もうここに留まって五分以上経過している。

その間、通りすぎていく人々が不振な目を向けていたが、ルネはその意図を全くわからないまま見られることによってただびくびくと怯えていた。

幸いルネは背が低く、またすらつとした細身の体型だったので、顔を隠していても子供だとわかる。通報されて警察官がやってくるという事態は起こっていない。これが太った中高年の体型をしていた場合はすぐにでも警察官にすっ飛んで来て声をかけられていただろうが。

さすがに店内にまで入っていく勇氣は無かった。

（と、とりあえず、ルネも頑張った……と思う。これなら今度は一緒に歩くことぐらいならできそう）

ルネは人見知りを少しでも克服しようとしていた。これを克服しない限り新代荘から気兼ねなく出ることができない。

そう思った彼女は意を決し、一人で外に出てみることにしたのだった。

だが外出してみて、結果はこうである。

（藍が帰ってくるまでに帰らないといけないし、うん、もう帰ろう）  
ルネが電信柱から姿を出した。

「ちょっといいかしら？」

「ひゃっ」

いきなり背後から肩に手を置かれたことによって飛びのこうとする。

「いつ！」

電信柱に頭を打ちつけてしまった。ルネは打った部分を押さえてその場にしゃがみ込んだ。ガンガンと頭の中で響、ジンジンと頭皮に痛みが走る。

「だ、だいじょうぶ？」

ルネは涙目で見上げる。女性に話しかけられていた。スタイルのいい色香の漂う金髪女性だ。金髪は肩の長さまでありウェーブがかっている。

「うん……」

手を差し伸べられる。

彼女は一旦躊躇したがその手を取って立ち上がる。

「ありがとう」

小鳥のような口からとても小さい声で言う。

金髪の女性はお礼を言われるとやさしく微笑み、「どういたしまして」と返す。

「あら？ あなた、綺麗な髪をしているわね」

ここまで近づくとフードからルネの髪が出ているのがわかる。

金髪の女性も綺麗な髪をしているが、ルネのものは対照的な銀色の美しさである。

「あなたも……です」

「そう？ ありがとう」

ルネは優しそうな人だとわかると心が落ち着いてきた。だが何か引つかかるものがどこかにあるような気がしていた。体がぞわぞわするような……。

「でも、そこまで驚かれるとさすがにこっちも驚くわよ……。ところであなたはここで何をしていたの？」

「えっと……」

何をしていたか、と問われてもルネには答えようが無い。彼女は何もできなくて帰ろうとしていたのだから。

「まあいいわ。ねえ？　少しお話しないかしら？」

ルネは見知らぬ人にいきなり声をかけられるとは一度たりとも考えていなかったため、心の準備ができていなかった。目が泳ぐ。口がパクパクする。

「もしかして用事があったかしら？」

「い、いえ、帰ろうとしてたところで……」

そこで金髪の女性は目を細める。

「帰る……」

ルネは彼女の朗らかとした雰囲気が一瞬で冷たくなったのを感じる。それに恐怖心が少し湧いてしまった。

しかし冷たい雰囲気は冬の冷氣に変わって溶け込み、すぐに違和感は消える。

「今すぐじゃないといけないかしら？　問題無いようなら、ちょっとだけ付き合って欲しいんだけど……大丈夫かな？」

「え、えっと」

ルネは躊躇う。

（この人知らない……から、藍は知らない人には関わったらいけない、って言った）

「す、すみません！」

走り去ろうとしたルネの腕をその女性は掴み取った。

（?!）

「あ、あの……ルネ、帰らないと」

だが金髪の女性は都合よく引き下がってはくれなかった。

「ねえ？」

「は、はい」

女性の雰囲気は再び、冬の寒気と同じように冷たくなる。

「どこへ帰るの？」

「え」

「帰る場所があるの？」

「あの……」

「どうやらどこかのお人よしにでも拾ってもらったのかしら？　まあいいわ。そういうことにしておきましょう」

状況がつかめない。

恐い。

早く帰りたい。

だがルネの腕は金髪の女性に掴まれたままである。

「<sup>アルター</sup>改変者であり、しかもその中でもこちら側の世界にいたというのに、あなたにこの普通の世界に居場所があるって言うつもり？」

なんだろうか、とルネは思う。言葉が難しくてわかりにくかった。ただ、何かこの人は――

「ルネを知っているの？」

訊いてみた。

まるで自分とは初対面ではないように思えたから。

「どうということなの？」

金髪女性は不審な表情を作る。

「ルネは記憶がないの……だから昔のことが思い出せないの」

「それは記憶喪失でことでもいいのかしら？」

「そう……」

そこで金髪女性は手を放した。彼女はルネに対して同情――

――はしていなかった。ただルネにも気付かれないように薄っすらと笑みを浮かべていた。

金髪の女性のほうが手を離れたのでルネは逃げられるようになったのだが、自身を知っているような口ぶりの彼女からすぐには離れられなかった。

「じゃあ、お話ししましょう。ここでは寒くてなんだから、その喫茶店にでも入って」

「知っているの？」

ルネはもういちど確認を取る。

「ええ」

ルネは思う。

記憶を失くす前の自分を知っている人がいた。そのことをどう捕らえて良いのかわからない。喜ぶことなのか。だが、このまま帰るのはもったいない。

彼女はもう網にかかってしまっていた。

「さあ、中に入りましょうか。そして教えてあげるわ。あなたが何者であるかを――」

### 三章（3） 雪の中に溶け込んで

「あれ？」

彩人は『〇〇五号室』のドアを回す。しかし、鍵が掛かっているため開かない。

「どうした、彩人？」

今は雨夜と乃樹も一緒に新代荘にやってきていた。彼らが新代荘を訪れたのは、今年は初めてだ。

「鍵が掛かってる……」

「彩とん？ 約束を忘れたわけじゃないよね？」

雨夜が指きり、指きりと復唱する。

「わかってるって。藍さんがよく戸締りには注意しろって言うたからな。だぶん、ルネはそれを守ってきちんと戸締りしてるんだ。おーい」

強くノックしてみる。だが、部屋の中で物音一つしない。

「乃樹ちよつと藍さんの部屋の方見てきてくれないか」

「おう」

乃樹は藍の部屋『〇〇一号室』は一階にあるので階段を駆け下りていく。彩人は自室の鍵穴に鍵を差し込む。

「そこは彩人の部屋だね？」

「ああ。もしかしたら寝ているのかもしれないからな。ちよつと壁際で確認を」

新代荘にベランダでも付いていればそこから部屋の中を除けるのだが、と彩人は考える。

部屋に入っていった彩人は壁際に耳を当てる。

「おかしいな……」

本当に人の存在感がしない。

「彩とん…… 覚悟はできているのかな？」

「待った待った！ 別にこの部屋に居るとは限らないんだ。ルネは

新代荘の家事を任されてるから藍さんの部屋の鍵も持つてるんだ。  
だからここに居ないとしたら、藍<sup>あい</sup>さんの部屋にいる」

彩人は昨日、ルネが起こした『洗濯機泡ぶくぶく事件』のことを  
思い出す。

（今日もそんなことになってはいないよな……）

悲劇的な光景を頭に浮かべながら彩人は二階から一階に階段を伝  
って降り、『〇〇一号室』の前まで来る。雨夜もそれ続く。

「乃樹どうだった？」

「おい、鍵開いてたぞ。どんだけ無用心なんだ」

肝心なことはそこではない。

「ルネはいたか？」

「いや。誰もいないぞ。ただ、ほれこれ」

乃樹が彩人と雨夜の前に見せた手に持ったそれは新代荘のマスタ  
ーキーだった。

マスターキーを放置するとは本当にどれだけ無用心なんだ、と彩  
人も思う。部屋が荒らされていないか心配になって一応確認はして、  
問題が無いことがわかったら鍵をかけておいた。

ただこれでルネの部屋の鍵を開けることができる。

「ルネの部屋に行くか」

彩人の胸の中で不安という感情が渦をまく。まさか、そんなこと  
は無いだろう、と無意識のうちに思考を望まない方向に向けないよ  
うにしていた。

「ルネちゃん、どんな子かなー。可愛いかなー」

乃樹の言葉を聞いて、彩人はやや苛立ちを感じつつルネの部屋の  
鍵を開ける。そしてゆっくりとドアノブに手を伸ばす。

「ルネいるかー？」

彩人は廊下を通っていき、ルネがいるはずの部屋を見る。

いない。

「いない、のか……」

その部屋は掃除された後だった。彼女の部屋だけでなく彩人たち

の部屋もそうなのだが、もうすでに一通りの家事を終えてしまっていることが見てわかる。

（どこに行ったんだ？）

彼にはルネの行くあてが思い浮かばない。

「おい、彩人。そのルネって子はいないのか？」

後から部屋に入ってきた乃樹が後ろから尋ねる。

「ああ……」

どうしてルネがここに居ないのかわからない。藍は仕事に出て今もおそらく仕事中。若葉と幸祐は、彩人たち三人は学校が終わってから急いで帰ってきたので、先に帰っているとも考えにくい。

（一人で出かけたのか？ でも、なんで……）

ルネは極度の人見知り。それに記憶喪失の彼女が新代荘の周辺のことなど知っているはずがない。

彩人は、出かけるはずがない、と主張する。

それは先日。

「お前は一人で外に出るのはやめとけよ」

「ん？」

「ルネが一人で外出なんてしたら、人とすれ違ったびに叫び声あげそうだなんな」

「ひどーい」

「しまいには迷子になって帰って来れなくなったりしたら、もう最悪だよな」

「彩人のバカ！」

と、いったようなやり取りを交わしていた。

「さあ約束を……って彩とん？ どうかしたの？」

いつもどおりに彩人がリアクションを取らない様子なので、雨夜が少々気まじめになってしまう。

（一人で出かけるなって言っただんだ）

「ああ！ おかしい！」

怒鳴ったように言うので雨夜も乃樹も驚いた。  
不安の渦が徐々に大きくなっていく。

彩人は忘れようとしていた、目を逸らそうとしていたその事実から、もう正面に認め向き合うしかなかった。

実に嫌な予想だ。

ルネがただ一人で出かけたならばまだいい。

だが、そこへ『奴ら』が関わっていた場合どうなる？

「彩人」

雨夜が平常心を失いつつある彩人のもとにやってくる。

いつもの周囲を明るくする効果を持つ楽観的な表情は薄れ、まれにしか見せない真剣な眼をしていた。

「かなり心が乱れているみたいだけど、そんなに大変なことなの？  
ここにルネって子がいないということとは」

「ああ」

彩人は確信がないにしても頷いた。

そう。

（ルネが誰かと接触したと決まったわけじゃない）  
必死で頭の中を整理していく。

（でも用心にこしたことは無い）

ルネを今見つけ出さないと気が済みそうに無いと判断した彩人は  
決断する。

「ごめん二人とも。今日は帰ってくれと助かる」

「彩人？」

彼は二人の顔を交互に見る。

「俺は今からルネを捜しに行ってくる」

「なら手伝うよ。乃樹も手伝うよね？」

雨夜が即座に言い返す。

「え、ああ、お困りなら手伝うぞ！」

乃樹も雨夜の考えに同意。

「お前ら……」

「ほら分かったら、さっさとルネちゃんがどういう子なのか教えてよ。何か情報がないと私たちが捜せないじゃん」

一人より三人、ルネを探し出せる効率も三倍になる。

「ありがとよ」

彩人はルネがどこに行つたのかを深く考える。

（やはり一度行ったことが最有力だろうか……。行つた場所は火曜日に出かけた町か、それともう一箇所——あの雑木林か）

「まずルネの容姿について教えておく。ルネは極度人見知りだからおそらく顔をフードで全部覆っていると思う」

火曜日にいざこざがあつたがその時に買った服はフード付だった。出かけるとしたら必然的にそれを選んだと予想できる。

「それじゃあ顔が見えないじゃん」

まったくその通りであるが、ルネはのためにフード付の服を好む。

「でも少しでも見えれば徹底的な特徴がある。」

「それはどんな？」

ルネの特徴。

彩人も初めて会つたときにふいに見とれてしまったそれしかない。

「銀髪。そして青い目をしている」

「外国人かよ！」

「名前からは推測はできていたけどね」

フードで隠れていると言ってもそれさえ確認できればそれはルネと断定してもおかしくない。彩人はこれまでこの帆布という町で同じような容姿をした人物を一度も見たことがなかったからだ。

「でもそれなら私たちでも分かりそうだね。とりあえず会つたら彩人の知り合いって伝えれば大丈夫だよな？」

「まあ……ルネが逃げ出そうとする前に」

「で、どこを捜せばいいんだ？」

町か。雑木林か。

「二人は街の方を見てきてくれ。できたらここから、町にあるあの大型スーパーマーケットまでの道一体を頼む。ルネは道のと真ん中は歩いたりできないと思うから、影になるようなポイントに目を向けてくれ」

「大型スーパーっていうのは、たぶんあれでいいな」

帆布では大型スーパーマーケットは一店舗しか存在していないので雨夜と乃樹にもすぐに伝わる。

「俺は別の場所で見えておきたい場所があるからそっち行く。じゃあ二人とも頼んだ！」

彩人は先に雑木林へと向かった。

「わかったよ」

「了解した」

彩人はあつという間に行ってしまった。走る速度からして十分に焦っていることなど簡単にわかる。

「私たちも行こうか」

「おう」

「彩とん、必死だったね」

雨夜は隣を走る乃樹の方を見ずに語りかける。

「ああ、久しぶりにみるぜ。それだけ心配する事態なのか……それとも彩人がその人のことをそれだけ大事に思っているのか」

「……。———思っているのかもね」

二人は町のほうへ急ぐ。



昼時だというのに気温が上がった感じはしていなかった。むしろ下がっているようにさえ思える。空も灰色が濃くなっていた。

四日ぶりになる。

日曜日にコンビニへ行った時と同じ経路を辿っていく。その経路は両側を建物で囲まれていつも影を作っている細道ばかりなので、

路面は数日たった今でも雪に覆われている。

彼は一度も足を止めることなく十分足らずで雑木林への入り口に到着する。

（ルネはここにいるのか？ いや、頼むここにいてくれ）

彼が最初に取りれる行動は二択だった。

ただ外に出たかった。それはルネの性格から考えて削除する。では、なぜだ？ と、次々に事の発端を考えていくうちに彼が断定した理由。

ルネは自分の記憶を探っている。

彩人にはそれ以外考えられなかった。

「くそ……」

彼は歯噛みして雑木林の奥へと続く一本道を突き進む。

（俺はあれからなにもルネにしてやれていない。なにも思い出しちゃいない。なのに……なのにルネは新代荘に居座って俺たちと普通に暮らしながら、自分からあれ以来記憶のことについては話さなくなった。別にこれから思い出していけばいいよ、だなんて、それでいいのか？ 自分が誰なのかもわからないのに。俺がそれをなんとかしてあげるんじゃないのか？ 俺は恐れていたじゃないのか？ ルネの正体を知ること）

ルネが使っていたあの不思議な力。それを炎使った男と同じもの。つまりは、同類。

もし追求してしまえばあの日のようにまた『非日常』に関わることになるのではないか？

彩人の足は一本道の途中で止められた。

木々で生い茂っていたはずなのにぽっかりと空いた場所。もちろんそれらはあの男の炎によって焼き払われたものだ。

今は立ち入り禁止と書かれたテープが張られている。彩人が来た方と反対側にも同じようにテープが張られている。

普段から使う人などいないように思われる道なのに立ち入りを禁じている。

あの時の出来事はこうして影ながらも『日常』に表れている。  
「いない、か」

彩人はテープをくぐり辺りを搜索するが、銀色に輝くものは見られなかった。

（ここいないとしたら町しかない。いや、もしかしたルネトが全くの知らない場所に行っているとしたら……）

それでも町に行ってみるしかなかった。検討もつかないところを手当たり次第搜したところで見つかるとは到底思えなかった。

彼は来た道を戻らずにコンビニのある方面からの道に行く。

この道を進み続けると同じように建物に囲まれた細道になるが、それをさらに進むと自動車も頻繁に通る車道に抜ける。その車道を西に進むと橋が架かっている。こちらからも町に行くことができる。走っても町まで二十分で着くのは難しいだろうが、来た道を戻って新代荘から行くよりかは早く着ける。

もう十二時をまわっていた。

空腹なんて気にしてられない。

やがて彩人は総合スーパーマーケットに着いた。その時には店の外に付いた丸い形をした時計をみると時計の短針と長針は一直線になっていた。彩人はずっと走りっぱなしで体が火照っていたので気温が下がっていつていることに気が付いていなかった。

「雪？」

ここ数日間は雪が降らなかった日が続いていたのに、気温が再び下がったせいか雪雲が活動を再開する。

冷えた空気が汗をかいた体に吹き付けて一気にほてりをなくす。

「この周辺を捜すか……それともすれ違いで新代荘に帰っていると考えられる……どうしたらいい！」

この時間帯は藍が仕事を終えて帰ってくる。

（藍さんだったらルネがないことを知ったらどうするか）

そう考えていると。

「彩とーん！」

聞きなれた声と彩人をその名で呼ぶのはひとりしかいないので、誰かはすぐにわかった。

「どうだった？！」

「ごめん、それらしき人は見つけれなかったよ。まだノツキーが周辺をまだ見回っていると思う」

「そうか……わかった。二人はもういいよ、昼過ぎだし、雪降ってきたし。後は一人でなんとかする」

「でも、この辺りのことを全く知らない人なんですよ？ だったら迷子になって帰れなくなってもおかしくないよ。交番でも尋ねてたらいんだけど……」

彩人はルネが交番に尋ねるわけがないと思った。

（ルネはたぶん交番を知らないんじゃないか？）

そもそもルネが誰かに自分から話しかけられるとは思えない。

「ノツキーに会ったらもう帰っていいと伝えておいてくれ。俺はこれから新代荘までも道を探して行く。すれ違いになってるかもしれないから」

「あ、彩とん！」

雨夜の返事を待たずに彩人は走り出していた。

町と新代荘の間には住宅街と学校、そして橋があるくらいだ。

（学校って線はあるだろうか？）

思いついた先に直接向かう。何の手がかりもないのだからそうするしかない。

学校や住宅街は町より土地が高い。だからこれより先は緩やかな上り坂がずっと続いていく。彩人は長時間走り続けられるほど体力はない。上り坂は体力の切れた彩人のを苦しめる。

「はあはあ」

白い息が空中に出ては煙のように消えていく。  
足が地面にへばりついているような感覚になっていた。

彩人は足を地面から引き剥がして進んでいくがその進む距離は短い。走っているはずだったがいつの間にか歩いていた。

（ルネ……。どこだ……）

学校の校門のところに来てとうとう立ち止まってしまった彩人は手を膝につく。

（これだけ探してもいないんだったらもう帰っているよな……。スートの前に丸まってでもいるよな。勝手にどこにも行ったりしていないよな！）

彩人は顔を上げる。

（？）

雪が降って先が真っ白になっている坂道を見上げる。

よく目を凝らす。

白色の中。

溶け込んでいる。

白色よりやや銀色に近い。

（あれは……）

「ルネ！」

彩人は白色の空間へと叫び、再び重い足を走らせる。進み方は遅かったが不思議とつらは感じられなかった。

銀色の少女は静かに振り返った。

「どこへ……行っていたんだ……？」

彩人の体力はもう限界だ。息切れをしている彼の言葉はところどころ途切れる。

銀色の少女——ルネはそっと彩人に近づく。そしてルネの体は彩人の体の中へと埋められる。

（ルネ……？）

「ごめんね」

「はは……見つかってよかったよ。お前が俺の手の届かないどこかに行っちゃったみたいだった」

「……」

「さ、帰ろう。昼飯、食ってないだろ？俺はもう腹減って倒れそうだわ。あつ、藍さん俺が帰ってくること知らないから俺の分用意してくれてるかな……。用意してなかったら俺に作ってくれよ」

「……うん、わかったよ。帰ろ……」

ルネはその後短い答えしか返さなかった。

### 三章（4） 彼らの居場所

彩人あやととルネが新代荘にいしろそうに帰った頃には一時を過ぎていた。藍あいも帰ったときにルネがいなことに慌てていた。帰ってくることを信じていた藍は、帰ってきたのがルネだけではいと知って「あんたが連れまわしてたの？」と鋭い眼光をルネの隣に立つ彩人に浴びせた。

藍の部屋に入った彩人とルネはさっそくストーブの前に座り込む。再び冷え込んでしまった帆布町はんぷを歩いて帰ってきた二人の体も当然冷え切っていた。

「あんた達、風邪引いてもおかしくないわよ」

藍が二人分の味噌汁をまず机に運んできた。

「以後気をつけます」

「ごめんなさい」

彩人はどうしてルネが一人で出かけようと思ったのかについて聞くのは、ルネが少し落ち込んでいるようにも見えたので、今は止めておいた。

二人は味噌汁をすすると体の芯から温まった。藍が湯気を立てたご飯を運んでくる。

中をみるとお茶漬けになっていた。

「ルネの昼ごはんはいつもこのメニュー？」

「あんたたちの弁当と同じものだったり、そうね……昨日なんかは別のものを作ってあげたわ。それよりなんであんたがここにいるの？」

「ああ、今日は教師が緊急会議を開くとかで午前中で終わりになったんだよ」

「ふーん」

「幸祐こいつすけと若葉わかばは……帰ってないところを見ると部活やってんのかね、この天気で」

彩人はそう言って窓の外を見やる。窓の外では、上から無数もの

白い結晶が落ちてきている。

「あの二人は一応、弁当ももたせてあるから大丈夫……って、彩人、あんたも弁当あるじゃない？」

「あれ？ どこやったつけ……そうだ、部屋の前に鞆ごと置いたんだった。うわー、中身めっちゃ冷えてそう」

「それ、あんたの夕飯」

「なんですと?!」

（新代荘には電子レンジなどという人間が生み出した便利な家電はないんだぞ!）

新代荘で料理を温めなおすことができるのはコンロの上だけだ。

そして、彩人の夕食はそれとなった。

「冷たい！ 歯が痛いぐらい冷たい！」

「あはは……彩人、ストーブの前で温めたら？」

今日は味噌ラーメンを選んだ若葉は、手を発泡スチロールでできたカップ麺の器に手を当て温まりながら、彩人に勧める。

「もはや解凍だな」

「彩人、分けようか？」

ルネはカップ麺ではなくご飯と味噌汁を食べている。平日五日間カップ麺というのは脂分の濃いものが苦手な彼女にとっては苦しいので藍が特別に例外扱いとして別のものを用意されていた。

「ルネは優しいわね。でも彩人が悪いのだからその必要はないわよ」

「そうなの？」

「そうそう彩人はあれでもだいじょーぶ」

幸祐は無言で頷いて同意する。

「わかった」

「そこでわかるなよ！ 分けて、恵んでえー」

ルネが加わってさらににぎやかになった夕食のひと時もこれで四回目。

新代荘の皆は楽しかった。彩人はいつまでもこんな時間が続けばいいと願う。

「続くよな……」

「彩人なにか言った？」

「いや、なんでもない」

彩人は弁当箱の具材をひとつ摘んで口の中へ放り込む。

（温めたけどやっぱり一度は冷えたものの味が……）

「ごちそうさまー」

「ごちそうさまでした」

今日も若葉と幸祐は夕食を食べ終わったら自分の部屋に戻っている。

彩人はテレビを見ていた。

「明日も雪かー」

「来週は試験だー」

彩人の言葉二かぶさるように藍が言う。

「……」

「あんたさ、勉強しなさいよ。若葉ですらしてるぐらいなのに。これで一年生の最後の成績がつくんだから、どうなっても知らないわよ？」

「めんどー」

彩人は校内で下から数えてすぐにあるという位置にいる。試験の範囲発表は一週間前から始まっているにもかかわらずほとんど手を付けていない。

（決戦前夜にやればよし。一応、最近は大たい授業はちゃんと聞いているから少しは点数が取れるだろう）

彼は中学の時から身についている方法のままで今回も挑もうとしている。このままではいけないと危惧すべきなのは彩人自身も承知しているが、それでもやる気が起きないので手をつけられない。

「とりあえず、あんたはルネを連れて部屋に戻りなさい」

そのルネは彩人と机をはさんで向かい側に座りながらテレビを見

ている。

最初は、何だこれは！ という表情をしてテレビにかぶりつくような勢いでぺたぺた触っていたが、今はもう大人しく座って見ている。

（テレビでなにを言っているか理解できてんのか？）

彩人は立ち上がってテレビのボタンを消す。その時、ルネが「あー」と声をあげるが彼女を連れて藍の部屋を出る。

外では雪がまだ降っていた。

「こりやまた積もるなー」

もう道路は一面が真っ白だった。

「じゃ、おやすみ」

ルネに手を振って部屋に入ろうとしたところで声をかけられる。

「ん？」

「わたしのことは……もういいよ」

「どうい——」

「ごめん。変なこといつちゃって。じゃあ、おやすみなさい」

彼女は苦笑いして自分の部屋へ早足で入っていった。

（なんだ？）

彩人は部屋に入るとストーブをつけて、お風呂を入れる。彼はお風呂が入るのを待つ間畳んで置いてある布団に飛び込む。このまま寝てしまいたかったがどうにか堪え、お風呂に入ってから布団を敷いてまた正面から飛び込む。

「明日から手がかりを…… っても今日あの場に行ってもなーんにも無かったなー」

（今まであの場所に近寄ることを恐れていた自分はなんだったというのか）

体を返して天井を見る。

（ルネはたぶんその手がかりを探しに出かけた。俺が見つけれないから自分で探しにいったんだ。ん？ でも、なんで学校の前に？ ま、いつか。あの男たち、どこに行っただんだろうか。警察が動い

ているのに見つかったくないなら、ただの高校生の俺なんかに見つけれられるのかよ……。そもそも見つけたところでどうする？ ルネは何者だって聞くのか？ 会った時点で殺される。あいつらは関係したとして一度は俺を消そうとしたんだからな。奇跡的に俺はこうして日常を過ごしているけれど)

「はあ」

彩人は深いため息をつく。

結局、どうにもならない。

ひよつとしてルネが「もういい」と言ったのはもう気にかかる必要がないってことではないのだろうか？

何かをしてあげたいと思う。

でも無理だ。

彼女もそれをわかってくれた。

(俺はルネに甘えているのか)

彩人は気色ばみ、寝入った。新代荘では皆だいたい十二時を過ぎると床に就く。幸祐が勉強のため、たまに起きていることはあるが。新代荘にはテレビが藍の部屋にしかないため、遅くまでテレビを見ていったことがない。彩人、幸祐、若葉は藍が一人で養ってきため、嗜好品はほとんど与えられなかった。だから自分の部屋に行ったらとくにやることは特に無い。

現時刻、午前二時。

新代荘だけでなく外も音が無くただただ穏やかな夜であった。

室内では時計の秒針がカチカチと一定の間隔で動き、一周するのを繰り返す音だけが微弱に響く。

(?)

彩人は夢を断ち切れ、現へと引き戻される。暗い中、蛍光色素がふと時計を確認。蛍光色素が長針と短針に含まれているため時刻がわかる。

「二時か……」

彩人は目をこすりながら、再び寝付こうとしたのだが、静かなは

ずの新代荘でかすかだが物音がした。

（なんだ？）

誰かまだ起きているのだろうか、という疑問が浮かぶがすぐにそれは無いと思った。彩人は二階に部屋を構えているが、藍、幸祐、若葉の部屋は彼とは違って一階にある。先ほどの物音は床下から聞こえたわけではないのは明らかだった。

強いて言うなら自身の部屋の外——新代荘の二階にある三部屋に面する廊下——から聞こえたような気がした。

（ルネ？）

先週末までは二階は彩人だけが居座る場所だったが、今週新たにルネが加わったことにより二階の住人はもう一人いる。物音の主は彼女かと思うが、夜分遅くにそれはないと彩人は考えを改める。

（ちよつと見てみるか……）

彩人は物音の正体が気になって寝付くことができなかったので布団から這い出て確認しに行こうとする。

「うわ……寒い」

冬の真夜中は凍てつくような寒さだ。フローリングの床は氷面のようだ。

毛編みの靴下を履いてから椅子にかけてあった上着を手に取り着用する。

そして玄関まで忍び足で移動し、恐る恐るドアの覗き穴に右目をあててそこから外の廊下を見る。

玄関の前には人影は無かった。

（だめだな……なんか心配性になっちゃったかねえ……）

とりあえず念入りのためドアを少しだけ開けて廊下を右端から左端まで見渡す。

（はは……誰もいるわけがないじゃないか……）

彩人は安心して首をドアの中へと引っ込めようとしたその時。

「――！」

気付いてしまった。

彼は言葉が出なかった。

背筋が寒くなる。

決して気温が低いからではない。

それは目線が下に行っていないなければ気付かなかった。

「おいおい……」

彩人は暗いので勘違いをしたのかとも思ったが、しゃがんで実際に廊下の床をなでてみたら窪みは確かにそこにあった。

足跡。

今日降っている雪は新代荘の廊下に振り込んで薄っすらと層を形成していた。人がこの上を歩けば必ず足跡ができる。足跡ができないとしたら空を飛ぶ鳥か、宙を浮く幽霊か何かしかありえない。

つまり。

（誰かがここを歩いた……）

彩人が聞いたと言う物音は単なる勘違いなどではなかった。

紛れも無いここを通った誰かが立てた音。

もう一度、首だけ外に出して廊下を確認する。しかし、暗闇の中うごめく物は無い。

「一体誰だ？ なにをしに来た？」

足跡は続いているのだろうか、と彩人の部屋から光が漏れているだけなので廊下をじっくり見ることはできない。

彩人は一旦部屋に戻り、明かりを捜しに行く。

「そうだ、懐中電灯はあの時……」

彼が暗い中歩く時に使う小型の懐中電灯は日曜日にお陀仏となっていました。

なので、非常用に設置された懐中電灯を押入れから手に取り、今度は靴を履いて廊下に出てみる。

懐中電灯を足元に当てる。足跡はやはり続いていた。

続くその先を懐中電灯で少しずつ遠くを照らしながら傾けていくと一つの部屋の前で途切れていた。

「おい嘘だろ……」

彩人は啞然とする。

足跡の終着点——『〇〇五号室』。

紛れもなく、銀色の少女の部屋。

あの時の炎が頭を過ぎる。

（まさか、あいつが……あの男が……）

だがその検討は履き違えていた。

証拠は足跡。彩人の足跡より小さい。

それに加え、足跡の進む方向。足跡は部屋の前から始まっていた。

「ない、そんなことあるわけがないっ！」

ルネが遠ざかっていってしまうような。昼時にルネを探し回っていた時と同じ感情だった。

違う世界。

『日常』から外れた『非日常』。

『正常』ではない『異常』。

全てはその世界にいるあの男の言葉。

彩人は寒さなど気にせず寝間着のままルネの部屋に駆け寄る。

震えた手でドアノブを握る。

ゆっくり。

ゆっくり。

回していく。

やがてドアノブは回転の限界に達してそれ以上周らなくなる。

そして前へ。

ドアはすんなりと開いた。

何にも阻まれることなく。

「おい……ルネ」

部屋の中は外と同じく暗い——人の気配も無いただの空き部屋。一週間前と同じ光景。

「藍さんが戸締りはちゃんとしろって、あれほど言ってたじゃないか……」

彩人は『〇〇五号室』に入っていく。

靴を脱ぐ。

廊下にかかる。

トイレと風呂場を通り過ぎる。

流し台がある。

そして、八畳間へ。

「なあ……聞いているか？ ルネ」

彩人は語りかける。

無人の部屋に向かって。

ごめんね。

彩人が昼にルネをやったのことで見つけ出した時に彼女が言った一言。

あの時の様子は四日間を通して普通じゃなかった。

「なんで……なんで、また、いなくなる！ 一人でどこかへ行こうとするんだ！」

室内は綺麗に整理されていた。布団は畳まれている。その上に同じく綺麗に折りたたまれた掛け布団。それ以外のものは出ていない。床にも何も転がっていない。

「くそっ！」

言葉をはき捨てて彩人は部屋から飛び出す。

足元に注意しながら部屋から出たところで足跡を辿っていく。

まず階段に突き当たる。

滑り落ちる危険を顧みず駆け下りた。

足跡はそこで消えていた。

元から無かったのではない。後から上書きされたのだ。

建物からであれば当然雪が直接降りかかるので、顔に大粒の雪の結晶がいくつも突っ込んでくる。

冷たさがじんと伝わる。

冷たさは痛みに変わる。



「耳、痛いよ……。そんなに近くで大きな声出したら駄目だよ」

「お前のせいだ。でも本当は、俺のせいだ……」

「いいんだよ、もう」

ルネは彼を咎めたりは決してしなかった。あなたには責任は無い、と。

「なあ？ こんなことになってるのはさ、俺がお前にとって何の役にも立てなかったからか？ 俺は同じ境遇のお前をどうにかできるんじゃないかって思った。でも力になれなかった」

彼女は、そんなことはい、と頭を振る。

「じゃあ、どうして？」

「ルネは違うから」

違う？ と尋ねようとする前にルネは彼から体を離し向かい合う。刹那、彼女の手元が光った。

彩人は彼女の手元に明かりを当ててそれを見た。

「それは……」

それは先鋭な嶮山けんざんのような氷の結晶。

光を浴びて反射し煌びやかだった。

彼がそれを見つめていると、それは雲散霧消した。どこへ消えてしまったのかもわからない。

見覚えがある。

最初に出会った日、ルネが彩人を守るために使った力。それと全く同一のものである。その力は彼の身を守った。

しかし。

この世界にとっては紛れも無い『異常』。

「どうして……」

彼女は記憶を失っているはずだった。当然、その日もこともほとんど覚えていないに等しかった。

「言ったとおりだね……普通じゃないって」

彩人とは違う世界にいるルネはそつと微笑む。

（まさか、これが理由だって？）

「ルネがいると皆の迷惑になる」

「そんなこと……」

「恐かった。自分が誰かもわからなくて。でも今はもう恐くない。それはみんなのおかげ。だからもう思い出さなくてもいい」

だから、もう責任はない。

ルネは訴える。

「みんなは優しくかった。藍も、若葉も、幸祐も。ルネが誰なのかもわからないのに。いろいろしてくれた。でも、もうみんなと一緒にられない。こんなルネと一緒にいるべきじゃない」

白色の少年は彼女の言い分をしつかり聞いた。その上で判断を下す。でもどの道選ぶ答えなど最初から決まっていた。

「だから？」

「え？」

「お前はどうかって聞いてんだ。俺たちと一緒に居たいのか？ 居たくないのか？ いたくないんだったら俺はお前を止めない。どうかへ勝手に行けばいい、それはお前が決めることだからな」

「ルネは……」

「俺はお前の気持ちが知りたい」

「いたいよ、みんなと……でも——」

それだけ言うとルネは口をきつくつむぐ。

「だったら帰ってこい！」

「……え？」

「お前がそんなだからって俺は別になんとも無い。気になんかしない。俺はお前に一緒にいて欲しい！ 他の奴らも言ってただろ！ だから何だって言ってたんだよ。言っただろ俺たちは！ もうお前は『家族』だと！ あの場所は俺たち皆の居場所だ！ それ以上でもそれ以下でもない！ お前は絶対に俺たちから離れなきゃいけない規則でもあるってのか？ お前の居場所はここじゃだめなのか？」

ルネは俯いて頭を横に振る。

「それが本心なら、俺はお前を無理やりでも連れて帰る」

彩人は彼女に手を差し伸べる。

「さ、帰ろう」

ルネは動かしかけた手を一瞬止めるが、差し伸べられた手を取った。彩人は彼女の手をしっかりと握る。もう二度と彼女が逃げられないように。

彼女の目に溜まったそれは雪解け水のように美しく流れ出していた。

そして彼らは白雪舞い散る闇夜の中、帰るべき場所へと帰っていく。

### 三章（5） 嵐の前の静けさ

日々を経ていよいよ金曜日。

休日まで先送りになっていた『ルネ歓迎会』も間近に迫る。

昨日テレビの天気予報ははずれることなく、雪は昨日からずっと強さを弱める気配も見せずしんと振り続けている。

「よっしゃあ！ 今日で今週の学校は終わりだー」

彩人<sup>あやと</sup>は両手でガッツポーズしながら、ぐんと伸びをする。

一週間の最後を乗り越えれば二日間の休日がやってくることに一人歓喜に浸って浮かれていた。

「何度も言わせないでくれる？ 来週はテストだって」

藍<sup>あい</sup>の言葉が彩人を一閃する。

ルネが彩人の元に朝食を運んできた。もうお手の物である。今日の彼女は時折笑みがこぼれており、どこかうれしげな雰囲気である。機嫌がいいようだ。

彩人はご飯と味噌汁の二つのお椀を両手にそれぞれ受け取り自分の前に置く。

「一夜にして打ち返してくれよう！」

彩人は味噌汁をすする。実は少しだけやっていたりするのだが彼は話さない。

（少しいい点をとって驚かせてやろう！）

「ま、いいけどね。困るのは全部あんだから。そうだ。なにか取り決めをしない？ 例えば赤点取るたびに私の言う事に絶対服従」

藍が恐ろしいことを言うのを、彩人はそっぽを向いて知らん振りをする。

「彩人」

ルネが窓の方に目を向ける彩人を呼ぶ。

「なに？ おい、まさか、ルネ……お前も俺に同じようなことを言うわけじゃあるまいな？」

おのの  
慄く彩人を見てルネは小首をかしげる。

「おや、違うようだな、と思った彩人も同じように小首を傾げる。」

「おいしい？」

味噌汁の具材を箸でつまんで食べている彩人を見て、ルネは味の感想を訊く。

彩人は缶の序を変に思うが一応おいしいことには間違いは無いのでそのまま、おいしい、と答える。

するとルネの顔が、ぱあっと明るくなる。

「良かったわね」

「うん！」

彩人は味噌汁がどうかしたのかと二人のやり取りをわけもわからずに見る。

「それ、ルネが一人で作ったのよ」

「そう言われて手元のお椀に目を落とす。」

「へえ、そうかルネが、一人で」

彼はルネが朝食をつくる手伝いをしている様子は毎朝見ていた。

しかし、あくまでも手伝いであって食器を並べたり食材を洗ったりなど、ちよつとした手伝いだとはかり思っていた。

「そうよ、この子、上達早いわねー、うちの子とは比べられないわ」

藍は照れているのか赤くなった頬のルネの頭をなでる。

彼女の方はいいいようになでまわされている。

「それ若葉が聞いたら泣いちゃうかもよ」

「この先、一家を担うのはこの子になるかもしれないわ。これからも教えて欲しかったら……と言ったものの、財政的余裕ができれば他の食材も買ってくるから、申し訳ないけどその時までちよつと待ってね」

彩人はこの一週間で食べたものを思い出す。

朝食——ほっかほっかこれで冬の寒さなんてへっちゃら、白米ご飯。同じく味噌汁。

昼食——弁当の中身はご飯、野菜、焼き魚。以上、肉なし。

夕食——カップ麺。

「もう一週間、食事が寂しかったな……。まあ、日曜日は鍋だったけど」

「今日でカップ麺ウィークはおしまいだから、来週はちゃんとした夕飯に戻るから安心なさい！」

（それも弁当の中身と大差ないだろうけど）

彩人は朝食を食べ終え、部屋の隅においてあった鞆を手にとって玄関へ行く。

「ほら、傘」

藍が傘を持たずに出て行こうとする彩人を呼び止める。

昨日の朝までずっとこここのところ雪が止んでいたのどつい忘れていきそうになった。

ルネも急いでばたたと玄関に駆けてきた。

彩人はなんだろうかと彼女が来る方向を振り返る。

「あ、彩人！ き、今日、帰ってきたら、で、出かけよ」

「出かける？ ん、わかった」

（ルネが自分から出かけたいなどと言うとは……）

彩人は断る理由なんて無かった。

ルネはそれを聞いて、いつてらっしゃい、と言って彩人が新代荘から出て行くのを見送った。

藍は二人のやり取りを眺め、我が子を見守る母のような視線を送っていた。



「へー、見つかったんだ。良かったね！」

彩人の斜め後ろの席に座る雨夜あまやが安心した表情を浮かべる。

その隣の席に座る乃樹のきも同じ様子だった。

「もしかして、あのあと、ずっと捜してくれていたのか？」

「ちよつとだけな。まあ見つかったならそれでいいじゃんよ」

乃樹が親指を立ててぐいつと彩人の正面に腕を伸ばす。

「すまん。なにか礼をしたほうがいいな」

「彩とん？ そんなもの必要ないよ。あたしたちの仲じゃありませんか」

「ああ、本当にありがとう」

彩人は二人を見て微笑む。

「で」

「で？」

「いつ会えるのかな？ ルネちゃんには」

「そうそう早く会わせてくれよ、彩人」

会える機会を逃してしまった上にその会う人が行方不明という事態と一緒に対処してくれた二人には、彩人はとても感謝していた。

二人は感謝などいいからとりあえず会わせてくれ、と言わんばかりだった。

「ああ、そうだな……」

今日はルネが出かけたいと言っていたことを思い出す。

「今日もきついか……一目見るぐらいなら大丈夫だと思うけど」

「彩とん、今日はなにかご用事？」

「まあ、ちよつと出かける予定が——」

「まさか、ルネちゃんとやらと一緒になのか？！ デートでもするつもりなのか？！」

乃樹が大声を出すので教室内がざわめき出す。

視線も三人の席がある教室の角へと集まる。

それに気付いた乃樹が、あはは、と笑いながらぺこぺこ頭を下げると教室は元通りになった。

「で、それで、デートなのか？ ああ、もう彩人が俺と違うところに。帰ってこい彩人おー」

情けない声を漏らす乃樹に対して、彩人は。

「いや、そういうんじゃないよ。ただのお出かけ。ルネの方が出かけたといって言ったからそれで」

「それはもうデートじゃない？」

雨夜がそう言うとな樹がもたえ苦しむ。

（そんなふうに考えていいの？ いやいや、ルネにそんな気は無いんだから）

彩人は心の奥底を引っかかるような変な感じがしたがあまり気に留めなかった。

「だから、そういうことで今日はちょっとパス、かな？ どうする一目だけでも見るか？」

「俺はそのうちでいいよ」

机の上でうつ伏せになった乃樹が手を振りながら言う。

「会いたい……、でも、一目だけ……、やっぱり、会いたい……、でもすぐ帰らなきゃいけない……」

雨夜はぶつぶつと小声で呟いていた。

「どうする？」

「が、我慢する……」

「おお、意外！ すぐにでも会いたいかと思ったのに」

「そんなの当たり前だよ。でも、一目見たらこの衝動は止められない。その代わり、言った時には何倍にもこの衝動は増してるから。爆発するかも」

「やめてくれ……」

放課後を知らせるチャイムが学校の敷地内いっばいに響き渡る。

「よっしゃー、終わったー」

「一週間、お疲れさん。」

「おつかれー」

三人は一週間の授業を終えて学校を出る。それから彼らは全員、帰宅部としての活動を遂行したのだった。

彩人は他の二名とは橋を渡る前で別れ、ルネが待っている新代荘へ。

「おい、帰ったぞー」

彩人は自分の部屋に鞆を置いて制服から私服に着替えた後、ルネの部屋のドアをノックする。

すると、ドアがカチャリ、と開いてルネが出てきた。

「おかえり」

「ただいま。ところで、だ。どこへ行きたいんだ？」

「えっ?!」

彩人が訊くとルネはぼかんと口を開けてしまった。

「お、おい……決めてなかったのか？」

「あ、え、えっと、それじゃあ、前と同じとこで……」

彼女からの要望が出たところで二人は町のほうへ歩き出した。

いつものように移動手段は徒歩。

ルネは新代荘で留守番のことを。彩人は学校へ行くことができないルネのために学校のことを。それぞれ話しながら移動するので長い移動時間は暇にならない。

そのまま町に着く。

「着いたが……どうする？」

「え……」

「なにがしたい？」

「……」

ルネは黙ってしまった。

全く目的も予定も決まっていなかったのだった。

（じゃあなんで出かけようと思ったんだよ……）

彩人はそこで、ふと思った。

「そういえば最近散歩してなかったなー。ああ、でも寒いから外に

出ようと思わなかっただけか」

「散歩？」

「ん？ ああ散歩。ただ単になーんにも考えずにふらーとすることだ。冬は寒いからな、あまり外に出たくないんだよ。早く春は来ねえかなー。春が来たらぽかぽかして暖かくて気持ちいぞ」

「ふえー」

感心して聞くルネをよそに心の中で愚痴をこぼす。

（まったく……小遣いぐらいくれたら店に入って食い物買ったりできるんだけど……。一銭もかからない散歩するしかないか。寒いけど）

結局、町案内のような形で二人はふらつくことになった。

「って、ルネは全然寒がつてないな」

彩人は出かけるのに三枚着は常だ。

ルネはというと。

「なあ、今上に何枚着てるんだ？ 厚着しているようには到底見えないんだけど……」

「うーん……」

ルネは自分が着ている服を摘んで打つ側が見えるようにめくってみる。

彩人は肌色が見えたところで視線を近くの店の看板に移す。

「二枚……」

「見なきゃわからなかったのか……。ていうか二枚？！ 今日何度だと思つてんだ！ 1 だぞ？！ やっぱり全然着てないよな。そんなので寒くないのか？」

ルネの格好を見るだけで自分自身も寒くなりそうだった。彼女は少しも震えておらず、寒いというしぐさは全く無い。

「うん」

「すごいな。俺はめちゃくちや寒いぞ？」

ふーん、とルネは鼻を鳴らす。

彩人は色々な物を彼女に教えた。

そのたびに様々な反応をする。

普通だったら誰でも知っているような、常識的で、当たり前なことを。

だがルネにとってはそうではない。何もかもが目新しい、その光景が彼女の水晶玉のような目に映るのだった。

彼らは最後にこの前行った総合スーパーへと訪れる。

不思議な目をガラス越しに展示にされた商品に向けているルネ。

彩人はそれをこっそりと横目で見る。

（こういうことかな？ ルネを外へ連れ出したのは正解だったってことか……）

ルネは彩人が自分を見ていることには気付いていなかった。

「結局ただふらつくだけになってるけど、来てよかったか？」

ルネの透き通った目に彩人が映る。

彼女は上目遣いに彩人の顔を見上げる形で頷いた。それから小さく笑みをこぼす。

彩人は彼女のその様子を見ると、今空を覆っていてもややもやとしている雲が晴れたかのように気分が良くなる。

「どうせ帰っても暇なんだ。もうちょっと他にもたくさん見るか」

「うん！ 見たい！」

「ただし。暗くなる前には帰ろうな」

藍さんのお叱りを受けるから、と人差し指をぴんと立てて言った。

そこへ。

「また会ったな、小僧」

### 三章（6） 白色の少年

俺は今までただ呆然と生きることしか考えていなかった。記憶を失ったあの時から。

リセット。

当時はまさしくそんな感じだった。

気付いたのは病院のベッドの上。

ここはどこだ。

病院？

だから何で俺がそんなところにいるんだよ。

俺？

あれ？

わからない。

俺は誰だ？

名前。

わからない。

ベッド脇の表札には、白上彩人。

誰？

この表札は確かにこのベッドの表札だ。

そこに寝ているのは紛れも無い——俺自身。

これが俺？

俺は白上彩人なのか？

思い出せない。

俺は誰だ？

わからない。

何も。

全てが思い出せない。

焦った。

混乱した。

わけがわからなかった。

その後、俺は藍さんと会う。

藍さんからは冷静に俺の状況を伝えられた。

記憶喪失。

自分のこと——主に思い出を失った。

そして新代荘へ。

二人の同年代の子と会う。

同年代と言っても記憶に無いから藍さんの情報を頼りにするしかなかったが。

一人は女の子。

新代若葉。

ちよつと可愛いなと思った。

もう一人は男の子。

常磐幸祐。

こつちもこつちでちよつとモテるんじゃないかと思った。

彼らは初対面だというのに気兼ねなく接してきた。

俺は不安だった。

いったい何を信じればいいのか。

信用していいのかこの人たちを。

最初は警戒心があつたがそれも時とともに和らいでいく。

新しい生活。

悪くは無い。

正直、嬉しかった。

あれから八年。

今では家族のようなかけがえの無い存在となった。

そして、新たにもう一人。

ルネ。

銀色の少女。

彼女は俺と同じだった。

でも全てが同じじゃない。

ルネは俺よりすごい。

一瞬だ。

もう彼女は今を受け入れている。

俺は時間が必要だったのに。

新代荘の皆とすぐに慣れて、笑顔も見せて、恐怖から開放されて。

もう俺たちのかけがえの無い家族だ。

ルネがいるとなんだろう？

不思議と心が安らぐと言うか何と言うか……懐かしい？。

自分が変わる。何かを変えられる。そんな気がする。

とにかく俺たちはこれからずっと一緒にいるんだ。

普通に暮らして。

新代荘で皆とわいわいやりながら。

楽しい日々が続けばいい。

……そう、続けばいいのに。

なのに、なぜだ？

どうして俺たちの平穏を邪魔する？

この世界の『異常』は。

### 三章（7） 狩獵者へハンター」強襲

「また会ったな」

背後からの声は彩人の背中に寒気を走らせる。あやし

その声に聞き覚えがあった。

（嘘……だろ……）

平穩は一時の夢を彩人に与えていた。

だが彼はまだ全てを解決したわけではなかったのである。

「彩人？」

ルネは彩人の顔を一度見て、声をかけた背後に立つ人に目を向ける。彼女はいつものように見知らぬ人を前にして震えていた。

しかし、震えているのは彼女だけではない。

彩人は震えを止めることができないままゆっくりと後ろを振り返る。

男が立っていた。

サングラスを掛けている。

「なんで、なんでこんなところにいるんだよ……」

彩人はその男が今この場所にいることに心の底から憎み、落胆した。

男は不気味な笑みを浮かべる。

「ふんっ、いやあの時、本当に俺も死ぬかと思ったださ。『OASP』の連中まで現れた始末だからな。まあその『ターゲット標的』のおかげで奴らにその場で殺されなかったんだけどな」

彩人は男の声には耳を傾けず周囲を見渡すため目を動かす。

（少ないが人はいる……。だったらこいつは前みたいにあんなことはできないはずだ）

彼はいざとなったら周囲に助けを求めることができるかわかって少し安心する。

「なぜ俺がここにいるか……。その問いの答えは決まっているだろ

う？ 標的の確保」  
ターゲット

男がルネの方を見る。

彼女が怯えるのを彩人は自分の後ろに立たせて庇う形になる。しかし、それは庇っているとは到底いえるはずが無い。彩人は無力だ。この男には敵うはずがない。それは当の本人も十分に承知していた。「個人的な行動はしてはいけない規則だがな。そうさ、知られたからには消すこともあるのさ。まあ、どう言っただとしても、本命は俺のただの憂さ晴らしだけだな。だからな——」

彩人はせっかく取り戻した安心を失っていく。とりあえずの安全を確保したはずなのに直感的に危険を感じる。

「お、おい……ここは人が、他の人もいるん——」  
「お前を消す！」

突如、熱風が吹き荒れる。

（おい！ 人前では暴れないんじゃないのか?!）

熱風が押し寄せるため目がわずかししか開けられないが、そのわずかな隙間から男の手に炎が燈っているのが確認できる。

店内の火災報知機が甲高い悲鳴を上げ、スプリンクラーが慌しく働きます。

「はっ！ もはや、周りなど関係ない！ まとめて燃やして灰にしちゃえば問題ないッ！」

男が両手腕を振ったことで周囲のテナントに火が移る。衣類などの商品に次々に引火し、火災範囲は広がっていく。

「おい！ なにやってんだ！」

彩人は男のとった行動が信じられなくて思わず叫ぶ。周りからは火事だ、逃げろなどと人々が騒いでいる。

「消してやる。灰も残らずになあ!!」

男は容赦なく彩人に炎を振りかざす。

「あ、彩人！」

ルネが彩人の袖を引っ張る。

彼女のおかげで彩人は「こんなことをしている場合じゃない」と気付かされ、ルネの手を引いて何とか炎を避ける。

彼らが避けたことによって炎を代わりに受けたショーガラスが、パリン、と音を立ててガラス片を撒き散らす。

「うつ……」

ガラス片は彼らを襲う。

しかし、ガラス片は運よく男の片目にも当たり、男は一時ひるんだ。

現在、彩人たちがいるのは幸い一階であり、彩人はルネの手を引いて一直線に出口を目指す。

当たりからは黒煙が立ち上り天井に溜まっていた。

「ルネ！ 鼻と口を押さえてろ！」

彩人はルネの方を確認する暇もない。一目散に逃げなければまたあの男が追ってくるのは明白だった。

（あいつ、こんな人の多いところで……）

店内には煙が充満し、視界を邪魔する。

「くそ！ どこ行きやがった！！ ぶっ殺してやる！！」

男は憤慨し声を荒げると、再び熱風が吹き荒れた。

何から何までも焼き尽くすつもりで男は炎を乱暴に振り回す。まさしく無差別な攻撃。

（出口はまだか！）

煙が目にしみる。目をつぶってしまうのを必死で堪えながら、わずかに明るみのある方を見続ける。

その彩人の努力を裏腹に視界は霞を増していく。

（なんか……ぼーとしてきた……）

どんどん意識が遠のく。「これが一酸化中毒って奴？」などと無駄なことがばんやりと頭に浮かぶ。それでも体は頭の命令を必要としないかのようにただ前へと進む。

彩人は気付いた時には店の外にいた。苦しい中、休みたくてしょ

うがなかったがそれは許されない。

「大丈夫か？」

自分と手の繋がっているルネへと振り向く。

「う、うん……あ、彩人！　そ、それ！」

ルネが目を見開く。

「……ん？　ああ、たいしたことねえよ」

彩人は右手で頬の血を拭う。

ガラス片が飛び散った時に切れた傷。

「そっちは当たらなかったみたいだな。よかった……」

ルネはフードをずっと被っていたのが幸いして直に顔には当たらなかった。さらに冬服であったこともあり露出度が少なかったため手足が傷だらけということもなかった。

「彩人はだ、大丈夫なんかじゃ——」

「それより、早くここから離れるぞ！」

彼女の言葉を遮る。

店の外は大騒ぎだった。消防隊員たちも駆けつけて消火活動および救助活動に取り掛かるうとしている。外からでも黒煙が立ち上っているのは確認でき、爆発音も数回聞こえていた。

彩人は消防隊員に捕まる前に早く退散しようと思った。

（あいつの狙いは完全に俺たちだった。だから奴は意地でも俺たちを追っかけてくるにちがいない！）

彼は消防隊員に怪我の状態やらの尋問をされて足止めをされるわけにはいかず、まして救急車にお世話になるなどしたら奴は病院まで襲撃するんじゃないかと危惧すらした。

繋いだままのルネの手を再び引っぱり、人だかりの中を通り抜けて火災現場からひとまず脱出する。

「とりあえず新代荘に帰るぞ！」

「わかった！」

人々のざわめきが激しいので大声で伝え合う。

町中を二人で駆け抜ける。

彩人は走りながら火事のことを話す人の声が聞いた。雑木林の火事といい、この辺りの人々は多少火事に敏感になっている。

彼はあの火事で他の人には被害が及んでいなければいい、と切実に願う。俺たちに責任はない、と言い逃れはできない。

（あの男が発端とは言え、紛れもなく俺たちが原因だから……）

それでも自分たちの身は守らなければならない。

他の人たちに構っている暇などないのだから。

彩人はもうあの夜の事件は終わったと思い込んでいた。

しかし、今日、あの男は再び自分たちの前に現れた。

それは、つまり、あの男はいつまでも自分たちを狙い続けるということ。

あの男が警察にどうこうできる相手ではないことなど明白だった。（どうすることもできない。でも、今は逃げるしかないんだ）

彩人とルネは走り続ける。

雪降る町を。

逃げ惑う。

『異常』から。

彼らは不可能だとも知らず。

「そこのお二人さん？ ちょっとストップ！」

彩人とルネが車二台ぎりぎりすれ違えるぐらいの幅の通りを走っていた。そこは町から住宅街に入りかけるところにある。彼らは声をかけられたが、前だけ見つめ走り続けていたために気付かなかった。

彼らが一人の金髪の女性とすれ違ったことに。

「チッ……」

金髪の女性は二人に気付かれなかったので深くため息をつき、ジャケットの裏に隠していた金属の塊を取り出し――

鋭く、そして短い音が響いた。

必死で走っていた彩人とルネの足が止まる。

「無視はやめてほしいわねー」

金髪の女性の声。

（今の何の音だ？）

そう思っただ彩人は後ろを振り向く。

今は逃げることに集中するべきなのに彩人は足を止めた。そしてルネも。

それは反射的に体が固まったからだ。

「だ、誰だ？」

彩人の目に映ったのはいたって普通の外国人の女性。確かに珍しいかもしれないが、別にいてもおかしくはないはずだった。彼女の右手にある物を見なければ。

女性は右手にもつそれをまっすぐ二人の方に向けていた。

彩人の顔が冷める。

（あれって…… おもちやだよな？ 本物なわけあるはずが……）

彼女の手に握られたものはまさしく――拳銃。

「そちらの坊やは初めまして、私の名前はミロリー。そしてそちらの子は…… お久しぶりね」

「お久しぶり？」

彩人は女性がその声を掛けた少女――ルネを見た。

彼女は何かを言おうとしているがそれは言葉になっていないように口をばくばくさせている。

「昨日は来てくれると思っていたのに…… 残念ね」

言葉通り残念な表情をするがどこか作り物のような雰囲気がある。

「知り合い…… なのか？」

「ルネを知っていた人…… ルネが『普通』じゃないって教えた人」

「『普通』じゃ…… ない、だと？」

ルネは自分が特別なことができると知っていた。

それを彩人は昨日知った。

彼は気付いていなかった。

（ルネは初め、目を覚ました時には夜に起こった出来事をぼんやりとしか覚えていなかったじゃないか。あの男の炎や氷のことを尋ねた時、ルネはなんて答えた？）

ルネは覚えてはいなかった。

自分がそんなことができるなど知らなかった。

彼女はそれのことについては自分から一言も話さなかった。昨日を除いて。

（思い出したんじゃないかったのか……）

彩人はそれをルネが自分で思い出したものだと思っていた。だから、そのことをルネに伝えた人物が存在したなど一度たりとも考えはしなかったのである。

「その坊やは、その子が普通でないことはわかっているのでしょう？　というより、うちの部下を異常フラウイタスも使わずに逃げ切った『ただ

の』少年は……坊やってことになるわね。恐れ入るわ。とても馬鹿馬鹿しい。でも、おもしろい！　まさか改変者アルターが一般人に遅れをとるとは……坊や、中々やるわね。運がよかっただけでしょうけれど」

ミロリーと名乗った女性は淡々と話しながらも、拳銃の照準を二人からはずすことはなかった。

（俺のことも知っている？！）

「あ、あの……」

やつのことでルネは言葉を発する。

「いいのよ。謝らなくても。私は昨日、寒い中あなたを待っていたけどね」

「お、おい、どういうことだ。さっきから、ルネが『来てくれる』だとか——」

「坊やはその子を受け入れたのね。自分とは生きる世界が違つとわかっていながら」

ミロリーは彩人の質問を隅に置き、自分のペースで話す。

「そつだ。なにが悪い。ルネは俺たちの家族だ！」

「家族、ねえ……」

ミロリーは彩人を見つめる。その目が意味するのは哀れみ。

「私が昨日の夜、その子と呼んだのよ」

「なん、だと……」

昨日、いや日付は周っていたので今日のことになるがルネは夜中に新代荘を一人で抜け出した。誰にも別れを告げずに。それはもう二度と帰ってこないという意味の込められた出て行くという意味だった。

「そう……なのか、ルネ？」

彼女に恐る恐る訊くと、ルネは控えめに頷いた。

「昨日の昼にね、声を掛けておいたの。あなたはこっちの世界でしか生きられない、ってね。平和的にことを済ませようとしたのだけれど……残念だわ」

「それじゃあ……」

この場の恐怖より、ミロリーに対する怒りが上回った。

「それじゃあ全部お前の差し金だったのか！ ルネの様子がおかしかったのも！ 俺たちから離れようとしたのも！」

「違うわ。選択権はその子にあった。その子の決断だったのよ。そう、一応私の元に来る気は少なからずあったの……。でも、坊やが止めた、か」

「どうしてルネを狙う！ お前はあいつの仲間なのか？ ということとはルネが狙いなのか？」

「あいつ……それは誰を指すのかはわからないけど、たぶんそうよ。この周辺に私たち以外の『狩獵者』<sup>ハンター</sup>はいないはずだから。そして私たちの目的は『標的』<sup>ターゲット</sup>の捕獲。つまりはその子をつまえるってこと。正解ね」

「なんでそんなことするんだ！」

「それが私たちの仕事だからよ」

「彩人！」

ルネが彩人を叫んだ時にはもうすでに戦いは始まっていた。

銃声が鳴り響く。

その途端、彩人の前に氷の壁が出現しそれを防ぐ。

「ルネ……」

「早く逃げよ」

あの時もそうだった。彩人はルネに守ってもらった。

（くそっ！ 俺にはなにもできなつてのかよ！）

「ふーん、抵抗するのね」

「彩人は傷つけさせない！」

ルネは彩人より前に出て、雪が一面に積もった地面に手を付く。

やがて雪に変化が訪れる。

「これは……ルネがやったのか？」

白い息を出して言いながら彩人は目を見開いた。

ルネの周囲にはダイヤモンドダストが漂い、きらきらと輝いている。

ルネが手をついた地点は凍りつき、それはミロリーの足元まで氷の道のように伸びていた。そしてその氷の道はミロリーをぐるりと取り囲むと天に突き上がった氷の柱と化す。柱は束になることで檻の役割を果たしてミロリーの身動きを封じる。

「やってくれるわね……」

怒りを押し殺したような声が氷の柱で出来た檻の中から漏れる。

ルネはミロリーの方を一瞥するとさっと立ち上がる。

「彩人！ 早く逃げよ！」

「お、おうわかった」

彩人は彼女がしたこと一度肝を抜かれ、反応がやや遅れる。

「そうはさせない」

彩人たちはミロリーの言葉が聞こえて振り向くと、氷の角の腹部分が何かに寸断され、檻は崩壊する。

「そんな……」

彩人にとってルネが氷の檻を出現さしてしまうことを凄いと思ったのに、閉じ込められたミロリーが一瞬で崩壊させたことにお驚きを隠せない。氷の檻を作り出した本人——ルネも彩人と同じ様子

だ。

氷の檻から出てきたミロリーの手には先ほどの拳銃と違ってナイフが握られている。

「どうやって破壊したのかって顔をしているわね、二人とも。その子には力のことを話しただけで、戦いへの転用は教えないようにしたはずなのに……。これは想定外だったわ。私も驚き」

「そのナイフ一本でやったとも言っのか？」

「そうよ」

彩人の問いにあっさり肯定し。先端を切り落とされた氷の角の残骸を一薙ぎ。氷は紙をカッターナイフで裂かれるように何にも問えることなく切断される。

異様な光景。

彩人には氷がただのナイフであんなにも綺麗に切断できるとは全く思えない。

「この世界には様々な種類の<sup>フラヴィタス</sup>異常が存在するの。その中でも仲間はずれなものがあるのよ。それが私の持つ力。<sup>リバイス</sup>修正者の持つ力。アメント」

<sup>リバイス</sup>「修正者だって？」

「例えばその子の力。私も正確には把握していないのだけれど、おそらくは物質の結晶化。どう？　それが常人に成せる技だと思う？

そんな普通では考えられないようなことをやってのける力は紛れもなく『異常』である。そしてそれらはあらゆる法則すら超え、世界をおかしく変えてしまう。ゆえにそれを持つ者を<sup>アルター</sup>改変者と呼ぶ。

あなたが<sup>アルター</sup>接触しただろう男、炎を使う男も同様。でも私は<sup>アルター</sup>改変者ではない。改変者と相反するもの、それが<sup>リバイス</sup>修正者。このおかしくなった世界を修正するための存在。私のこのアメントと呼ぶ力は<sup>フラヴィタス</sup>異常を消滅させるために存在する。結論をいうと私はその子の力を打ち消して、氷を破壊、否、消したということよ」

あなたに話したところで理解できないでしょうね、とミロリーは付け加える。

（わからないことだらけだ。なんなんだ。この世界は。俺たち一般人の知らないところでは何が起こってるんだ?!）

「言っとくけど、その子に勝ち目は無いと思うわ。想定でB……私でもなんとか対処できるレベルよ。sれにお荷物を連れた状態じゃあ存分に戦えないだろうけど」

「あ、彩人、どうしよう……」

ルネが彩人を頼ろうとしている。

だが彩人は何もできない。彼女やミロリーののような特別な力も使えない。できることは見ているか、逃げるかだけ。戦えるわけがなかった。

（もう、おしまいか……）

ミロリーはナイフを拳銃に持ち替えて容赦なく彩人に向ける。

ルネが庇ってくれなければ彩人は弾丸に打ち抜かれて死んでしま  
う。

そう死ぬのだ。

認めたくない。死にたくない。彩人は神様にでも縋<sup>すが</sup>りたい気分になる。

あの男に襲われた時も同じだった。あの時は運よく生き残った。

ただそれだけ。

そう何度もうまくいくはずがない。

自分がここで殺され。

ルネは連れて行かれる。

そう彩人が絶望した時、人が死ぬかもしれない冷たいこの場をぶち壊すように軽快なメロディーが鳴った。

（な、なんだ?）

音の出所は拳銃を片手に持つ金髪の女性——ミロリー。

ミロリーは拳銃を持った手はそのままでもう片方の手でジャケットのポケットを探る。

そして出てきたのは——携帯電話。

先ほどのメロディーは携帯電話の着信音だった。

思わず気が抜けかけた彩人はすぐに緊張を取り戻す。

ミロリーは彩人とルネをずっと見つめ拳銃を向け続けながら、取り出した携帯電話を耳に当てる。

「私だ」

「なに？　くそっ！　あの役立たずめが……」

「『奴ら』に嗅ぎつけられのはまずい！」

「ああ、わかった。すぐに向かう」

ミロリーは通話をしながらも一切油断せず、彩人たちが逃げる暇を与えない。

銃口を向けられた彼らは動くことができなかった。

ただ緊張を保ちながらミロリーの言葉に耳を傾けるしか許されない。

三十秒以内に通話を終えたミロリーは携帯電話を閉じてもとに戻す。

ターゲット

「目標を前にして見逃すのは屈辱だが、やむ負えないわ。ちょっとこちらで問題が起こってね。よく聞きなさい！　今日の夜、午前零時！　私は、坊やがうちの部下と接触したという雑木林で待っている。ターゲット標的だけがそこに来れば、坊やの方の命は見逃してあげる。ど

う来るかは君達次第よ。ただし、もし来なければ私たちなりにも派手に動かせてもらっわ。殺しちゃうかも。例えば、あなたたちの言う『家族』っていうのとかね！」

ミロリーは全て言い終えた後に銃弾を放った。最初と同じようにルネがその弾を防いで彩人を守る。

そして、ミロリーは去っていった。

「彩人、だいじょ——」

「おい、ルネ！」

体のバランスを崩した彼女を彩人は支える。

（なんだこれ……）

彩人は頭痛とはまた違う、だが頭、または脳か、自身の体に違和感がしていた。流れ込んでくる。それは一方的に。それは拒もうとせず、むしろ快く受け取っているような。

（確か前にも……）

しかし、そちらを気にしている余裕は無かった。

ルネは頭を押さえて苦しそうに唸り声を上げている。

「大丈夫か！　おい！」

「だ、大丈夫……」

ルネは一人で立とうとする。しかし、まだふらついているので彩人が手助けする。

「ほんとに……ほんとに大丈夫なのか？」

「うん。ちよつと頭が痛かっただけ……」

彩人は彼女に肩を貸す。

（助かった……とは言えない……）

彼はなぜミロリーが急に退散して言ったのかさっぱりわからなかったが理由なんてどうでも良かった。

生きている。

二度も死ぬ状況に追いやられた彩人にとってはそれだけで十分だった。

彩人とルネは新代荘に帰っていく。

途中からはルネが一人でもう歩けると不機嫌そうに言うので、彩人は思うようにさせたが心配で彼女から目が離せない。

（今夜、また、あいつと……）

奴には仲間がいた。同じようにルネを狙う仲間が。

今度会うときは何人いるかわからない。

行かなければ新代荘の他の皆にも迷惑がかかる。

（それはだめだ。皆は絶対に巻き込めない）

藍。幸祐。若葉。どれも彩人にとって大切な人々。かつて自分を救ってくれた皆を守らなければならない。彼はそう思った。

ルネも同じことを思っていた。

そしてお互いに相手が同じことを思っているのもわかっていた。  
大切な人たち。

巻き込んではいけない。

守らなければ。

絶対。

絶対に。

絶対に守らなければいけなかった……。

そう。

彼らの願いは、決意はもう無駄となっている。  
もう、すでに手遅れだった。

「彩人！ ルネ！ 今すぐ病院へ行くわよ！！」

新代荘の外にいた藍が言った。

### 三章（7） 狩獵者へハンターへ強襲（後書き）

三章これで終了です。次からシリアス展開の四章に入ります。ぜひ読んでくださると嬉しいです。

12/5本作のヒロイン、ルネのイラストを描きました。挿絵として使おうかと思ってます。お楽しみに。

#### 四章（1） 悲劇の連鎖は止まらない（前書き）

四章に突入です！ シリアス展開に入り、ようやく物語も本番です。一番長い章となりますが、お付き合いをお願いします。

## 四章（１） 悲劇の連鎖は止まらない

彩人、ルネ、藍の三人がいるのは病院の一室。

だが、もう一人。

新代若葉。

はんぶ

帆布南高校一年生。水泳部所属。好きなものは犬や猫の小さな動物。嫌いなものは昆虫、爬虫類。得意なことは水泳。苦手なことは料理。明るい女の子で学校のクラスでは人気者。そして何より――

――家族思い。

彼女は今眠っている。

清潔感漂う白いベッドの上で。

いくら名前を呼んだところで目を覚まさない。

「若葉……」

ルネが嗚咽を漏らしながら若葉の名前を呼ぶ。もちろん若葉が目を開けることは無い。

彩人は椅子に座って、歪んではつきり見えない若葉の寝顔を見つめていた。

藍は何も話さない。

不運だった。

若葉は今日、部活が無かった。同じく幸祐の方も休みになっていたので、若葉は前日に靴を買いたいと陸上部の彼に頼んでいたのだ。行き先の店は後に火災の起こる総合スーパーマーケットのテナントだった。火災が起これとも知らず仲良くその店で品を眺めていた。

そして火災が起こる。

幸祐の方は軽症で済んだとのこと。

だが若葉の方は重傷だった。事件発生から一度も目を開けていない。

火傷などの外傷もあったがそれよりも問題はそちらにあった。意

識不明のまま救急車で病院へ搬送。

その後、幸祐からの連絡を受けた藍は事件のことを聞く。

三人が病院に駆けつけたときには幸祐の姿は無かった。

時間だけが過ぎる。

午後六時。

冬なので日没が早い。もう外は暗くなっていた。

「あなた達はもう帰りなさい」

長い沈黙を破ったのは藍だった。俯いていた他二人は顔を上げる。

「いや、残る……。それに幸祐はどこへ行ったんだ？」

「幸祐は警察に事情を聞かれているそうよ。あの子も最初は気を失っていて若葉より先に目が覚めたって言っていたわ。若葉をほったらかしにしているなんてことは絶対にならないわ」

「そんなことわかってる」

幸祐は若葉を大切に思っている。そんなこと新代荘の誰しもが知っている。

「ルネ……あなた、もうご飯と味噌汁だったら一人で作れるわよね？ 帰って五人分の夕飯を用意しといてくれない？」

「え……でも……」

ルネが若葉の顔を見る。

「あなたの仕事よ。彩人、あんたも帰りなさい。ここは私一人で大丈夫だから」

「藍さん……」

「行つて」

「……」

「行つて」

もう一度言われ、彩人が藍と目を合わせてから、一度閉じて立ち上がる。

「わかった。いくぞ、ルネ」

「え」

「いいから……」

彩人は彼女の手を引き病室を後にした。

若葉が搬送されたのは帆布区を中心——火災の起きた総合スパーマーケットから西にもう少し行ったところ——に建っている。新しく、設備も充実している方の病院である。

彩人はベージュの外壁の病院を見上げる。彼が見ているのは先ほどまで自分のいた病室のあるところ。辺りは街灯がもう明かりを照らしていなければ暗くて見えなくらいだったので、病室の中からの光で照らされているカーテンしか確認できない。

ルネも彩人が見ている方向を見ていた。

彩人が先に立ち止まっている足を動かして病院に背を向け、ルネの横を通り過ぎる。

「……」

ルネは彩人に声を掛けようと思ったが口からは何も発することができず、わずかに動いた手は彼には届かず宙を掻いただけ。

彩人が一人ですたすたと歩く。

それにルネが後ろから付いて行く。

会話は無かった。

冬の寒さに劣らずと日没後の町は賑やかだった。

帰宅ラッシュで車が眩しいライトを付けながら走っている。向かい側から走ってくる車がそのライトで二人の顔をなできるようにして隣を走り去っていく。

周囲には食べ物の匂いが漂う。主に肉が焼ける匂いが最も強かった。アルコールの匂いもそれとなく感じることができる。

仕事終わりのサラリーマンが談笑でもしながら飲んでいるのだろう。酔っ払った人が何か叫んでいるのも聞こえる。

また他にも若者たちの集団がわいわいと騒いでいたり。

時折、消防車を見かける。巡回して火事が起こっていないかパトロールをしているのだろう。

夜の町は昼よりも明るく見える。おそらくそれは一週間以上に渡って、空をずっと覆いかぶさっている灰色の雲が青空をいつまでも見せようとしないうせいだろう。そのため気温上昇が気温低下をいつまで経つても上回らない。灰色の雲はさらに雪を降らせ、地上の人々に意地悪をしているかのようだ。

彩人は足を止めた。

そこには何台かのパトカーが止まっており、赤いランプが眩い。夜の町が明るいおかげで炭や煤で黒くなったこの場所もどういう惨状かを確認することができる。

総合スーパーマーケット。

昼間までは買い物客で賑っていただろう。しかし、今は物静かなものだ。

まだ冬とはいえど閉店時間にはまだ早い。来店客は一人も居ない。黄色いテープが張られて店内には入れないようになっていたのだから当然だ。

来店客は一人もいないが代わりに全員同じ服を着た人たち。彼らはせつせと働きアリののごとく働き続けている。

「変わり果てたな……」

彩人の口からこぼれ落ちるように出る。

総合スーパーマーケットは駐車場や道路などで他の建物とは接していないので、他の建物はそのような惨状にはなっていないかった。それゆえ、周りからは目だって見える。周りより大きい建物だから、といういつもの理由とは違って。

「最初に出かけた場所だったのに……」

全くと言っていいほど力のこもっていない声。

彩人は聳え立つその三階建ての建物を見上げる。

「さいしょ？」

「ああ、残念だったな……ルネ」

ここは彩人がルネと初めて出かけた場所。ルネにとっても思い出となった場所であった。

はずなのに。

「ここ、どこ？」

「なに言ってんだ？　ここはルネが初めて出かけた場所。その服だつてこの場所で買った。まあ、様変わりやしちまつたけどな……」

「服……ここ……買った……？」

「俺たちがここから離れた後もまだ燃え続けたんだろうな。一応、お前との初めての思い出つて感じがちよつとしていたのに……」

彩人は悲しそうな目をしながら言う。外見でこれならば店内はもっと悲惨なことになっていると思われる。これだと本格的に取り壊しにしてまた建て直すしかない。

「どういうこと？」

「本当に……最悪だよ」

彼はまだ気付かない、彼女の身に起こった問題について。

「わ、わたし……え？　この服……どうして？」

「どうした、ルネ？」

「この服……ルネの……服？」

ルネの様子は明らかにおかしかった。先ほどまで二人とも暗闇のように沈んでいたのに今はそれとはまた違うものだった。困惑している。

「ああ、そうだが。……って、おい、どうしたんだ？」

彩人も急変したルネを見て、沈んだ気持ちから焦りに変わっていき。

ルネは両手を頭に当て抱えこむ。目の焦点が合つておらず動揺しているのが見て取れる。彼女の足が力なく崩れ、地べたにしりもちをつく。

「な……んで？」

その問いは自分自身に対して投げられていた。

「おい！　しっかりしろ！」

彩人は彼女を正気に戻すために肩をゆする。

（若葉のこのショックが大きすぎたのか……。俺だってあんなの

納得いくわけがねえ！)

「さっきのこと……本当？」

わらわらとした声で彩人に尋ねる。

「は？」

ルネとの会話にややずれがあることを彩人はようやく気がつく。

ルネは彼の顔を見続けている。体はひどく震えていた。

「さっき？」

「服のこと……」

「服？　ここで買ったって話か？」

(何で服のことなんかを……)

彼はルネの言う事に場違いさを感じてならない。ちょっと前には何の罪も無い若葉が事件に巻き込まれて、今でも意識不明だというのに。溜まりに溜まったわだかまりをルネにぶつけそうになる。彼が自分の無力さに対する怒り、若葉があのようなことになってしまった怒りなどを弾けさせてしまうほど、ルネの言葉に苛立ちを感じる。

(今はそんなこと話している気分じゃねえんだよ！　こういう時ぐらい空気を読んだらどうなんだ！)

「ああ、そうだ！　俺たちが火曜日にお前の服を買ったためにいっしょにここへ来た！　それがどうした！」

彩人は怒鳴りつけるように言ってしまった。しかし、それは正しくなかったと証明させられる。

「ほん……とう……？」

「——ッ！」

ルネは泣いていた。

彼は迂闊だった。それを見て面食らってしまう。

「わ、悪い……」

地べたに崩れ落ち、また表情も崩れてしまったルネは彩人の足を

掴む。

「なんで？」

「おい、本当にどうしたんだ?!」

ルネは泣き崩れて嗚咽ばかりが漏れる中で、途切れ途切れながらもその口から言葉がつむがれる。

「なんで、ルネは、憶えて……いないの？」

彩人は一瞬、時間が止まったような気がした。一生懸命脳を働かせようとするのに理解が追いつかない。

「い、ま、なんて？」

「思い……出せない、の」

ルネの大きな水晶玉から出た小さな水晶玉が彼女の頬を転がり、雪の上に落ちて溶け込む。

「思い、だせない……だと」

そんな馬鹿な、と彩人は思う、いや、思いたいがルネの様子がそれを真実だと物語ろうとしている。

「う、嘘だ、そんな記憶が……」

「わたし、そんなの、知ら、ない！」

ルネの言葉を嗚咽が分断する。

（どうして……なんで……。ルネは一度すでに記憶を無くしているんだぞ！ それなのにまた、また記憶喪失なんて！ ありえない、ただちよつと忘れたただけだ！）

「ただ思い出せないだけなんじゃないのか？ 思い出せ、ルネ！

その日は朝から、俺は学校をサボってお前と一緒に新代荘を出て……それから！」

「彩人が、その日、帰ってきたの、は覚えてる。なのに、その後、なにがあつたの、か少しもわから、ない。真っ白なんだよ」

（なぜだ？ どうして記憶を失った？ 違う、前にもあつたような……いや、前にもあつたはずなんだ！）

「そうだ……」

男との戦闘した時を思い出す。ルネは力を使って彩人の身を守った。その際、ルネと少なからずだが会話を交わした。顔も向け合った。

次の日、彩人がルネと話したときには、男のことも自分が力を使ったことも憶えていなかった。

「……よく考えたらおかしくないか？」

感覚的に彩人が背中に彼女を負っていた時のぬくもりだけを彼女は憶えていた。彼女は衰弱していたとはいえ、意識はある程度あったのではないか？ 彩人を守ろうとしたのだから。彩人が守る対象だとも知っていた。あの男が敵であることも。

単にその場の状況で咄嗟の判断で決めたと言ってしまえば正しいとは言えないが。

しかし、あの衝撃的な光景が記憶に残らない？

彩人は焼き付けられたようにしっかりと憶えている。

（じゃあ、なんで戦闘について全く憶えていない？）

そして今日、ルネはまた記憶を失った。

日曜日と今日の共通点。

彼女は同じ行動、そして彩人は同じ経験をした。

「まさか……」

その二つの日に彩人は襲われた。

では、その二つの日にルネは何をしたのか？

「力を使って……俺を守ろうとした」

時に大きな力には代償が伴う。

それが彼女の場合。

記憶。

「これからは二度とその力を使うな！」

「え？」

「氷を出したその力だ。その力の代償が記憶だったんだ！ だから力を使った後に記憶を無くす！」

「そん、な……」

「いいか？ 確証は無い。これはあくまでも俺の推測に過ぎないかもしれない。でも、二度と力を使わないと約束してくれ！」

ルネは少し躊躇った表情を見せる。

「……わかった」

ルネは新代荘に帰るまで目から流れる雫が落ち続けた。空からは雪が落ちてくる。

彼らは藍の部屋に入り、彼女が藍に任されていた夕食作りは彩人が代わりしてあげた。幸祐は帰ってきていなかった。

ルネはご飯に少しも手をつけようとしないので、彼女の部屋に連れて行って寝かしつかせる。

「落ち着いてからでいいから……飯は食べるよ」

「……」

ルネ彩人と顔を合わせようとせず、何も話そうとしない。

「じゃあ、俺は自分の部屋に戻ってるからな」

彩人はそう言って、そっと部屋から出て行った。そして自分の部屋に戻るなり布団に体を叩き付けた。

苛立ち。

ルネがまた記憶を無くした。

さらなる問題により彩人は追い詰められる。

「くそ、くそ、くそ！」

握りこぶしで布団を殴りつける。

「なんで、なんで、俺は……俺は！」

何もできない。

彩人にとってそれが一番嫌なことだった。

ルネの記憶が取り戻せないのも。

若葉が怪我をしたことも。

襲われた時も。

自分は何もしていない。

ましてやルネが自分を守ったせいで記憶が無くなったのかもしれないのだ。

そしてふとあの始まりの夜でルネが最後に言った言葉を思い出した。

「たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから」

彩人には最初はその意味が全くわからなかった。いままで気にも留めていなかった。それは間違いだった。その言葉の意味に早く気付いていれば、もしかしたらルネが記憶を失くさずに済んだかもしれないのだ。

（あの時、ルネは知っていたのか?! こうなることを!）  
そして他にも。

「それと、彩人には世界を変える力がある。だから諦めちゃ駄目だよ」

俺にできること、と考える。

（そんなの……違う）

無力。

そう、彩人は無力だ。

「俺にできることはないのか?! あの時だってルネがいなきゃ、今頃もう死んでいた! 代わりにルネの記憶が無くなったっていうのに!」

隣の部屋ではルネが寝ている。

それに気がついて唇を噛み、自身を黙らせる。

時計の音だけがカチカチと音を立てる。

(時計……?)

九時二十分。

「あ、ああ、あああ!」

十二時まで残り三時間を切っていた。

良い言い方をすれば、待ち合わせ。

悪い言い方をすれば、取引。

ミロリーが提示した条件。

ルネを渡せ。

もし、渡さなかったら派手に行動を起こす。

若葉は意識不明になった。

じゃあ、彼らが強行的になって出たらどうなる?

新代荘の皆は?

そんなの決まっている。

殺される。

容赦なく。

ルネは連れて行かれる。

ミロリーが出したもう一つの条件。

ルネを大人しく渡せば、新代荘の皆は……否、一人を除いて助かる。

できるわけがない。

彼女を見捨てることなど、できるはずが――



「あと五分……」

ミロリーは腕時計のライトを付けて時間を見る。

彼女は数日前に火災が起こった雑木林の中で、黒い煤になっていた表面の木に体の体重を預けながら日付が変わるのを待っていた。十二時が取引の時間だった。

「さて、目標ターゲットが来るか……それとも、坊やが来るか……」

気温はもちろん低い。氷点下に達していてもおかしくないくらい寒く、じっとしていると体温をすぐにもっていかれそうになる。

「まったく」

言葉をため息混じりに吐き捨てる。ため息は寒気に冷やされて水蒸気ができ白くなるが、真っ暗な雑木林の中では確認できない。

腕時計のライト機能（こちらの機能は白色電球が使われ明るさが強い）でしか辺りを照らせないため、ポケットからライターを取り出して、根本が焼けて倒れてしまった樹木の上に落とした。

それから灯油を入れた小ビンもそこに投入する。すると、たちまちその樹木を炎が包み込む。炎が暗闇を照らす。

「私らしくも無いことをしているわね……」

請け負った仕事は絶対に成功させなければならない。

それは何年も心に決めてさまざまな汚れた仕事をしてきたつもりだった。今回の仕事は標的の捕獲。これから、その仕事を全うしようとしているわけだが、今の自分に呆れていた。

「今回の私はどうかしているわ」

これは趣味ではない。仕事だ。いつもどおりだったら、すぐさまターゲットにでも標的の確保。もし妨害が入ったら障害を排除する。

今回はそれが全くこなせていない。

一回目に標的ターゲットに接触した時点で周囲に、標的ターゲットと関わりを持ったと思われる人はいなかった。確かに町中で人はそれなりにいたが、そのような障害はどうとでもない。それ相応の処置をとれば周囲の目など気にすることは無かった。でもそうしなかった。

二度目の接触。その時には標的ターゲットの知人が一人。どうみてもただの少年でしかなかった。何か戦闘に長けていたというわけでもない。集中力にかけた少年で一瞬のうちにふところに飛び込めそうなほどだった。

「あと三分」

それでも少年は自身の部下の一人と接触し、標的を連れて逃走に

成功している。まだまだ新米のがさつな男だったが、それでもD等級シグアルターの改変者である彼から逃走できたのは中々のものだと感じてしまふ。

たいていの一般人だったら腰を抜かすか、パニック状態になってもおかしくないというのに、ターゲット標的を連れて逃げると自分には信じられない決断に至ったのだから、その少年には恐れ入る。

そのような珍しく、さらに面白くもあるその少年に、無意識のうちに手を抜いていたのかも知れない。

「次は何を見せてくれるのかしら」  
くすくす、と笑う。

あの少年には『何か』がある。長年の勘がそう告げている。

「そろそろ、あっちも始まっている頃ね」

ミロリーが自分たちの隠れ拠点にしていた根城を頭に浮かべる。

今、彼女は一人だ。

他のメンバーはここにはいない。彼女が根城にしている場所に残るように命令をくだしたからだ。

この仕事は自分単体でも遂行できるものだから一人でこの場所にいるという理由ではない。彼らには重要な仕事を与えていた。

「ごくろうね、囃さん達」

ミロリーは今頃、自分の根城が襲撃を受けていると予想する。依頼主からは詳しいことを訊くことはできなかったが、知らないところでも色々な組織、人々が動いているのはとつくの前から気づいている。その中には仲間とは呼べないが同じ、依頼を受けた狩獵者ハンターも含まれる。そして、もちろん敵対勢力も。

ターゲット標的にファーストコンタクトをとってから一週間が経とうとしている。敵対勢力の妨害が本格的に入るのも時間の問題だった。

ミロリーの予想ではおそらく今夜。

だから囃としてメンバーを残してきた。自分の方で本来の任務を遂行するために。

「あと一分」

任務はあくまでも標的ターゲットの捕獲。敵対勢力との交戦ではない。

だから無用な戦闘をしないためにも穏便に動いていた。

「あいつも飛んだお荷物だったわ。罰はしっかり受けてもらったことだし」

標的ターゲットとのファーストコンタクトが新米のメンバーだったことは不運だった。穏便に行動しなければ敵対勢力に見つかってしまう。現に少人数だが見つかったとも聞いている。

ミロリーのいる雑木林は焼け跡と化している。どう考えても穏便ではない。一番厄介な一般人の方でも公になってしまったために警察が動いている。

彼女たちの存在は表沙汰ではない。だから知られると面倒なことになる。

なのに今日も大事になってしまった。標的ターゲットを見逃してでも事態收拾に向かったことで、表沙汰にはばれなくて済んだ。だが、その時、敵対組織の一人と接触してしまった。彼は殲滅よりけが人の救護を優先したようだったが。

「来たわね」

もてれかかっていた木から離れる。

がさがさと雪を踏む音。

誰かがこちらに走っている。その足音は一人分。

「さあ、どちらがきたのかしら」

ミロリーは楽しくて仕方がなかった。

『異常』とは正常でないこと。つまり予測もできない未知なるもの。ありえないと思えることだって起こる。

だからこそ、楽しみなのであった。彼らがいったい何を見せてくれるのかを。

## 四章（2） 病室1

日付が変わった。

彩人とルネを先に帰してから六時間。その間、藍は一時も病室を離れることは無かった。

病室に置かれたデジタル時計を見て藍はそれを知る。

顔はまた病院のベッドの上に向く。そこには新代若葉が寝ている。寝ている。安らかに。寝息を立てながら。

意識は——ある。

意識不明の状況からは抜け出していた。それに体にあつた傷なども不自然に一つ残らず消えている。

「ふざけてるわ……」

若葉の体調に対する安堵とともに、呆れた感情がこみ上げる。

ここからは数時間前の話。

藍は若葉の傍にずっとついていた。

気分は奈落の底に落ちたように沈んでいる。何も考えたく無かった。考えれば悲しみも怒りも爆発しそうだったから。

病室は静かだ。電気もついていない。彼女の気分と同じように病室も暗い。

ここを見舞いに来るのは新代荘の面々。

明日は土曜日だから学校も休みなので、このことを若葉の友達を知るのは週明けになるだろう、と藍は思った。

だから、他に見舞いは来ない。はずだった。

ドアをノックする音が聞こえる。

「？」

藍は重く感じる頭を上げ、ドアの方を見る。

病室の外の廊下は電気がしっかりついている。だから暗い病室からドアの方を見れば磨りガラスの窓に人影が映る。

その人影を医者だろうか？　と思つて、どうぞ、と招き入れる。すると、音も無く滑るようにドアは横に移動する。

「……！」

藍は絶句した。

その人影の姿があらわになる。

その人は白衣に身を包んではいない。つまり医者ではない。しかし、見舞いに来る人などいないはずだった。

そこに立っている人物はどちらにも当てはまらない。

「やあ、久しぶり」

そのすらつと背の高い男性はさわやかな声で藍に言う。容姿も声に似て全体的にさわやかさを感じさせる。

「百緑……」

百緑。それがそのさわやか男の呼び名。

藍は鋭い眼孔で百緑を睨みつける。

一方、睨みつけられた百緑は藍の態度を全く気にすることなく。

「やっと名前を呼んでくれたね。電話の時は言ってくれなかったのに」

さわやかな笑みを浮かべながら言った。

「なんでここに來たの？」

「任務だよ」

「こんな綺麗な場所はあなたの仕事じゃないわよ」

百緑は困ったように頭を掻く。

「入っただい」

病室の外にはもう一人、彼と一緒に來た人が居た。彼はその人を病室に招き入れる。

入ってきたのは若葉と同一年ぐらいの女の子。目は眠そうに垂れ

ているため覇気が全く感じられない。服装は温かそうに身を包み込んでいる。

こちらは藍とは初対面だった。

「その子、誰？　というよりなにをしに来た？」

百緑は病室のドアを閉じその女の子を連れて藍の近くまで移動する。そして若葉の顔を見て視線を藍に向ける。

「この子は僕の助手の一人さ、そして僕がここにやってきたのは仕事」

「あなたがここで仕事？　なにを言ってるの？」

藍の態度はいまだ変わらず警戒心むき出しだった。

「若葉ちゃん、だったよね？」

「ええ」

百緑が隣に立つ眠そうな女の子に目で合図を送ると、彼女は若葉のベッドの近くへ寄って行く。

それを見た藍が俊敏に動き彼女の前に立ちはだかる。若葉に近くことを許すまいといった感じで。

「どういうつもり？」

「治すのさ。若葉ちゃんを」

「言っている意味がわからないわ」

「怪我を治す。そして意識も取り戻させる」

「そういうことを言いたいんじゃないわ！　なんであんたが人を助けるような真似をするのかって聞いているのよ！」

「落ち着け。ここは病院だ。静かにしろ」

百緑の冷静な言葉に藍は口をつむぐ。

病院は他の病室でも寝ている人が居る。彼の言っていることは正論だった。

「仕事だ」

百緑は、藍が落ち着きを取り戻したところで話を切り出す。

「それは『OASP』の命令？　それともあなた個人の意思？」

「……。若葉ちゃんは改変者アルターにより被害を受けた。まあ完全に被害

者の立場にいるわけだ。それならば我々の手で治療してもおかしくはないだろう？」

彼は藍の様子を窺いつつ話を続ける。

「それに、その方が助かるよね？ 藍にとってもそれがいい。それでも断るなら俺たちは大人しく引き下がるが、まあ、若葉ちゃんが目を覚ますかどうかも確かじゃないけどな。それでもいいのだったら……」

「相変わらずね……八年も経ったのに少しも変わってないわ」

「褒め言葉か」

「皮肉よ」

「私はどうしたらいい？」

二人だけで勝手に無駄なことも混ぜながら話を進めているため、待ちきれなくなった女の子が話を折る。

「藍。答える」

「好きにして……」

藍がそう言うと、百緑が女の子に命令を飛ばす。

「フェルメール。始めろ」

藍は、フェルメールとは彼女の呼び名であろうと思った。本名ではないだろうが、とも。

フェルメールが若葉に手を翳すと、暗い部屋の中で薄い青色の光が若葉を包み込む。その光に包まれた若葉の火傷や切り傷は治っていく。

藍にはその青い光が放たれなくなった時から若葉が静かに寝息を立てているので、もう安心だとわかった。

「藍。戻ってくる気は無いのか？」

百緑は任務をやり遂げたのかまたさわやかな笑みを浮かべる。

「私はもう、関わらないと言ったはずよ」

「もう貯蓄が尽きるんだろう？ 三人もの子供の面倒をもつ何年もこっちの仕事の給料ならその子達も不自由なく暮らせると思うんだがな」

「……」

「藍。君の持っている<sup>アルター</sup>改変者としての力はこっちの仕事でとても役に立つ……って言っても、それがわかった上でOASPを抜けたんだっただな。でもその子達はもう昔みたいに子供じゃないんだから、付きっ切りで世話はもう必要——」

「考えとくわ。礼は言っておく。ありがとう」

藍は百緑の一方的になっていた会話を断ち切る。

百緑は藍が帰れ、と目で訴えているので即座に退場することにした。

「この後、まだ仕事を控えていてね。そっちは……ちゃんとした任務さ。もっと汚い仕事のね」

百緑はそれだけ言ってフェルメールと病室を出て行った。戦場という名の彼らの本当の仕事場へ。

#### 四章（3） 無力な者の悪あがき

午前零時。

「来たわね」

周囲で穏やかに燃えている炎が訪問者の顔を闇から浮かび上げさせる。

その顔をミロリーはまっすぐ目で見る。対する人物の方も同じく、まっすぐミロリーの顔を見ていたからであつた。

炎がパチパチと音を立てながら木々の粉塵と火花を飛ばす。周囲は煙の匂いが充満していて鼻をくすぐる。

「あなた、一人でいいのかしら？」

ミロリーの口元に思わず笑みがこぼれる。

彼女はこの状況を楽しんでいたからであつた。

おもしろい。

初めてだ。こんな馬鹿な奴がいるとは思わなかった。もし立場が入れ替わっていたら自分は決してこの場に現れないというのに。いや、自分だけではない。おそらく、こんな面白い奴はそうそういない。何せ自分から死ぬために行くようなことは自分だったらしない。そうミロリーは心の中で高揚を感じていた。

だから仕事を優先しないで、この少年とのお遊びにつきやってもいいと思つてしまつてゐる。

（この少年は何か面白いものを必ず見せてくれる！）

「ああ」

その少年——彩人は短く返答する。

真剣な眼差し。普段だつたらこのような姿は見せない。彩人は自分らしくもないな、と思う。

「交渉決裂」

「覚悟はできている。俺はお前達にルネは渡さない」

「約束は忘れていないわね。それを邪魔する者は排除する」

戦闘が始まる。

先手をとったのはミロリー。

拳銃をポケットから引き抜き、何の迷いもなく引き金を引く。

銃声音。

彩人は彼女が拳銃をポケットから取り出したタイミングに合わせて体をそらす。銃弾は闇の中へと消えていった。

「へえー」

彼女は彩人の咄嗟の動きに感心しつつも二発目を発射。

銃弾の軌道は彩人の頭に向かう。

彩人は走りながら体勢を低くする。二発目の銃弾は走ったときに逆立った髪の毛をかすめる。そしてミロリーの周囲を右回りに回る形で走る。

「逃げているだけじゃどうしようも無いわよ！」

ミロリーの方は攻撃の手を休めようとしなない。

三発目。

その引き金が引かれるのと同時に彩人は上着の内側に隠し持っていた物を手にとり、渾身の勢いで彼女目掛けて投げつける。

銃口から飛び出した銃弾は彩人が投げたそれに当たる。

当たった途端に空気が吹き出るような音、辺りには煙とはまた違う匂いが鼻をつく。次に起こるのは爆発。

（チャンスは一度だけ！）

彩人は急いで距離をとる。日曜日の経験でどのくらいが安全圏かはだいたい掴むことができていた。

「これは……」

ミロリーがガスのおいに気づく。そしてその場からとっさに離れようとする。

しかし、引火していくスピードは人間の足の速さよりはるかに早い。

燃えている木から炎が空気中のガスに引火。引火時に炎は強い赤い輝きを放って大きさを増す。そして伸びていく。連鎖から連鎖。連鎖がいくつも起こって、それは膨張するように次々と一瞬のうちに広がる。

ミロリーへ迫っていく炎。

止まらない。

勢いは増すばかり。

（決まるか……？）

炎は全てのガスへと移った。

彩人の目の前は炎で一面となる。

「まったく、学校でこういうことしちやいけないと先生から習わなかったの？」

炎が消え去ってからミロリーの姿が現れる。

（無傷か！）

「まるで子供のおもちゃよね」

ミロリーは何事もなかったかのように立っている。

（はずした……）

火炎攻撃は彩人にとって強力な攻撃手段だった。だがそれも不発。「これで最初は逃げ切ったそうね。でも、同じ手は二度通用しないわよ」

ミロリーは銃弾が彩人の投げたガスボンベ当たった時点で後ろに大きく跳び、爆発の火が届かないと予想した距離まで離れる。

彩人の攻撃は難なくかわされてしまった。

（仕方ない……）

彼はポケットに入った包丁に手を伸ばす。ここに来る前に藍の部屋へ入って勝手に拝借してきたものだ。

「さあ、次は何を見せてくれるの？」

「くっ……」

彩人自身も包丁で立ち向かえるとは思っていない。相手はナイフ、それに拳銃を持っている。武器だけですでに差が圧倒的だ。

だが、戦うしかない。

「それは包丁？ ふふふ、おもしろいわ。本当に」

「俺は守らなくちゃならないんだ！ なんと少しでも」

彩人の声は震えていた。

恐怖の表れ。

この場面が恐くないわけがなかった。それでもどうにかしなければいけなかった。どのみちルネは連れて行かれる。ならば、戦わずにルネを引き渡すよりも、それでも戦ったほうがましだと思ったからここに彩人はいる。

「じゃあハンをあげましょう」

そう言ってミロリーは武器を仕舞った。

「どういう……つもりだ？」

「あら不満？ 坊やにとってはうれしことだと思っただけど」

ミロリーは楽しんでいる。彩人をからかいながら。

「私はね、楽しいのよ」

「？」

「一応言っておくけど私は素人じゃないのよ？ ただこんなこと初めてで、坊やが本当におもしろいのよ。一般人でありながら<sup>アルター</sup>改変者<sup>リバイス</sup>や修正者に関わって。私たちが狙っている標的<sup>ターゲット</sup>についても、あなたは守ろうとした。逃げないでね」

「だってルネは家族だから」

ルネは家族であり、守らなければならない人だということに基づいて彩人はこの場に赴き、命がけで戦っている。

「それは今の話でしょう？」

「？」

「ルネ……と呼んでいたわね、坊や<sup>ターゲット</sup>は標的のことを。まあいいわ、私も標的という枠から外して話しましょうか。坊やは数日前のこと彼女とは始めて出会って、巻き込まれた。まあ違いはないわね？」

「ああ……」

細道でルネとすれ違い、そして事件に巻き込まれた。

「なぜ逃げなかったの？ 坊やが何も知らない女の子を助けて、そして命の危機にさらされた。その時までは赤の他人だったというのに。一人で逃げればよかったのに」

「……」

もしもあの時、ルネがただ通り過ぎ去っていたら、すれ違いだけだったなら、彩人はこんなことになってはいないだろう。

「普通なら逃げていたはずよ」

「わからない。俺は——」

（——どうしてルネを助けようと思ったんだ？）

「興味が湧いたの。坊やに。これは私の勘だけど、坊やには何かがあると察したわ。だからいつもだったら真面目にしている仕事を放り投げている」

「俺はそんなたいした人間じゃない」

そうだ、と彩人は思う。

自分が記憶喪失になって、新代荘に行つて、そこでただ過ごした。夢なんてない。どうでもよくなっていた。成り行きに任せていた。高校に行つたのも、幸祐と若葉の二人についていただけ。自分で何をしようとも思わなかった。

だが、それは今週の初めで変わった。

自分でやりたいと思ったことをしたのだ。

彩人はルネを守ろうと思った。

それは紛れもなく自分の意思。誰かにそうしろと言われたのではない。流れに身をゆだねたのでもない。

逃げるか、守るか。

公平な二つの選択肢。

そこで取ったのは、『守る』という選択。

「さあ、見せてみなさい！ そして楽しませて私を！」

「守る……」

もう選択は終えた。もう後戻りはできない。

「俺はルネを守るって決めた！」

彩人は包丁を右手にミロリーへと一気に飛び込んでいき切りかかる。

ミロリーは左側に華麗に避け反撃。

「がッ！」

膝蹴りを彩人の腹部へ叩き込む。

（痛い。苦しい。でも……）

渾身の力で地をしつかりと踏む。

「そう、そうよ！ 意地を見せてみなさい！ そして坊やが持つている『異常』を見せなさい！！」

「うおおおおおおおおおおお！！」

切りかかる。

避ける。

反撃。

何度繰り返しても彩人は諦めずに立ち上がる。蹴られ殴られたりして、服を脱いだらあざだらけになっていることだろう。

（ただ闇雲に突っ込んでも意味が無い……。何かいい方法は無いのか？）

「もう体力切れ？ 若いくせに。来ないならこっちから行くわよ」

ミロリーはハンドと言ってから拳銃もナイフも使っていない。ただ肉弾戦。俊敏な動きで華麗に避けては打撃で攻撃。

今度は彼女から彩人に突っ込んでいく。

彩人は包丁を構えて防御体制。

「意味無いわよ。そんなもの」

ミロリーは生身の人間である。切り付ければダメージはある。最初に右足を振り回してきたのを、彩人は包丁の刃で防ごうとする。だが。

突然ミロリーの体勢が低くなる。蹴りは彩人の脛のところへ。バランスを崩したところへ二撃目。

今度は左足を腹部へ。この蹴りは今までの蹴りとは威力が違った。  
「——ッ」

蹴りの衝撃から彩人は声が出ず、息だけが漏れる。そしてそのまま蹴り飛ばされた。空中を舞った彼の体は地面に叩きつけられる。そして彼は雪の積もる地面にうつ伏せになったままだった。

「なによ……」

ミロリーはゆっくり近づいてくる。

「その程度……なの？ 私が坊やに感じた『異常』さは一体なんだったというの？ つまらないわ。期待はずれだわ。まだ立てる？ 立てないなら私は今ここで坊やの頭部に弾丸を撃ち込むわよ」

ミロリーの脅迫的な言葉。彩人には聞こえていたが、すぐに立つことができそうもない。

（くそッ……立てない……）

銃口は彼の脳天に向けられる。そして。

「さようなら」

雑木林に一発の銃声が響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8448y/>

---

Pravitas World——《異常世界》——

2011年12月8日12時58分発行